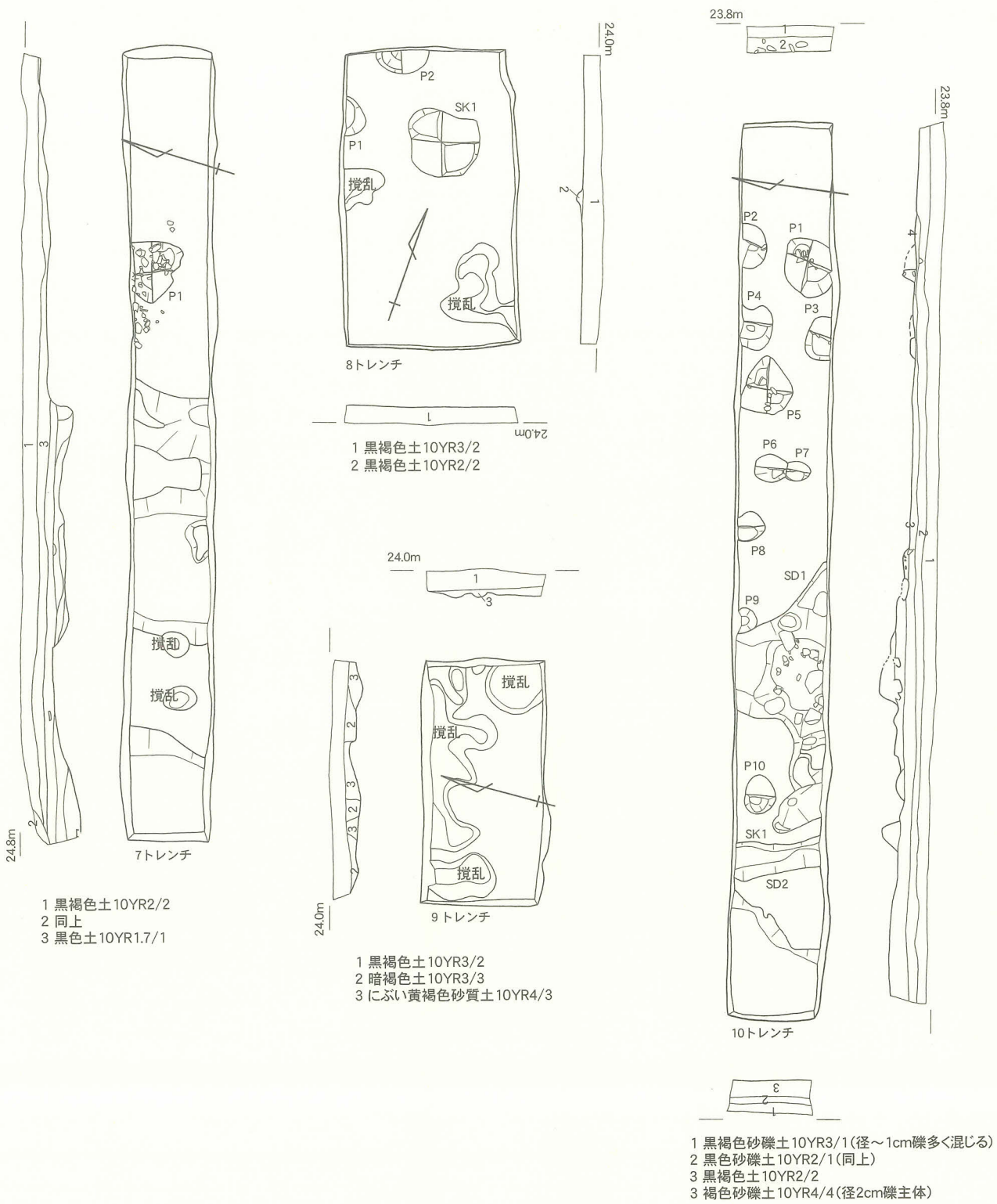


第31図 興道寺廃寺第4次調査1~6トレンチ平面図・土層断面図 (縮尺1/100)



第32図 興道寺廃寺第4次調査7~10トレンチ平面図・土層断面図(縮尺1/100)



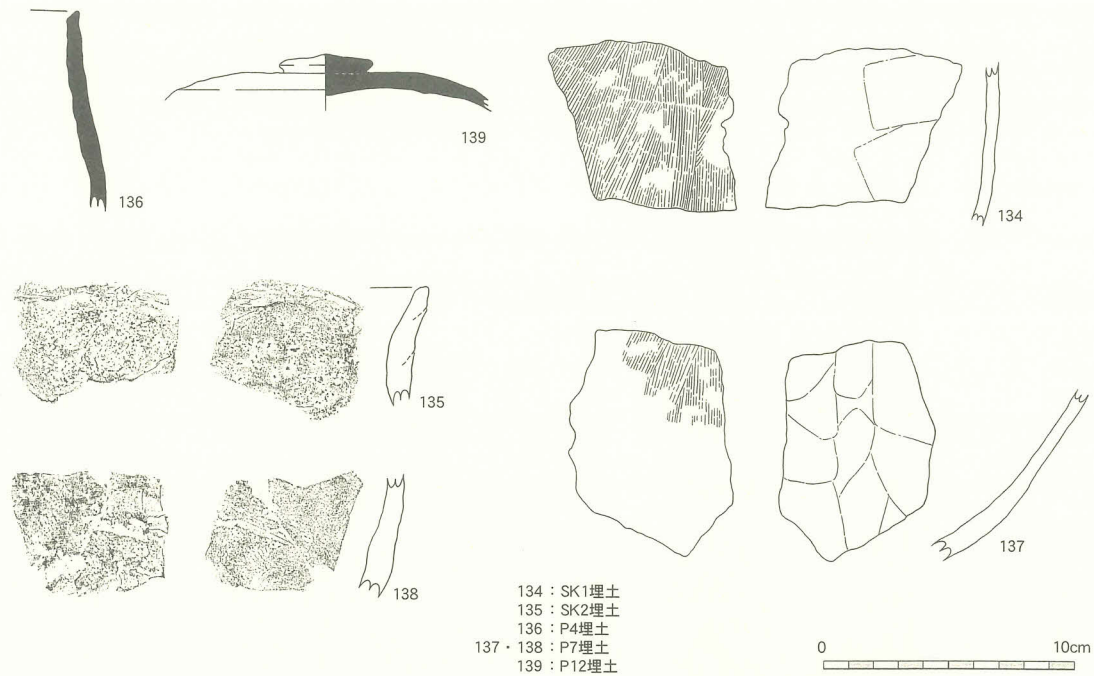
土師器1点が出土する。小穴11(P11)は平面形態が円形を呈し、南北0.22m、東西検出長0.24mを測る。検出面からの深さは0.16mと浅い。断面形状は緩やかな弧状となる。黒褐色土を埋土に持つ。小穴12(P12)は平面形態が崩れた円形を呈し、南北0.62m、東西0.54m、検出面からの深さ0.30mを測る。断面形状は丸みを帯びた尖底状となる。黒褐色土を埋土に持つ。須恵器杯B蓋片1点(139)、土師器甕片2点、製塩土器片2点が出土する。

小穴13(P13)は平面形態が円形を呈し、南北検出長0.42m、東西検出長0.14mを測る。トレンチ北壁土層断面で確認された深さは0.51m。断面形状は箱型である。黒褐色土を埋土に持つ。製塩土器片1点が出土。

小穴14(P14)は平面形態が円形を呈し、南北0.73m、東西検出長0.40m、検出面からの深さ0.28mを測る。断面形状は丸みを帯びた箱型となる。地山土が混じる黒褐色土を埋土に持つ。須恵器杯B蓋と思われる土器片1点、製塩土器片2点が出土。小穴15(P15)は平面形態が円形を呈し、南北0.47m、東西0.50m、検出面からの深さ0.21mを測る。断面形状は弧状となる。地山土が若干混じる黒褐色土を埋土に持つ。律令期の須恵器杯2点、土師器甕片2点、製塩土器片2点が出土。小穴16(P16)は平面形態が崩れた楕円形を呈し、南北0.76m、東西0.52m、検出面からの深さ0.31mを測る。断面形状は丸みを帯びた尖底状となる。黒褐色土を埋土に持つ。土師器甕片2点、製塩土器片1点が出土。小穴17(P17)は平面形態が円形を呈し、南北検出長0.28m、東西検出長0.10mを測る。検出面からの深さは0.09mと極めて浅い。断面形状は浅く緩やかな弧状となる。黒褐色土を埋土に持つ。小穴18(P18)は平面形態が円形を呈し、南北0.46m、東西0.52m、検出面からの深さ0.16mを測る。断面形状は丸みを帯びた平底状となる。黒褐色土を埋土に持つ。土師器甕片1点、製塩土器片1点が出土。小穴19(P19)は平面形態が円形を呈し、南北0.24m、東西検出長0.22mを測る。検出面からの深さは0.06mと極めて浅い。断面形状は平底状となる。黒褐色土を埋土に持つ。製塩土器片1点が出土。小穴20(P20)は平面形態が円形を呈し、南北0.39m、東西0.42m、検出面からの深さ0.10mを測る。断面形状は西側が深くなる浅い尖底状となる。地山土が混じる黒褐色土を埋土に持つ。小穴21(P21)は平面形態が円形を呈し、南北0.63m、東西検出長0.36mを測る。検出面からの深さは0.11mと浅い。断面形状は南側が浅い平底となり、北側が一段落ち込んで平底となる。黒褐色土を埋土に持つ。小穴22(P22)は平面形態が崩れた円形を呈し、南北0.38m、東西検出長0.40m、検出面からの深さ0.26mを測る。断面形状は丸みを帯びた尖底状となる。小礫が多く混じる黒褐色土を埋土に持つ。製塩土器片1点が出土。小穴23(P23)は平面形態が楕円形を呈し、南北0.32m、東西0.42m、検出面からの深さ0.21mを測る。断面形状は箱型となる。黒褐色土を埋土に持つ。小穴24(P24)は平面形態が円形を呈し、径0.27m、検出面からの深さは0.18mを測る。断面形状は深碗状となる。黒褐色土を埋土に持つ。土師器杯1点、甕片1点が出土。小穴25(P25)は平面形態が円形を呈し、南北0.37m、東西0.27mを測る。検出面からの深さは0.04mを極めて浅い。断面形状は平底状となる。黒褐色土を埋土に持つ。律令期の須恵器杯B蓋片1点、赤彩土師器片1点が出土。

## 遺物

134は土師器甕胴部。内面に斜め上方に向けた粗いケズリ、外面に縦ハケを施す。外面には煤が付着する。135は製塩土器口縁部。ナデを施し、外面に指圧痕や輪積み痕が見られる。胎土に0.3cm大の石英がやや混じる。136は須恵器の口縁部。器種は不明である。回転ナデを施すが、外面には全体的に自然釉が付着する。137は土師器甕胴部。底部に近い部位と考えられ、内面にやや粗いケズリ、外面には縦ハケを施す。138は製塩土器。内面にナデを施す。器厚は一定していない。139は須恵器杯B蓋。天井部外面を回転ヘラ切り後、擬宝珠つまみを貼り付ける。8世紀前葉の時期と考えられる。



第34図 興道寺廃寺第4次調査1 トレンチ出土土器実測図 (縮尺 1/3)

### 第3項 2 トレンチ

#### 基本層序

調査地は水田であり、地表面の標高 26.0m。上層から耕作土となる黒褐色土 (層厚 0.15~0.5m)、遺物包含層となる黒褐色土 (層厚 0.1~0.2m) を経て、標高 25.7m で地山土、褐色粘質土層上面へと至る。地山面の傾斜はほとんど見られない。なお、トレンチ北半は攪乱により遺構の大半が失われる。

#### 遺構

褐色粘質土層上面において土坑 8 基 (SK 1~8)、小穴 3 基 (P 1~3) が検出されている。

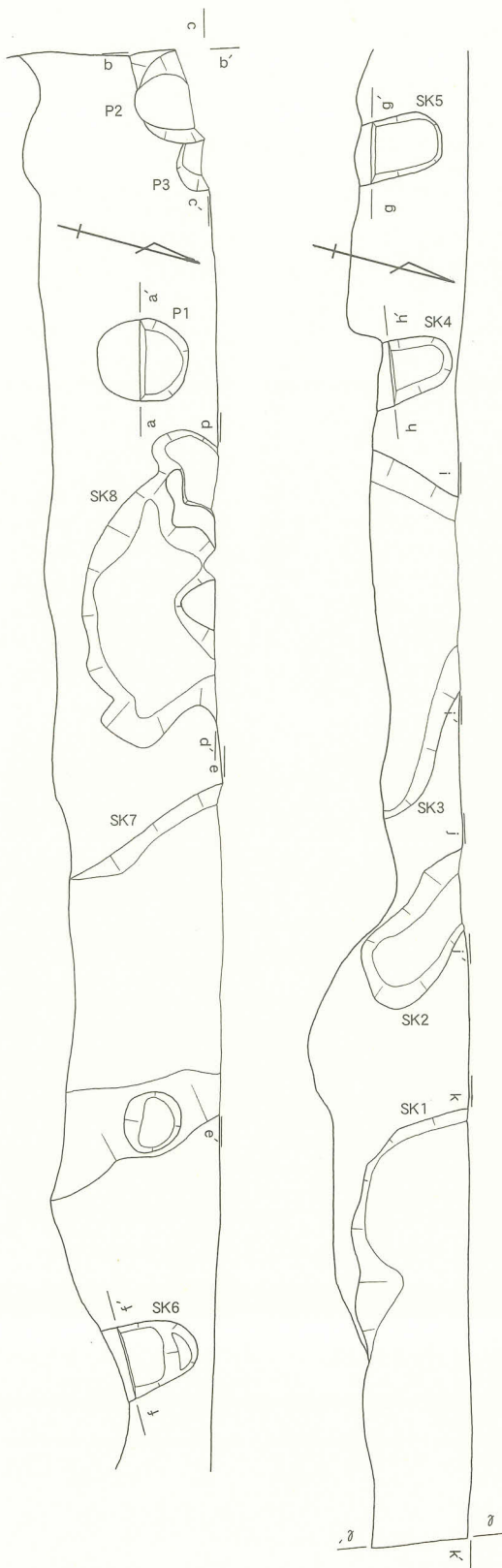
#### 土坑

土坑 1 (SK 1) は平面形態が方形を呈するものと思われ、南北検出長 0.76m、東西検出長 2.94m、検出面からの深さ 0.36m を測る。断面形状は底面が平坦となる。黒褐色土を埋土に持つ。須恵器杯 H 2 点、杯 A 5 点、杯 B 蓋 5 点 (140・141)、つまみを有しない杯蓋 1 点、甕 3 点、壺 2 点、土師器甕 6 点、赤彩土師器皿 6 点、製塩土器 41 点 (142) が破片で出土する。

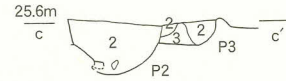
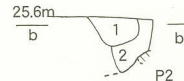
土坑 2 (SK 2) は平面形態が北西に向けて延びる溝状を呈する。検出長 1.06m、幅 0.50m、検出面からの深さ 0.27m を測る。断面形状は箱型となる。黒褐色土を埋土に持つ。出土遺物はない。

土坑 3 (SK 3) は平面形態が不定形を呈し、トレンチ外、南側に広がりを持つ。南北検出長 0.60m、東西検出長 2.39m、検出面からの深さ 0.33m を測る。断面形状は平底状であるが、西側がやや深くなる。地山土が混じる黒褐色土を埋土に持つ。須恵器杯 H 1 点、杯 A 5 点、杯 B 2 点、杯 B 蓋 2 点 (143)、甕 2 点 (144)、土師器杯と思われる土器 1 点、赤彩土師器 1 点、土師器甕 15 点、製塩土器 67 点 (145) がいずれも破片で出土する。

土坑 4 (SK 4) は平面形態が南東に向けて延びる溝状を呈し、検出長 0.57m、幅 0.42m、検出面からの深さ 0.11m を測る。断面形状は浅い箱型となる。地山土が混じる黒褐色土を埋土に持つ。弥生土器高杯脚部 1 点、土師器杯と思われる土器 1 点、赤彩土師器 1 点、土師器甕 1 点、製塩土器 6 点が破片で出土。



1 黒褐色土 10YR2/2 (地山土混じる)



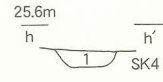
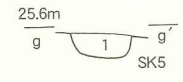
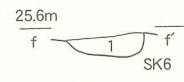
1 黒褐色粘質土 10YR2/3  
2 黒色粘質土 10YR1.7/1 (地山土混じる)  
3 暗褐色粘質土 10YR3/3



1 黒褐色土 10YR2/2 (地山土混じる)  
2 同上 (地山土ブロック混じる)



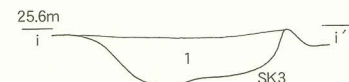
1 黒褐色土 10YR2/2 (地山土混じる)



1 黒褐色土 10YR2/2 (地山土混じる)

1 黒褐色土 10YR2/3 (地山土混じる)

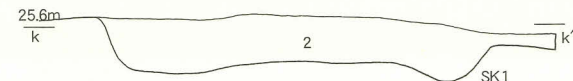
1 黒褐色土 10YR2/3 (地山土混じる)



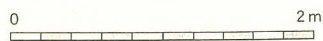
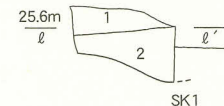
1 黒褐色土 10YR2/2 (地山土混じる)



1 黒褐色土 10YR2/2 (地山土混じる)



1 黒褐色土 10YR3/2  
2 黒褐色土 10YR2/2 (地山土混じる)



第35図 興道寺廃寺第4次調査2トレンチ遺構平面図・土層断面図 (縮尺 1/50)

土坑5 (SK5) も平面形態は南東に向けて延びる溝状を呈する。検出長 0.63m、幅 0.40m、検出面からの深さ 0.16mを測る。断面形状は箱型となる。地山土が混じる黒褐色土を埋土に持つ。須恵器杯H蓋 1点、甕 1点、土師器甕 5点、製塩土器 28点が破片で出土。

土坑6 (SK6) についても平面形態が南東に向けて延びる溝状を呈し、検出長 0.56m、幅 0.49m、検出面からの深さ 0.14mを測る。断面形状は丸みを帯びた箱型となる。地山土が混じる黒褐色土を埋土に持つ。須恵器杯A 1点、須恵器甕 1点、土師器甕 2点、製塩土器 3点が破片で出土する。

土坑7 (SK7) は平面形態が幅の広い溝状を呈し、トレンチ外の北西、南東に向かって伸張する。東西検出幅 1.94m、検出面からの深さ 0.29mを測る。断面形状は平底状であるが、中央部で尖底状に若干深くなる。地山土が混じる黒褐色土を埋土に持つ。須恵器杯H蓋 2点、杯A 2点、杯B 3点、甕 4点 (146)、壺 1点 (147)、土師器甕 5点、製塩土器 60点 (148・149) がいずれも破片で出土する。

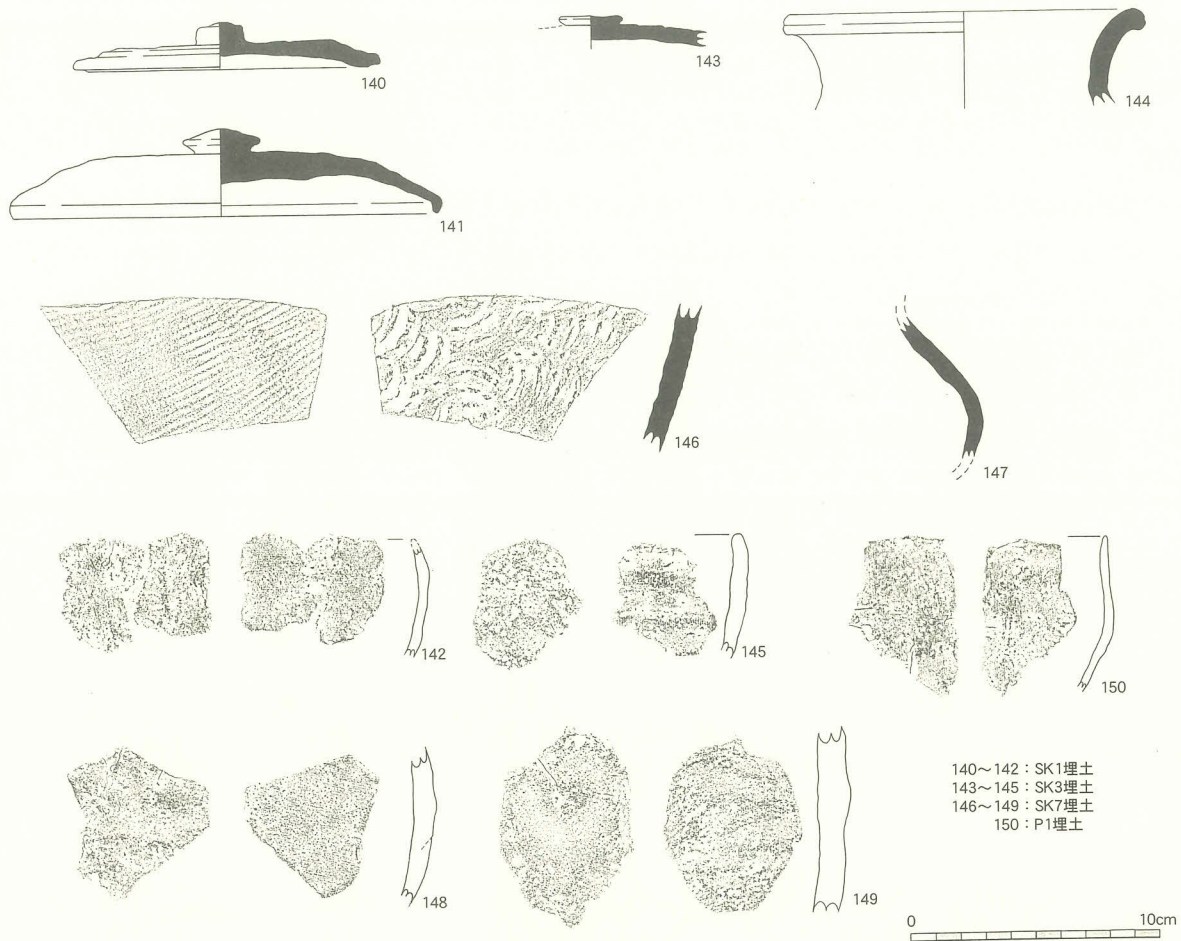
土坑8 (SK8) は平面形態が不定形を呈し、トレンチ外の北方に広がりを持つ。南北検出長 0.91m、東西検出幅 1.95m、検出面からの深さ 0.19mを測る。断面形状は凹凸が顕著で、部分的に地山の掘り残しにより土手状に造る。地山土が多く混じる黒褐色土を埋土に持つ。須恵器甕 2点、土師器甕 7点、甑 1点、製塩土器 58点が破片で出土する。

## 小穴

小穴1 (P1) は平面形態が円形を呈し、南北 0.56m、東西 0.63mを測る。検出面からの深さは 0.40mと深い。断面形状は箱型となる。地山土が混じる黒褐色土を埋土に持つ。須恵器杯H蓋 2点、土師器甕 7点、甑 1点、製塩土器 58点 (150) がいずれも破片で出土。小穴2 (P2) の平面形態ははっきりしない。南北検出長 0.38m、東西検出長 0.65m、検出面からの深さ 0.29mを測る。断面形状は弧状となる。黒褐色土を埋土に持つ。出土遺物はない。小穴3 (P3) は平面形態が円形を呈し、南北検出長 0.17m、東西検出長 0.32m、検出面からの深さ 0.14mを測る。断面形状は平底状の浅い弧状となる。地山土が混じる黒色土、暗褐色粘質土を埋土に持つ。出土遺物はない。

## 遺物

140・141 は須恵器杯B蓋。140は復元口径 10.8 cm、器高 1.8 cmを測る。つまみ貼り付け後に天井部外面に不定方向ナデを施している。天井部は扁平な形状を呈し、つまみはボタン状である。天井部から口縁部に向けて肥厚し、口縁部付近は段をなして再び肥厚する。口縁端部は面取りを施す。9世紀中葉に属すると思われる。141は口径 17.0 cm、器高 3.5 cmを測る。擬宝珠つまみを貼り付け、天井部は丸みを帯びるが器高は低い。天井部から口縁部に向けて徐々に器厚が薄くなる。口縁端部はやや内側に屈曲する。胎土には 0.4 cm大の石英がやや混入する。8世紀前半の時期と思われる。142は製塩土器口縁部。ナデがみられ、口唇部はやや内傾する。器厚は薄い。143は須恵器杯B蓋の天井部。回転ヘラ切り痕が残り、つまみを貼り付ける。つまみはふくらまず扁平な形状を呈する。8世紀後半の時期に属するとみられる。144は須恵器甕口縁部で復元口径 13.6 cmを測る。口縁部はやや外反し、口縁端部はわずかに段を作るものの丸く収める。145は製塩土器。外面に輪積み痕を残し、内面にナデの痕跡が見られる。146は須恵器甕胴部。内面に同心円状当て具痕、外面に平行文叩きが残る。147は須恵器壺肩部。短頸壺と考えられる。肩部に蓋を重ね焼きした状態での自然釉の付着が見られる。148～150は製塩土器。148は指圧痕や輪積み痕が残る。149は外面に指圧痕、内面にナデが見られる。器厚は肥厚する。150は142と同様、器厚は薄い。口唇部からやや屈曲して底部に至り、丸底を呈する。



第36図 興道寺廃寺第4次調査2トレンチ出土土器実測図 (縮尺 1/3)

#### 第4項 3トレンチ

##### 基本層序

調査地は水田であり、地表面の標高 26.1m。上層から耕作土となる黒褐色土 (層厚 0.2~0.3m)、攪乱層となる礫、コンクリート片が混じる黒色系砂礫土 (層厚 0.2~0.3m) を経て、標高 25.7m で地山土、にぶい黄褐色粘質土層上面へと至る。ただし、地山面の大半が削平を受け、地山下位層の砂礫層が露頭する。遺構、遺物は確認されていない。

#### 第5項 4トレンチ

##### 基本層序

調査地は畑地であり、地表面の標高 26.5m。耕作土となる黒褐色土 (層厚 0.3m) 下、標高 26.2m 付近で地山層、褐色砂質土層上面へと至る。ただし、北側、南側では地山面が削平され、この地山面が島状に残る。削平部分には小礫が混じる黒褐色土、暗褐色土が堆積するが、出土遺物がないことから、削平が行われた時期は不明。遺構は確認されていない。

#### 第6項 5トレンチ

##### 基本層序

調査地は畑地であり、地表面の標高 25.5~25.9m。上層から耕作土となる灰黄褐色土 (層厚 0.2~0.4m)、水平堆積する遺物包含層、黒色土、黒褐色土、褐色粘質土 (いずれも層厚 0.1~0.2m) を経て、標



高 25.3m付近で地山層、暗褐色土層上面へと至る。地山面の傾斜は認められないが、トレンチ南端、北東端において後世の攪乱が見られる。

## 遺構

暗褐色土層において土坑 1 基 (SK 1)、小穴 15 基 (P 1～P 15) が検出されている。

## 土坑

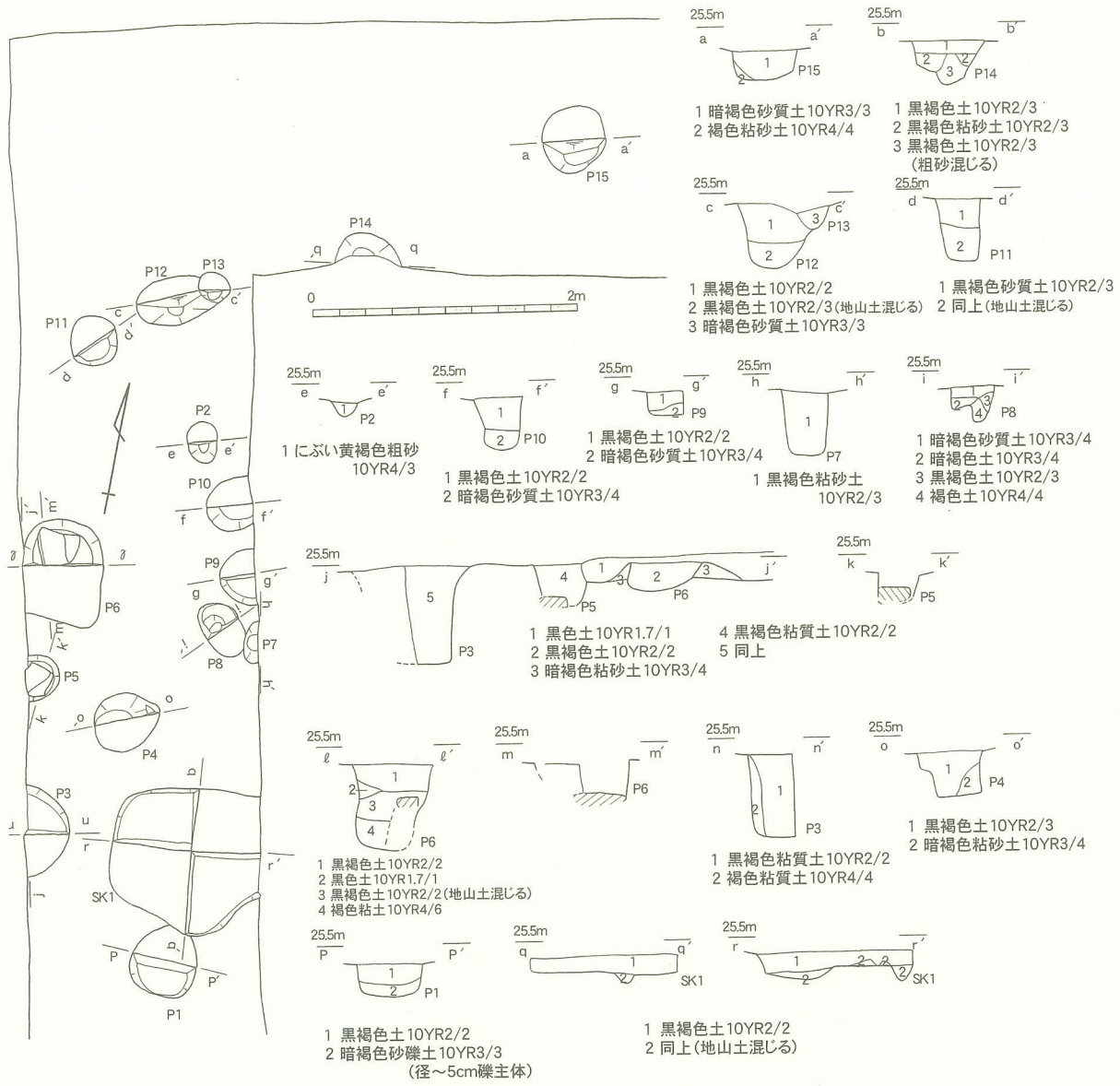
土坑 1 (SK 1) は平面形態が不定形を呈し、南北検出長 0.62m、東西検出長 0.64m、検出面からの深さ 0.22m を測る。小穴 1 を切る。断面形状は直立する壁面を持つ箱型で、底面では部分的に弧状に深くなる。黒褐色土を埋土に持つ。須恵器杯 H 片 2 点、杯 H 蓋片 1 点、土師器甕片 3 点、製塩土器片 1 点が出土している。

## 小穴

小穴 1 (P 1) は平面形態が円形を呈し、南北 0.54m、東西 0.49m、検出面からの深さ 0.25m を測る。断面形状は底面が緩やかな弧状となる箱型である。上位は黒褐色土、下位に暗褐色砂礫土を埋土に持つ。小穴 2 (P 2) は平面形態が楕円形を呈し、南北 0.31m、東西 0.23m を測る。検出面からの深さは 0.11m と浅い。断面形状は丸みを帯びた尖底状となる。にぶい黄褐色粗砂を埋土に持つ。小穴 3 (P 3) は平面形態が円形を呈し、南北検出長 0.70m、東西検出長 0.34m を測る。検出面からの深さは 0.74m と深い。断面形状は箱型となる。黒褐色粘質土を埋土に持つ。小穴 4 (P 4) は平面形態がいびつな円形を呈し、南北 0.44m、東西 0.49m、検出面からの深さ 0.36m を測る。断面形状は箱型となる。黒褐色土とともに地山土である暗褐色を埋土に持つ。

小穴 5 (P 5) は平面形態が円形を呈し、南北 0.34m、東西検出長 0.26m を測る。検出面からの深さは 0.32m 以上。断面形状は丸みを帯びた箱型。底面に 0.25m 程の自然礫を礎石状に設置する。黒褐色粘質土を埋土に持つ。古墳時代後期の土師器甕片 1 点が出土。小穴 6 (P 6) は平面形態が崩れた円形を呈し、南北 0.78m、東西検出長 0.60m を測る。検出面からの深さは 0.27m 以上。断面形状は箱型になるものと思われる。0.3m 強の自然礫を、平坦面を上に向けて礎石状に配し、小穴の周囲に地山土を盛る。黒褐色土を埋土に持つ。古墳時代後期の土師器甕片 2 点、製塩土器片 1 点が出土。小穴 5 とともに柱穴となる可能性が高い。

小穴 7 (P 7) は平面形態が円形を呈し、南北 0.31m、東西検出長 0.11m を測る。小穴 8 を切る。検出面からの深さは 0.48m と深い。断面形状は丸みを帯びた箱型。黒褐色粘砂土を埋土に持つ。小穴 8 (P 8) は平面形態が楕円形を呈し、南北 0.45m、東西 0.29m、検出面からの深さ 0.28m を測る。断面形状は西側が一段深くなる丸みを帯びた尖底状となる。ブロック状の暗褐色土、黒褐色土、褐色土を埋土に持つ。小穴 9 (P 9) は平面形態が円形を呈し、南北 0.39m、東西検出長 0.36m、検出面からの深さ 0.17m を測る。断面形状は箱型。黒褐色土、暗褐色砂質土を埋土に持つ。小穴 10 (P 10) は平面形態が円形を呈し、南北 0.40m、東西検出長 0.36m を測る。検出面からの深さは 0.39m と深い。断面形状は丸みを帯びた箱型となる。黒褐色土、暗褐色砂質土を埋土に持つ。小穴 11 (P 11) は平面形態が円形を呈し、径 0.37m を測る。検出面からの深さは 0.46m と深い。断面形状は箱型。地山土が混じる黒褐色土を埋土に持つ。土師器甕片 4 点が出土。小穴 12 (P 12) は平面形態が長楕円形を呈し、南北 0.36m、東西検出長 0.61m を測る。検出面からの深さは 0.49m と深い。断面形状は丸みを帯びた尖底状となる。黒褐色土を埋土に持つ。土師器甕片 2 点が出土。小穴 13 (P 13) は平面形態が円形を呈し、南北 0.26m、東西 0.29m を測る。小穴 12 を切る。検出面からの深さは 0.16m。断面形状は弧状。暗褐色砂質土を埋土に持つ。小穴 14 (P



第37図 興道寺廃寺第4次調査5トレンチ遺構平面図・土層断面図(縮尺1/50)

14) は平面形態が円形を呈し、南北検出長 0.16m、東西検出長 0.50m、検出面からの深さ 0.28mを測る。断面形状は丸みを帯びた尖底状。ブロック状の黒褐色土を埋土に持つ。土師器甕片 1点が出土。小穴 15 (P15) は平面形態が円形を呈し、径 0.49m、検出面からの深さ 0.22mを測る。断面形状は箱型で底面が緩やかな弧状となる。暗褐色砂礫土を埋土に持つ。土師器甕片 1点、製塩土器片 2点が出土。

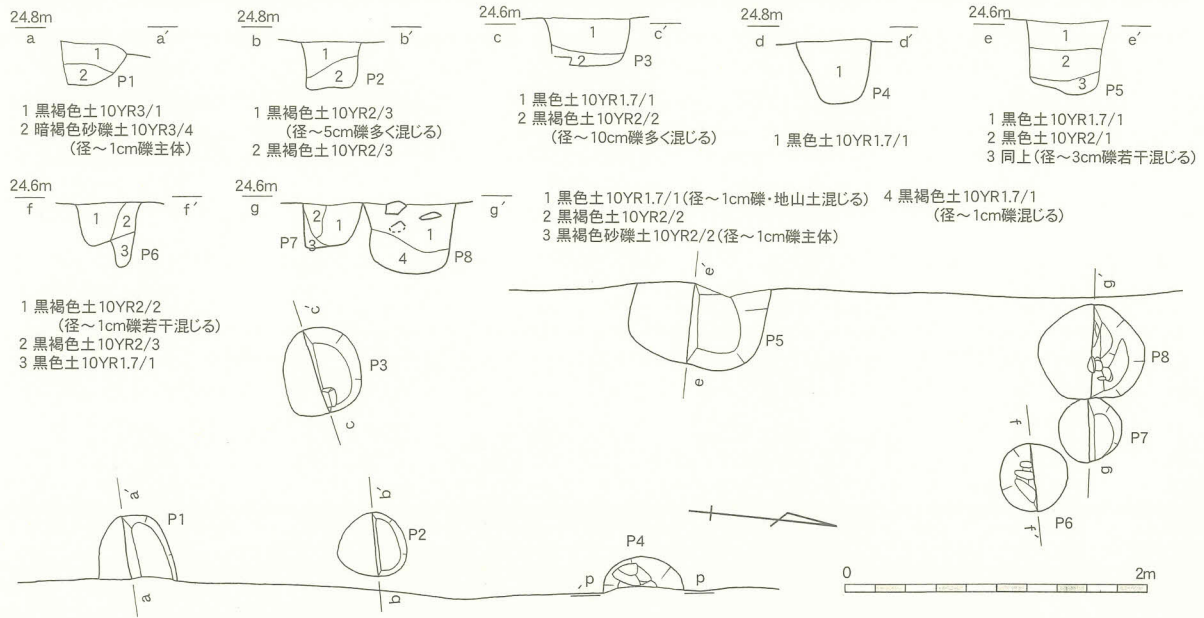
### 第7項 6トレンチ

#### 基本層序

調査地は畑地であり、地表面の標高 24.9~25.0m。耕作土となる黒褐色土(層厚 0.2~0.3m)下、標高 24.7~24.8mで地山土、黄褐色粘質土層上面へと至る。地山面の傾斜はほとんど見られない。

#### 遺構

黄褐色粘質土層上面において小穴 8基 (P1~8) が検出されている。



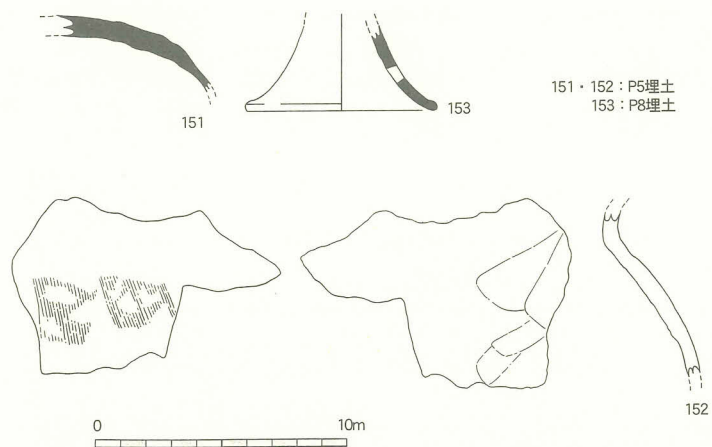
第38図 興道寺廃寺第4次調査6 トレンチ遺構平面図・土層断面図 (縮尺1/50)

## 小穴

小穴1 (P1) は平面形態が円形を呈し、南北0.48m、東西検出長0.42m、検出面からの深さ0.28mを測る。断面形状は弧状となる。黒褐色土、暗褐色砂礫土を埋土に持つ。土師器甕片1点が出土。小穴2 (P2) は平面形態が円形を呈し、南北0.47m、東西0.43m、検出面からの深さ0.29mを測る。断面形状は箱型。黒褐色土を埋土に持ち、上位に小礫が多く混じる。製塩土器片1点が出土。小穴3 (P3) は平面形態が円形を呈し、南北0.52m、東西0.57m、検出面からの深さ0.31mを測る。断面形状は丸みを帯びた箱型となる。黒色土を埋土に持ち、底面直上に拳大の礫が混じる黒褐色土を持つ。小穴4 (P4) は平面形態が円形を呈し、南北0.53m、東西検出長0.19m、検出面からの深さ0.41mを測る。断面形状は深い碗状となる。黒色土を埋土に持つ。土師器甕片1点が出土。小穴5 (P5) は平面形態が隅丸方形を呈し、南北0.89m、東西検出長0.53m、検出面からの深さ0.47mを測る。断面形状は箱型で、底面が丸みを帯びる。黒色土を埋土に持つ。須恵器杯H蓋片1点 (151)、土師器甕片6点 (152) が出土。小穴6 (P6) は平面形態が円形を呈し、径0.45m、検出面からの深さは0.43mを測る。断面形状は不定形で、東側がさらに深くなる。黒褐色土、黒色土を埋土に持つ。須恵器甕片1点が出土。小穴7 (P7) は平面形態が円形を呈し、径0.42m、検出面からの深さ0.29mを測る。断面形状は箱型で、底面は東側がわずかに深くなる。柱当たりとなる部分に黒色土、掘り方となる部分に小礫が混じる黒褐色土を埋土に持つ。小穴8 (P8) は平面形態が円形を呈し、南北0.71m、東西0.62m、検出面からの深さ0.46mを測る。断面形状は箱型で、底面が緩やかな弧状となる。小礫、地山土が混じる黒褐色土を埋土に持つ。須恵器杯H蓋1点、器種不明1点 (153)、土師器甕片3点が出土。

## 遺物

151は須恵器杯H蓋。回転ヘラ削りを施す。天井部から緩やかな丸みを帯びて口縁部に至る。TK43型式並行期と思われる。152は土師器甕。胴部上半から頸部付近まで残存しており、頸部はナデ、内面には斜め上方へのやや粗いケズリ、外面にはハケメを施す。口縁部がくの字状に外反するものと思われる。153は須恵器脚部。器種は不明である。径0.6~0.8cmの透孔を穿つ。脚部は外方に開き、脚端部を丸く収める。



第39図 興道寺廃寺第4次調査6トレンチ出土土器実測図(縮尺1/3)

## 第8項 7トレンチ

### 基本層序

調査地は畑地であり、地表面の標高24.6~24.8m。上層から耕作土となる黒褐色土(層厚0.2~0.4m)、遺物包含層となる黒色土(層厚0.1~0.2m)を経て、標高24.4~24.5mで地山土、明黄褐色粘質土層上面へと至る。トレンチ西端では瓦溜まりとなり、最下面、標高23.9m前後で褐色砂礫土層へと至る。

### 遺構

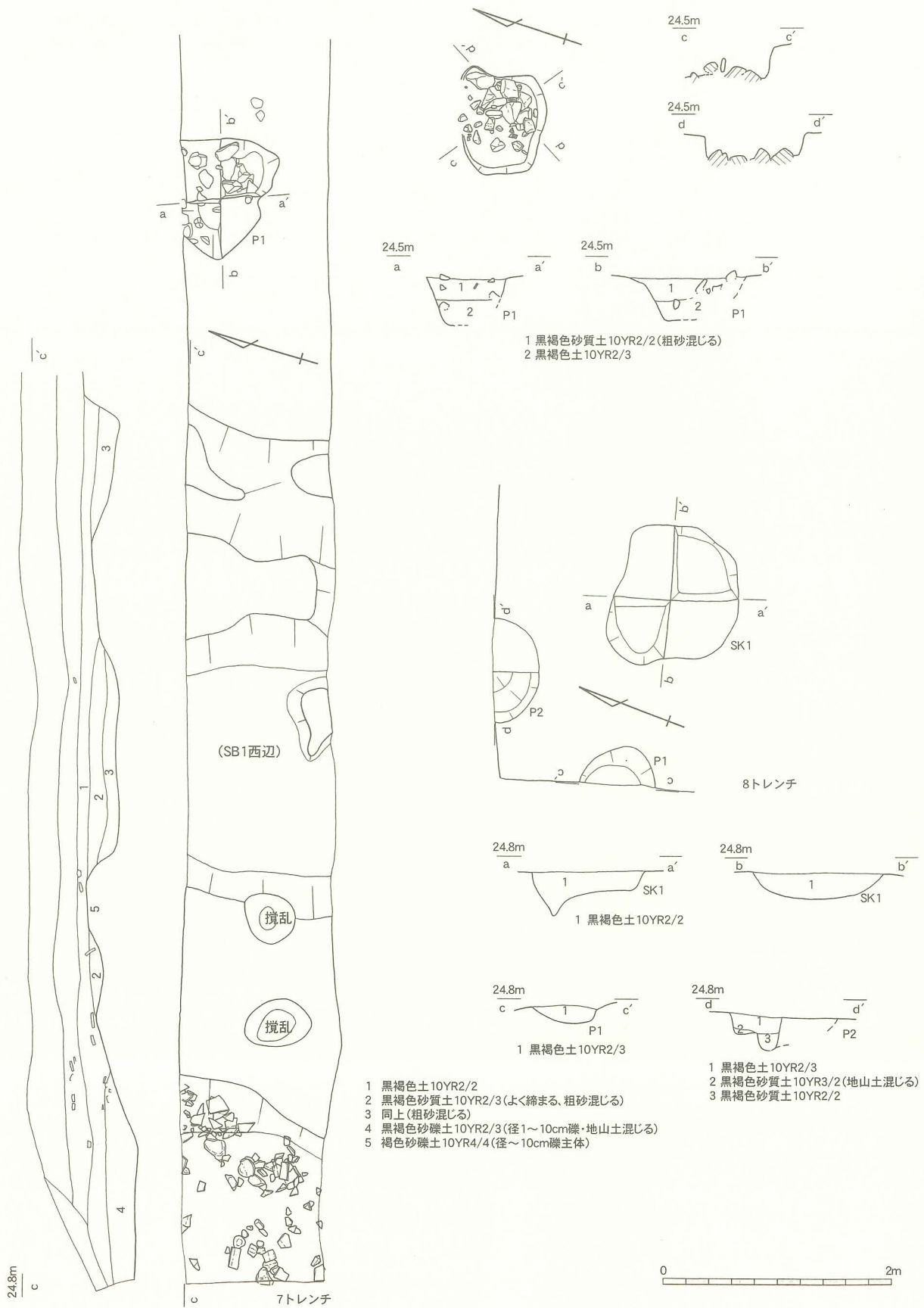
明黄褐色粘質層上面において基壇遺構1(SB1)、礎石掘り方1(P1)が検出されている。

### 基壇遺構

基壇遺構(SB1)は第1次調査1トレンチで確認された土壇状遺構、第2次調査2トレンチで確認された地山削り出しの基壇遺構1と同一遺構であり、基壇面および基壇南側の西辺に当たる。基壇面南西部を斜めに横断する形で検出した。基壇の検出規模は南北検出長1.38m、東西5.72mを測る。基壇上面の標高は約24.4~24.5m。基壇面は地山層をそのまま基壇構成土とするが、基壇面上に盛土、版築が存在したかは不明。検出基壇面には礎石掘り方1基(P1)が分布する。

基壇西辺は基壇面の削平により既に失われているため、位置、平面形態、断面形状は不明。トレンチ東端から8m付近に基壇西辺が位置したものと思われる。第2次調査2トレンチで確認されたように基壇面からさらに西側に向けて広く地山層を削り出して構築したものと考えられる。

不定形な平面形態、断面形状を持つ溝状を呈する攪乱部分には粗砂が混じる黒褐色土が堆積する。この西側では地山面が島状に立ち上がり、さらに西側に向けて緩やかに標高を減じる。この緩やかな傾斜面からトレンチ西端にかけての地山面(標高23.9m)直上において瓦片が東西1.7mの範囲にまとまって分布し、さらに西側に広がりを持つものと思われる。軒丸瓦2点(161・162)、軒平瓦1点(163)、丸瓦52点(164~169)、平瓦片191点(170~175)、瓦小片26点、須恵器杯H1点(154)、底部に回転ヘラ切りを残す椀2点(155)、土師器甕2点、土師器椀1点(156)、製塩土器5点(157・158)が破片で出土。この部分には黒褐色砂礫土が0.2~0.25mほど堆積する。攪乱部分からこの瓦溜まりの上位にかけて黒色土が薄く水平堆積するが、特に瓦溜まりの上位において細片化した瓦、土器が多量に堆積する。軒丸瓦5点(176~178)、軒平瓦2点(179)、隅落とし平瓦3点(180~182)、丸瓦203点(183・184)、平瓦602点(185~191)、瓦小片42点、須恵器杯H2点、杯H蓋1点、律令期に伴う杯6点、須恵器椀1点(159)、杯蓋5点、甕7点、土師器甕18点、赤彩土師器盤6点、底部に糸切りを残す皿1点、製塩土器30点(160)、土錘1点がいずれも破片で出土。



第40図 興道寺廃寺第4次調査7・8トレンチ遺構平面図・土層断面図(縮尺1/50)

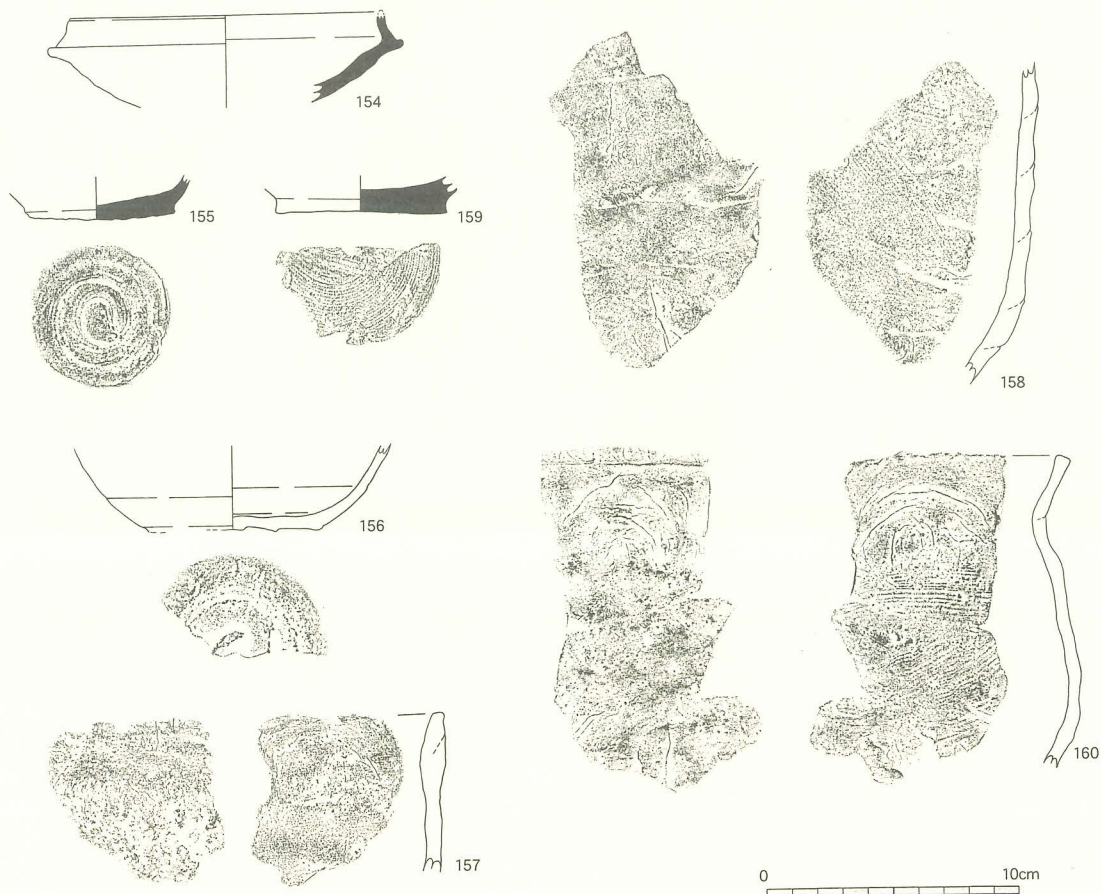
## 礎石掘り方

礎石掘り方1 (P1) は平面形態がいびつな円形を呈し、南北検出長 0.84m、東西 1.04m、検出面からの深さ 0.37mを測る。断面形状は直線的に底面へと至り、平底となる。黒褐色土を埋土に持つ。底面には拳大の礫がまとまって分布する。礎石の根固石を構成するものと思われる。丸瓦片 5点、平瓦片 11点、瓦小片 4点、須恵器杯H蓋片 1点、甕片 1点、製塩土器片 3点が出土する。

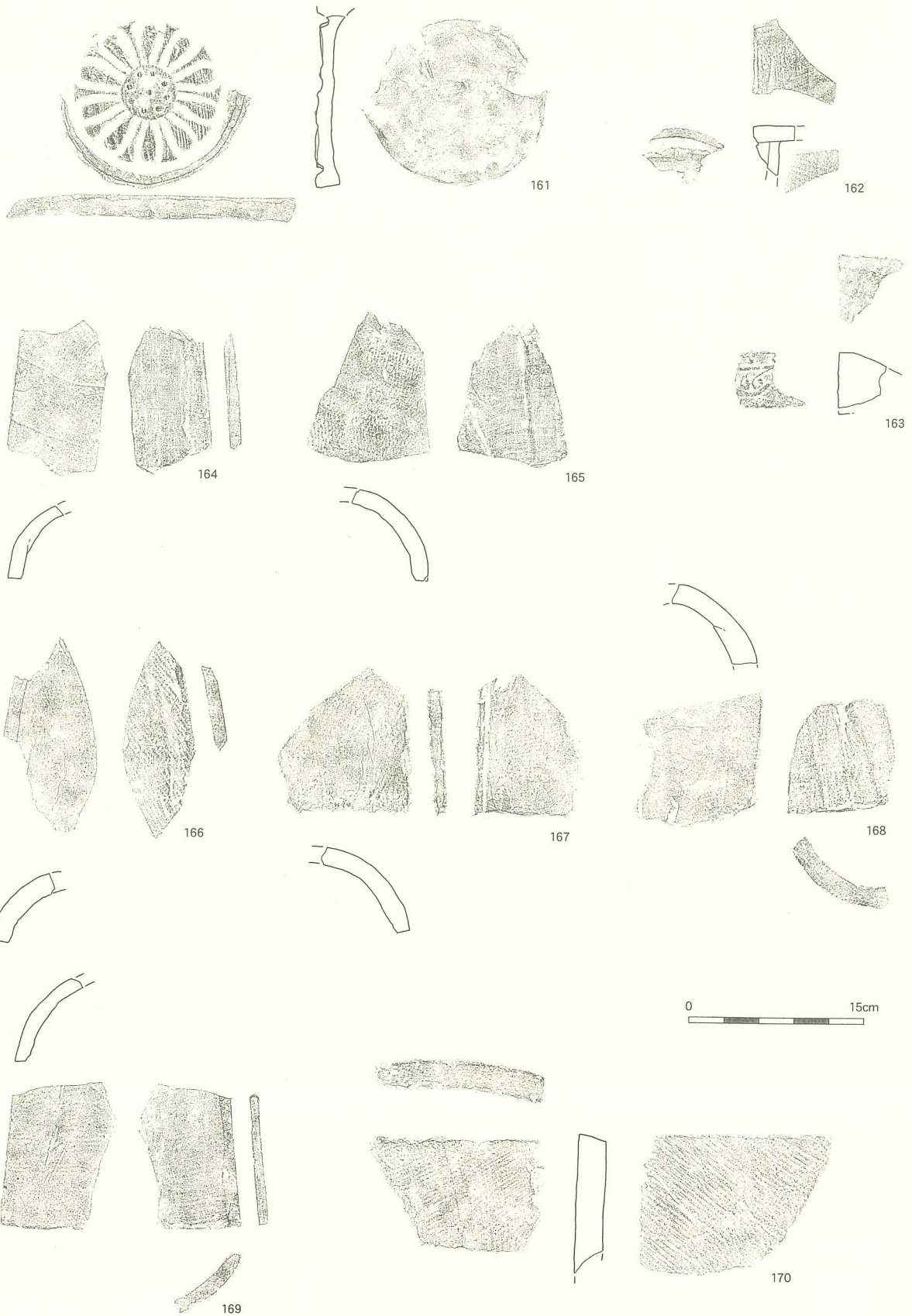
## 遺物

154 は須恵器杯H。復元口径は 12.4 cm。立ち上がりはやや外反する。受け部には弱い沈線を施す。TK 209 型式の範疇に収まるものと思われる。155 は須恵器碗の底部。底径 5.7 cmを測る。底部は回転へら切りを施す。へら切りによって底部外側がややいびつになる。156 は土師器碗。復元底径 6.9 cm。回転ナデ後に底部内面を不定方向ナデで調整する。平底の底部は回転へら切りを施す。157・158 は製塩土器。157 は輪積み痕のナデ消しを施す。体部に比べて口唇部がやや肥厚する。158 の外面には明瞭な輪積み痕が残る。内面は強いナデが見られる。159 は須恵器碗の底部。底径 6.8 cmを測る。底部は回転糸切りを施す。155・156・159 は 10 世紀後半の時期に属すると思われる。160 は製塩土器。頸部を有して体部が張る、甕型状を呈する。輪積み痕や指圧痕が見られ、体部内面はナデ調整を施す。口縁部は強く外反し、口縁端部を面取りする。

161、176、177 は素弁十葉蓮華文軒丸瓦。161 は瓦当復元径 16.6 cm、中房径 4.5 cm、外縁幅 1.0 cmを測る。瓦当は 1.2 cmと薄く作り、中房には径 0.8 cmほどの蓮子を 1 + 8に配する。蓮弁の肉厚は薄く、間弁も形状も鋭さが失われる。蓮弁、間弁には木製笥の木目を留める。外縁は直立する素縁で、瓦当側面の丸瓦部広端凹面との接合部分には布目が残る。176 は外縁幅 0.8~1.2 cmを測る。蓮弁、間弁の肉厚は乏しい。



第 41 図 興道寺廃寺第 4 次調査 7 トレンチ S B 1 西辺瓦溜まり出土土器実測図 (縮尺 1/3)

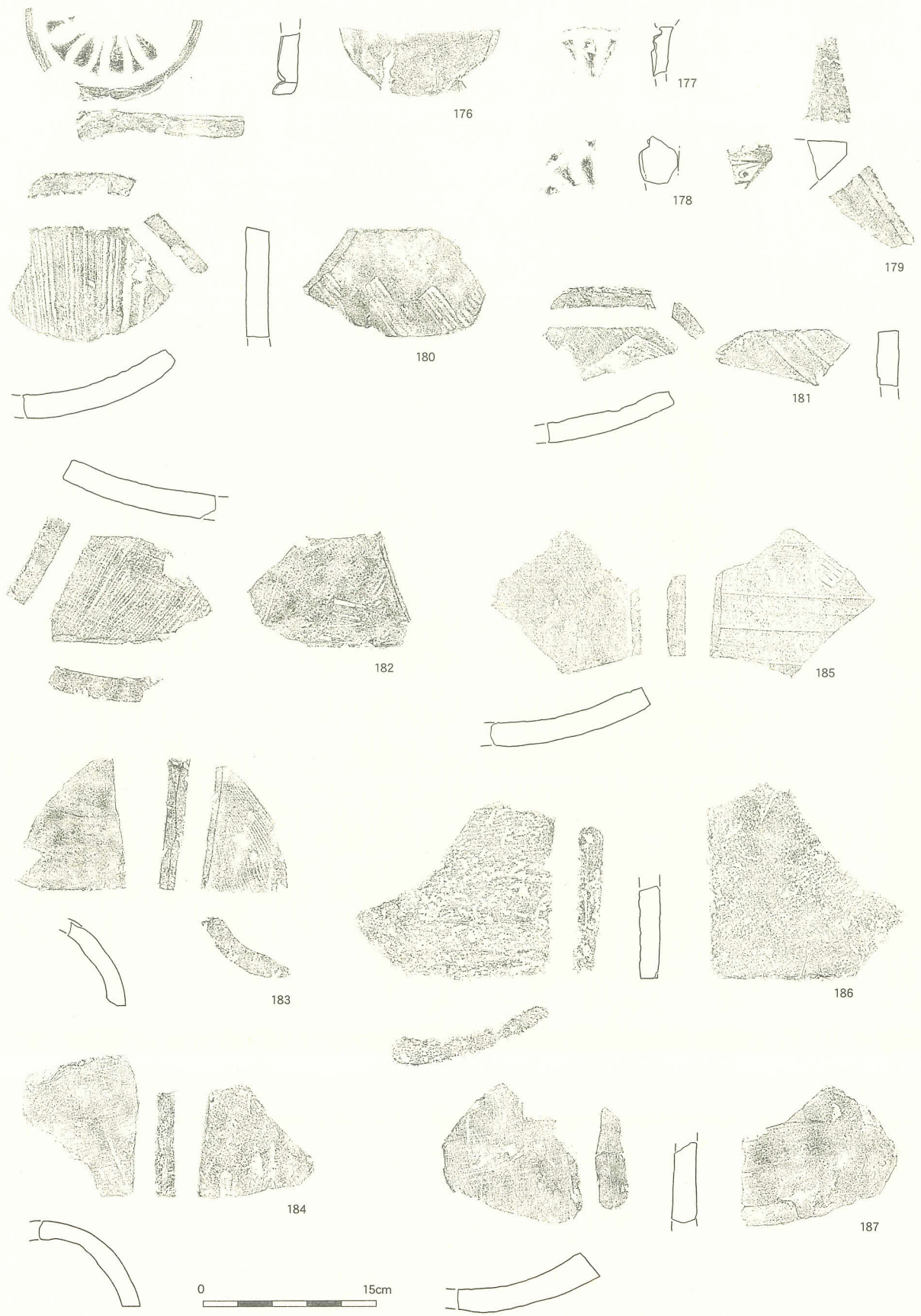


第42図 興道寺廃寺第4次調査7トレンチSB1西辺瓦溜まり下層出土瓦実測図1 (縮尺1/5)

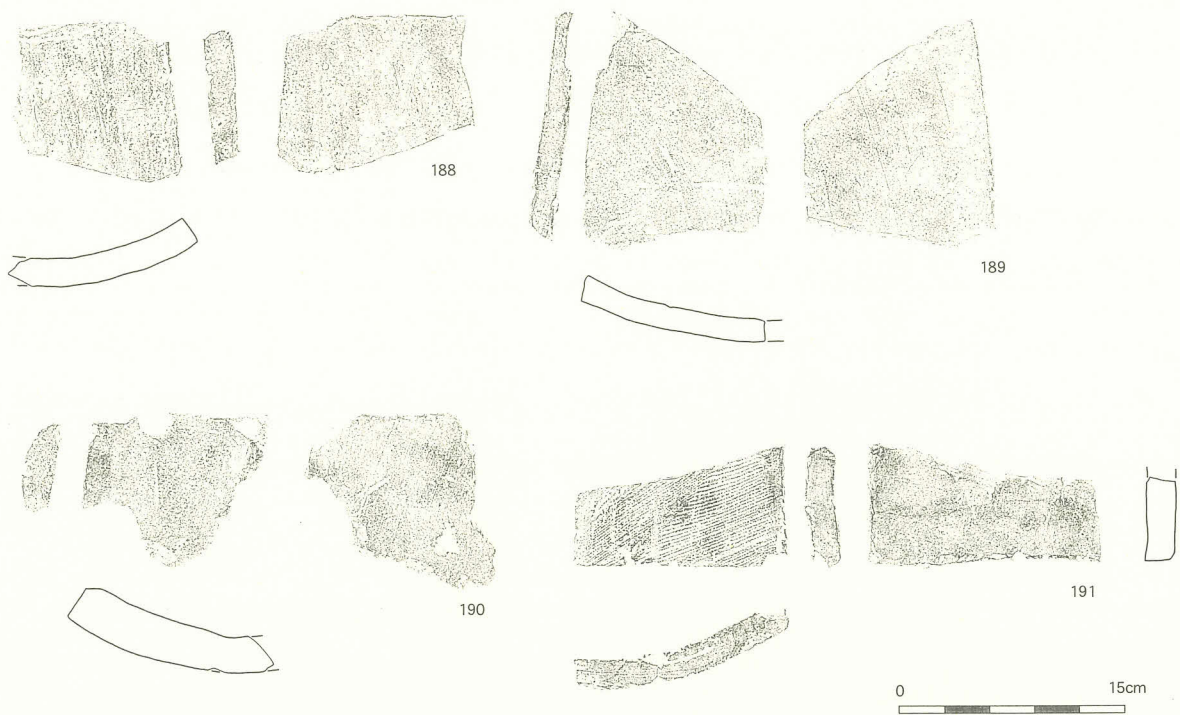


第43図 興道寺廃寺第4次調査7トレンチSB1西辺瓦溜まり下層出土瓦実測図2 (縮尺1/5)





第44図 興道寺麿寺第4次調査7トレンチSB1西辺瓦溜まり上層出土瓦実測図1 (縮尺1/5)



第45図 興道寺廃寺第4次調査7トレンチSB1西辺瓦溜まり上層出土瓦実測図2 (縮尺1/5)

162は外縁幅1.3cmを測る。外区内縁に内斜面を持つ。178は素弁九葉蓮華文軒丸瓦になるものと思われる。外区内縁に珠文を巡らす。163・179は偏行唐草文軒平瓦。179の唐草文主葉は内区右界線と接続する。

180～182は隅落とし平瓦。180・182は凸面に1単位4本の平行叩きを施すが、叩き目は連続しない。凹面は180が強い縦ナデを施し、布目をナデ消すが、182は布目を残す。181は凸面に斜め方向の強いナデを施し、凹面に布目を残す。

164～169、183、184は丸瓦。164の凸面には平行叩きをわずかに留めるが、横方向に幅5cmほどの削り状の強いナデを施し、さらに弱いナデを施すことで叩き目を消す。側縁部は未調整。165は2cmあたり6条の縄目叩きを施した後、横方向にナデ消す。側縁凹面を面取りする。166～169、183、184は凸面に強い横ナデを施す。169にはかすかに平行叩きの痕跡を留める。167、168、183の凹面の布目は密である。側縁調整は169、183が凹面を面取りし、166が凹面、凸面ともに面取りする。

170～175、185～191は平瓦。170、171は凸面に平行叩きを施す。171の平行叩きの単位は1単位4本である。凹面は170が布目をナデ消し、171は布目を残す。171は側縁調整として凹面を面取りする。185は削り状の強い横ナデを施し、一部に1単位4本の平行叩きの痕跡を残す。174は凸面に1単位が縦1.1cm、横1.0cmの正格子叩き目をかすかに残す。186は2cmあたり6条の縄目叩きを施し、横方向に強くナデ消す。172～175、187～191は凸面に強いナデを施す。173、189、190は縦ナデである。凹面は172が布目をナデ消す。175は密な布目を残す。172、173に模骨痕が残る。

## 第9項 8トレンチ

### 基本層序

調査地は畑地であり、地表面の標高24.0m。耕作土となる黒褐色土(層厚0.3m)下、標高23.7m付近で地山層、にぶい黄褐色砂礫土層上面へと至る。地山面の傾斜は認められない。トレンチ南側で後世の攪乱が見られる。

## 遺構

にぶい黄褐色砂礫土層上面において土坑1基（SK1）、小穴2基（P1～2）が検出されている。

## 土坑

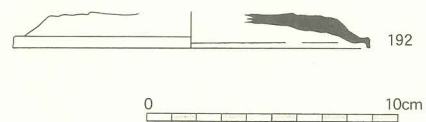
土坑1（SK1）は平面形態がいびつな円形を呈し、南北1.12m、東西1.16m、検出面からの深さ0.39mを測る。断面形状は緩やかな弧状であるが、北側で尖底状に深くなる。黒褐色土を埋土に持つ。律令期の須恵器杯B蓋片1点（192）が出土。

## 小穴

小穴1（P1）は平面形態が円形を呈し、南北0.65m、東西0.33m、検出面からの深さ0.16mを測る。断面形状は緩やかな弧状となる。黒褐色土を埋土に持つ。小穴2（P2）は平面形態が円形を呈し、南北検出長0.41m、東西0.91m、検出面からの深さ0.28mを測る。断面形状は中心部に向かって段状に深くなる。黒褐色土を埋土に持つ。須恵器杯A片1点、丸瓦片1点、平瓦片1点が出土。

## 遺物

192は須恵器杯B蓋。復元口径は14.2cmを測る。回転ヘラ切り後、ナデを施した痕跡が見られることから、つまみを有していたものと思われる。天井部から口縁部に向かって徐々に肥厚し、やや肩を張る。扁平な形状を呈する。口縁端部外面はわずかに段をなし、口縁端部を下方につまみ出す。8世紀後半の時期と思われる。



第46図 興道寺廃寺第4次調査8トレンチ SK1出土土器実測図（縮尺1/3）

## 第10項 9トレンチ

### 基本層序

調査地は畑地であり、地表面の標高24.0m。耕作土となる黒褐色土（層厚0.3m）下、標高23.5～23.7m付近で地山層、にぶい黄褐色砂礫土層上面へと至る。この上面には攪乱が及び、ブロック状に暗褐色土、にぶい黄褐色砂質土が堆積する。攪乱土から須恵器杯A片1点、杯B片1点が出土したに留まる。

## 第11項 10トレンチ

### 基本層序

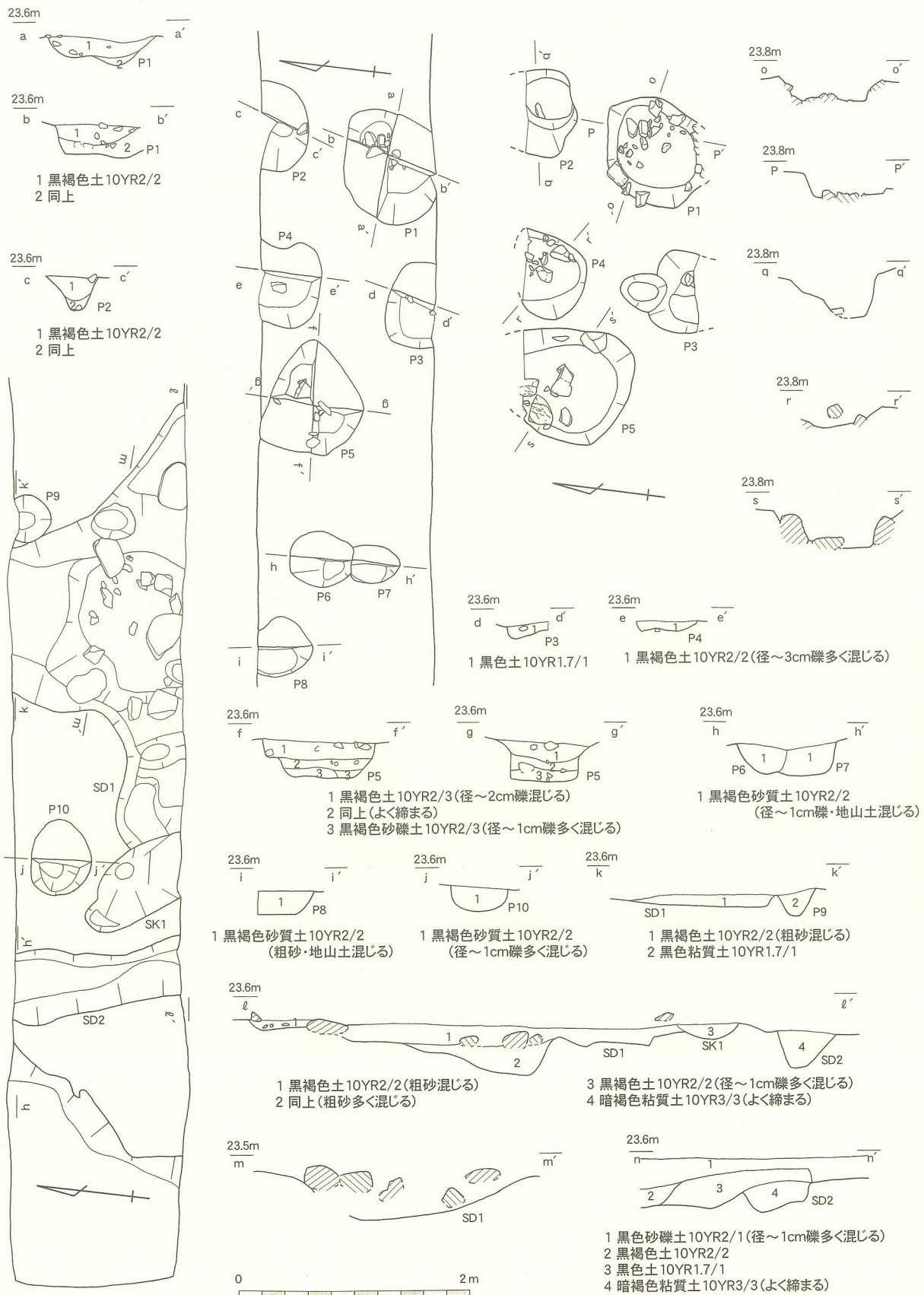
調査地は畑地であり、地表面の標高23.8～23.9m。上層から耕作土となる黒褐色砂礫土、黒色砂礫土（層厚0.4m）、遺物包含層となる黒褐色土（層厚0.1～0.3m）を経て、標高23.3～23.5mで地山層、黄褐色砂礫土層上面へと至る。地山面は西に向けて緩やかに傾斜する。

## 遺構

黄褐色砂礫土層において土坑1基（SK1）、溝2基（SD1、SD2）、礎石掘り方2基（P1、P5）、小穴8基（P2～P4、P6～P10）が検出されている。

## 土坑

土坑1（SK1）は平面形態が楕円形を呈し、南北検出長0.77m、東西0.60m、検出面からの深さ0.14mを測る。溝1を切る。断面形状は浅い緩やかな弧状となる。小礫が混じる黒褐色土を埋土に持つ。出土



第 47 図 興道寺廃寺第 4 次調査 10 トレンチ遺構平面図・土層断面図 (縮尺 1/50)

遺物はない。

## 溝

溝1 (SD1) は南北検出長 1.52、東西 3.73m、検出面からの深さ 0.42mを測る。不定形にトレンチ外の南方、北方に延びるが、南側はさほど遠くないところで収束するものと思われる。断面形状は浅い平底状となるが、溝の中心部で不定形に深くなる。埋土は粗砂が混じる黒褐色土を埋土に持つ。底面から浮いた状態で長辺 0.3~0.4mほどの自然礫が分布する。須恵器杯H蓋1点、律令期の杯4点、杯B蓋9点(193)、甕1点、赤彩土師器1点、土師器甕4点(194)、底部に糸切りを施す皿2点、軒丸瓦1点、丸瓦5点、平瓦6点、中世の土師器皿3点、越前焼甕1点、製塩土器10点がいずれも破片で出土している。

溝2 (SD2) は東西に細長く延びる。東西 1.45m、最大幅 0.66m、検出面からの深さ 0.33mを測る。断面形状は箱型となる。暗褐色粘質土を埋土に持つ。出土遺物はない。

## 礎石掘り方

礎石掘り方1 (P1) は平面形態がいびつな円形を呈し、南北検出長 0.75m、東西 0.96m、検出面からの深さ 0.27mを測る。断面形状は不定形で、底面は平底状である。黒褐色土を埋土に持つ。底面には0.1~0.2mほどの拳大の礫が東側にまとまって分布し、礎石の根固石を構成する。製塩土器4点が出土。

礎石掘り方5 (P5) は平面形態がいびつな円形を呈し、南北検出長 0.97m、東西 0.99m、検出面からの深さ 0.34mを測る。断面形状は箱型となる。小礫が混じる黒褐色土を埋土に持つ。同様に底面には0.1~0.2mほどの拳大の礫が北西側にまとまって分布し、礎石の根固石を構成する。古墳時代後期の杯H蓋1点が出土。

## 小穴

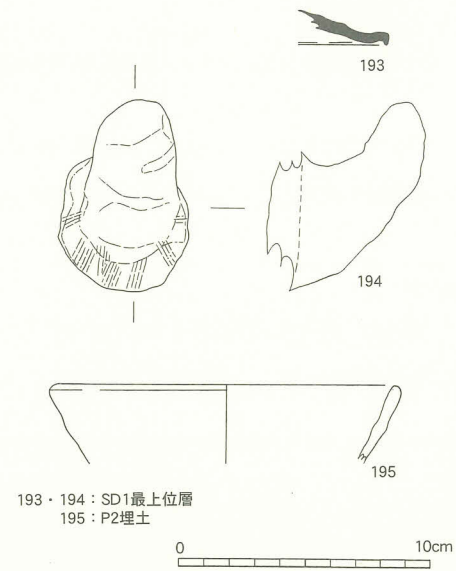
小穴2 (P2) は平面形態が円形を呈し、南北検出長 0.36m、東西 0.76m、検出面からの深さ 0.29mを測る。断面形状は丸みを帯びた尖底状となる。黒褐色土を埋土に持つ。中世の土師器皿片1点(195)、製塩土器片1点が出土。小穴3 (P3) は平面形態が丸みを帯びた方形を呈し、南北検出長 0.43m、東西 0.75m、検出面からの深さ 0.11mを測る。断面形状は箱型で、底面の北側が深くなる。黒色土を埋土に持つ。小穴4 (P4) は平面形態が崩れた円形を呈し、南北検出長 0.53m、東西 0.69m、検出面からの深さ 0.18mを測る。断面形状は浅い平底となる。小礫が混じる黒褐色粘質土を埋土に持つ。小穴6 (P6) は平面形態が楕円形を呈し、南北 0.55m、東西 0.48m、検出面からの深さ 0.24mを測る。小穴7を切る。断面形状は円弧状となる。小礫、地山土が混じる黒褐色砂質土を埋土に持つ。小穴7 (P7) は平面形態が楕円形を呈し、南北検出長 0.43m、東西 0.33mを測る。検出面からの深さは 0.26m以上。断面形状は丸みを帯びた箱型となる。小礫、地山土が混じる黒褐色砂質土を埋土に持つ。小穴8 (P8) は平面形態がいびつな円形を呈し、南北検出長 0.48m、東西 0.52m、検出面からの深さ 0.20mを測る。断面形状は平底となる。小礫、地山土が混じる黒褐色砂質土を埋土に持つ。律令期と思われる土師器甕片1点が出土。小穴9 (P9) は平面形態が円形を呈し、溝1と接する。径 0.41m、検出面からの深さ 0.19mを測る。断面形状は丸みを帯びた尖底状となる。黒色粘質土を埋土に持つ。小穴10 (P10) は平面形態が楕円形を呈し、南北 0.53m、東西 0.66m、検出面からの深さ 0.21mを測る。断面形状は弧状となる。小礫が混じる黒褐色砂質土を持つ。

## 遺物

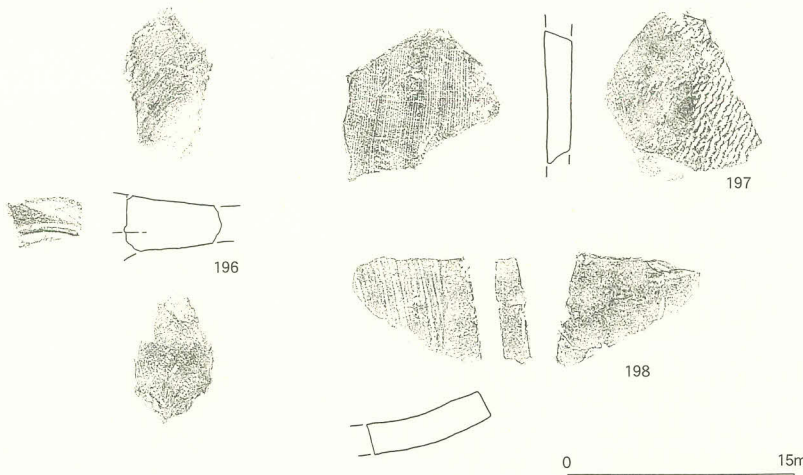
193 は須恵器杯B蓋口縁部。扁平な形状を呈すると思われ、口縁部は屈曲し、口縁端部を下方につまみ出す。194 は土師器甕の把手。内面にケズリ、外面は把手貼り付け部分を中心にハケメを施す。把手には指圧痕が残る。195 は土師器皿。復元口径 13.5 cmを測る。口縁部はナデで調整し、口縁端部はやや肥厚しつつ丸く収まる。器壁にやや歪みが生じる。胎土は密である。12 世紀末から 13 世紀前半頃に属すると思われる。

196 は丸瓦広端面、軒丸瓦瓦当との接合部。広端面には削りを施す。

197、198 は平瓦。197 は凸面に縄目叩きを施し、部分的に叩き目を弱くナデ消す。198 は凸面に平行叩きを施すが、横ナデでナデ消す。凹面にはともに布目を残す。198 の側縁部は未調整。



第48図 興道寺廃寺第4次調査10トレンチ出土土器実測図(縮尺1/3)



第49図 興道寺廃寺第4次調査10トレンチSD1出土瓦実測図(縮尺1/5)

## 第8節 興道寺廃寺第5次調査

### 第1項 調査の概要

調査地の地番は福井県三方郡美浜町興道寺8号中ノ丁20番地。携帯電話基地局建設計画に伴い、遺跡の存否・内容確認を目的として建設予定地に1箇所の調査区を設定した。調査区の規模は南北9.3m、東西9.3m、調査面積81m<sup>2</sup>である。

調査は平成16年11月29日から平成16年12月24日まで実施。以下に調査日誌を抄録する。

12月1日 調査機材搬入、調査区設定、表土掘削。12月2日～ 地山面を人力精査。12月3日 溝状遺構群を検出し、遺構掘削に着手する。12月7日～ 調査図面作成に着手し、随時写真撮影を行う。12月13日 調査図面作成に本格的に入る(～12月22日)。12月24日 調査区埋め戻し、調査機材搬出。

第2項 調査区の遺構・遺物

基本層序

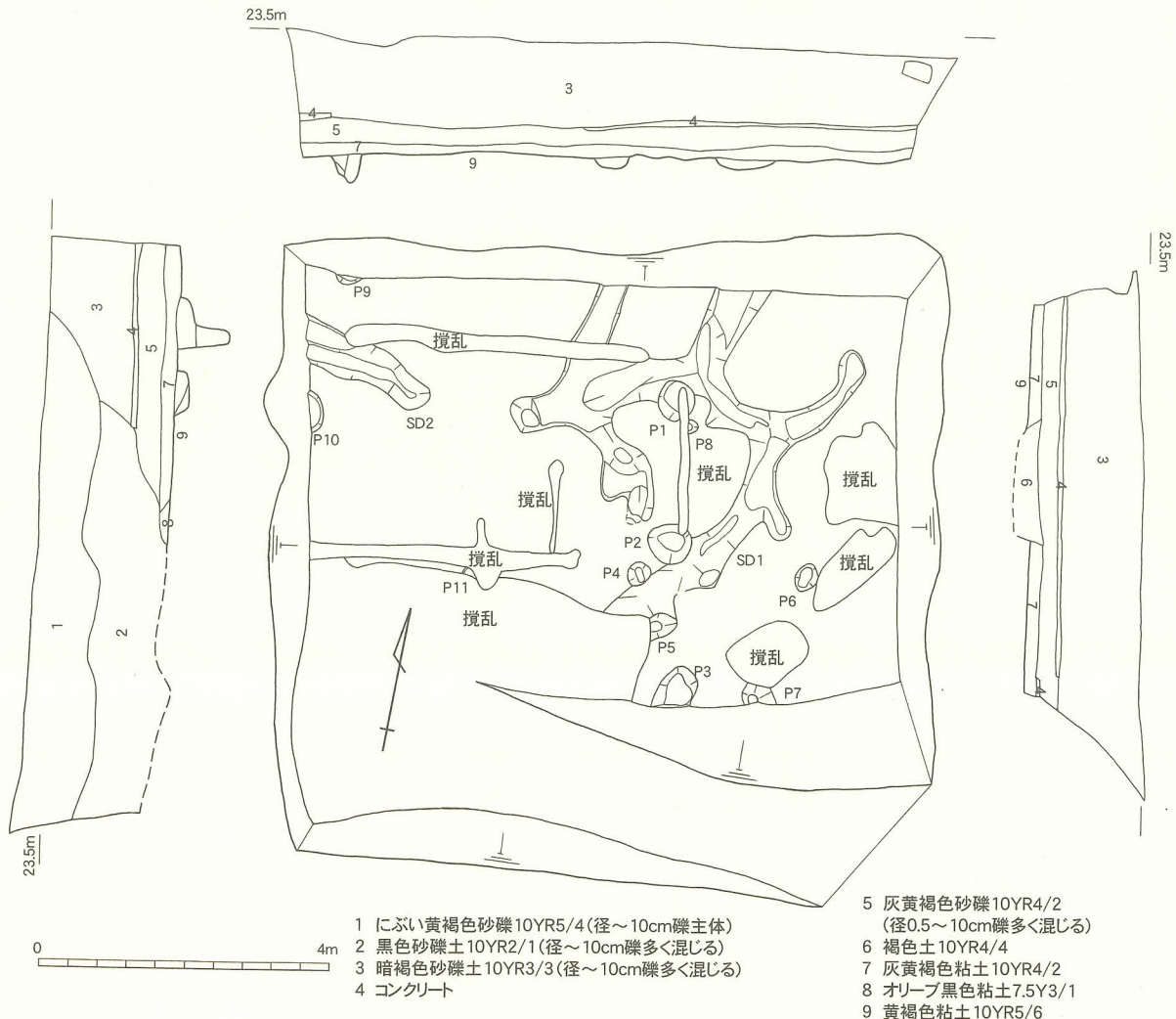
調査地は造成地であり、地表面の標高 23.2~23.95m。上層から造成土となる砂礫土(層厚 1.4~1.6m)、旧耕土である灰黄褐色粘土(層厚 0.2m)を経て、標高 21.7~21.8mで地山土、黄褐色粘土層上面へと至る。調査区南西には自動車、廃材が投棄された攪乱層が見られる。また造成土中には部分的にコンクリート製の土間基礎が広がり、地権者が過去に当該地で鶏舎を営んでいたとの証言とも一致する。

遺構

黄褐色粘土層上面において溝 2 基 (SD 1、SD 2)、柱穴 3 基 (P 1~3)、小穴 8 基 (P 4~11) が検出されている。

溝

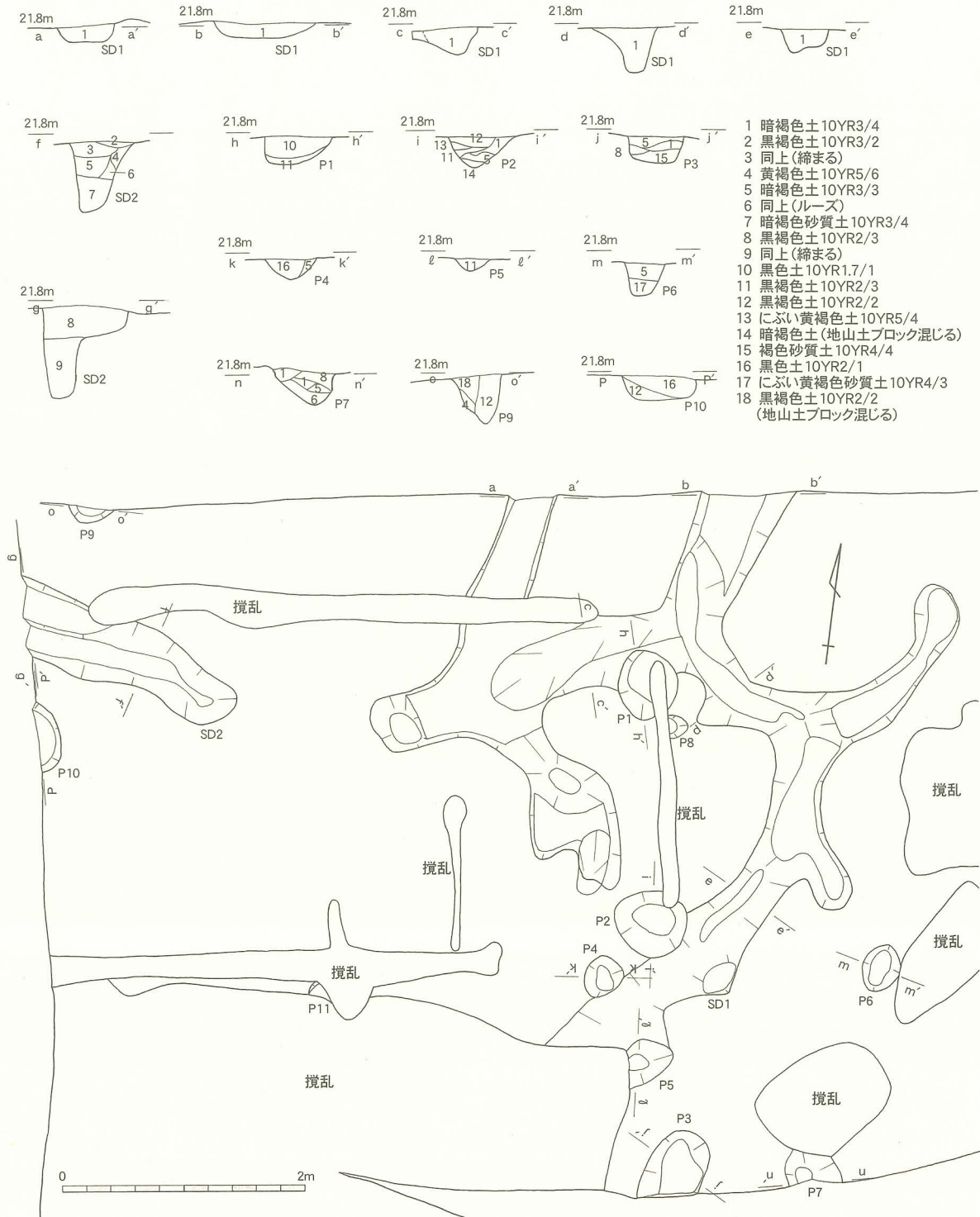
溝 1 (SD 1) は不定方向に不規則に延びるが、南北方向に蛇行し、局所で東西に短く枝分かかれする形態を持つ。最大幅 0.89m、最小幅 0.35m、検出面からの深さ 0.37m を測る。断面形状は不定形。浅い船底状を呈する部分と尖底状にやや深くなる部分がある。暗褐色土を埋土に持つ。出土遺物はない。溝 2 (SD 2) は東西方向に伸張する。東西検出長 2.06m、最大幅 0.58m、検出面からの深さ 0.60m を測る。断面形状は箱型で溝の立ち上がりは部分的に平坦面を造る。黒褐色土を埋土に持つ。出土遺物はない。



第 50 図 興道寺廃寺第 5 次調査平面図・土層断面図 (縮尺 1/100)

# 柱穴

柱穴1 (P1) は南北0.58m、東西0.50m、柱穴2 (P2) は南北0.55m、東西0.61m、柱穴3 (P3) は南北0.52m、東西0.48m、検出面からの深さはそれぞれ0.24m、0.25m、0.17mを測る。いずれも平面形態は円形を呈する。柱穴1、柱穴2は溝1を切る。磁北からやや西偏して約2mの間隔で3基の小穴が南北に並び、規模もほぼ同様であることから掘立柱建物、あるいは柵列の一部を構成するものと思われる。いずれも黒褐色土、暗褐色土を埋土に持つが、柱の痕跡は確認できない。遺物の出土はなく、時期は不明である。



第51図 興道寺磨寺第5次調査遺構平面図・土層断面図 (縮尺 1/50)



## 小穴

小穴1 (P4) は径 0.35m、小穴2 (P5) は南北 0.38m、東西現存長 0.37m、小穴3 (P6) は南北 0.41m、東西 0.32m、小穴4 (P7) は南北現存長 0.27m、東西 0.46mを測り、検出面からの深さはそれぞれ 0.13m、0.08m、0.22m、0.22mである。小穴5 (P8) は現存長 0.19m、小穴6 (P9) は南北現存長 0.13m、東西 0.37mを測る。小穴7の検出面からの深さは 0.39m。小穴8 (P10) は南北 0.41m、東西現存長 0.15mを測り、検出面からの深さは 0.16m。小穴9 (P11) は現存長 0.20mを測る。

いずれも円形の平面形を呈し、黒褐色土、暗褐色土を埋土に持つ。遺物は出土していないが、小穴1、小穴2、小穴5は溝1を切ることから柱穴1～3とほぼ同時期の遺構と思われる。

## 第9節 興道寺廃寺第6次調査

### 第1項 調査の概要

調査地の地番は福井県三方郡美浜町興道寺4号観音1番地1、2番地、9番地、13番地、6号淵ノ上18番地。第4次調査までで確認されている基壇遺構1西側の様相把握とともに基壇遺構1の北側、南側の様相把握を目的として休耕地に7箇所の特レンチを設定。特レンチの規模は、1特レンチ南北 15.1m、幅 3.0m、2特レンチは逆L字状に東西 11.9m、南北 2.8m、幅 1.5m、3特レンチはL字状に東西 6.6m、南北 3.6m、幅 1.0mおよび 2.5m、4特レンチは東西、南北ともに 3.2m、5特レンチは南北 2.3m、東西 2.1m、6特レンチは南北 3.1m、東西 8.3m、7特レンチは南北 3.4m、東西 8.2m、調査面積は計 142m<sup>2</sup>である。

調査は平成17年7月11日から平成17年8月19日まで実施。以下に調査日誌を抄録する。

7月11日 調査区設定、表土掘削。7月13日 調査機材搬入、2～5特レンチ地山面の人力精査を開始。美浜北小学校6年生17名、引率教員体験発掘。7月15日～ 各特レンチ地山面で人力精査を進める、2特レンチにて版築痕跡を確認。7月19日～ 各特レンチにおいて遺構検出状況写真を撮影し、適時遺構半裁を進める。2特レンチ版築痕跡を一部断ち割る。3特レンチにて瓦溜まり検出、精査を進める。7月21日 3特レンチで版築痕跡を検出、広がりを確認するため一部拡張。7月25日 2特レンチを一部拡張、瓦溜まりを伴う石列を検出。4・5特レンチにて全体写真撮影、調査図面作成。森本輝久氏(県文化財パトロール員)が来跡。7月26日～ 台風7号の影響により調査休止。7月28日 2特レンチ瓦溜まり精査、3特レンチ瓦溜まり精査、2特レンチで確認された石列と東西で対応する石列を確認する。6・7特レンチ全体写真撮影、調査図面作成。7月29日 1特レンチ全体写真撮影。8月1日 各特レンチにて平面図、断面図、立面図、出土状況図など本格的な調査図面作成に着手(～調査終了)。水野和雄氏(県一乗谷朝倉氏遺跡資料館)来跡。8月5日 3特レンチ瓦溜まり出土遺物を取り上げ。8月8日 久保智康氏(京都国立博物館)、菱田哲郎氏(京都府立大学文学部)、水野和雄氏(県一乗谷朝倉氏遺跡資料館)、芝田寿朗氏(県若狭歴史民俗資料館)氏、松川雅弘氏(小浜市世界遺産推進室)、田辺常博氏(若狭三方縄文博物館)来跡。8月9日 町文化財保護委員会視察。8月12日 畠中清隆氏(県埋蔵文化財調査センター)、永江寿夫氏(若狭町教育委員会)、阿倍義治氏(高浜町郷土資料館)来跡。8月15日 工藤俊樹氏(県文化課文化財保護室)、報道機関来跡。3特レンチ瓦溜まり出土遺物一部取り上げ。8月16日～ 2・3特レンチ瓦溜まり出土遺物取り上げ。地域住民来跡。1・7特レンチ一部埋め戻し。8月17日 3特レンチ一部埋め戻し。8月19日 2特レンチ瓦溜まり出土遺物取り上げ。全特レンチ埋め戻し。調査機材搬出。

### 第2項 1特レンチ

#### 基本層序

調査地は畑地であり、地表面の標高 24.6～24.8m。上層から耕作土となる黒褐色土(層厚 0.3m)、部分的に層厚 0.1m程の小礫が混じる暗褐色土、地山土が混じる黒褐色土を経て、標高 24.3～24.6mで地山土、褐色粘質土層上面へと至る。地山面は北に向けて緩やかに標高が下がる。



写真9 美浜北小学校体験発掘

## 遺構

褐色粘質土層上面において土坑5基（SK1～5）、小穴9基（P1～9）が検出されている。

## 土坑

土坑1（SK1）は平面形態が円形を呈し、南北検出長 1.27m、東西検出長 0.75m、検出面からの深さ 0.63mを測る。土坑2を切る。断面形状は不定形であるが、北側に向けて深くなる。黒褐色土を埋土に持つ。出土遺物はない。

土坑2（SK2）は平面形態が長楕円形を呈し、南北検出長 0.69m、東西検出長 0.94m、検出面からの深さ 0.18mを測る。断面形状は浅い平底状となる。埋土に黒褐色土、暗褐色土を持つ。出土遺物はない。

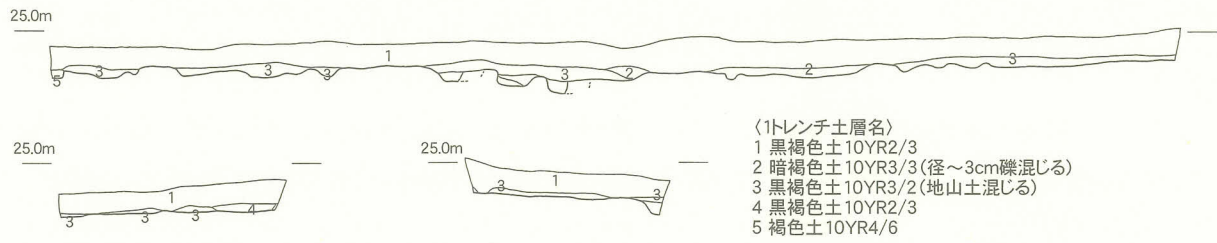
土坑3（SK3）は平面形態が崩れた円形を呈し、トレンチ外の西方に広がる。南北 7.13m、東西検出長 2.57m、検出面からの深さ 0.35mを測る。断面形状は浅く落ち込み平坦面を造るが、中心部から北側にかけて4箇所ですらに一段掘り込んで深くなる。基本的には上位に黒褐色土、下位に暗褐色土を埋土に持つ。土坑中心部付近、底面直上から 0.1m程浮いた状態で 0.2mまでの自然礫がまとまって分布する。埋土からいずれも破片の状態で須恵器杯H 7点（200）、杯H蓋 16点（199）、高杯 2点、甕 14点、壺 3点（201）、提瓶 1点、土師器甕 80点（203～207）、椀 1点（202）、軒丸瓦 1点（217）、軒平瓦 2点（218）、丸瓦 1点、平瓦 11点（219）、製塩土器 46点（208）、鉄釘 2点（209・210）が出土。遺構の南端付近では検出面レベル付近で礫の上端に揃えるように自然礫 3石が東西に並んだ状態で確認されるなど、何らかの寺院施設に伴う地業痕跡である可能性がある。

土坑4（SK4）は平面形態が隅丸長方形を呈し、東西 1.17m、南北 0.77m、検出面からの深さ 0.26mを測る。断面形状は浅い尖底状となる。黒色土、黒褐色土を埋土に持つ。検出面に自然礫 2石を確認しているが、意図的に置かれた痕跡は見られない。須恵器杯H 2点（211）、高杯 1点、土師器甕 9点（212）、平瓦 1点、製塩土器 18点が破片で出土している。

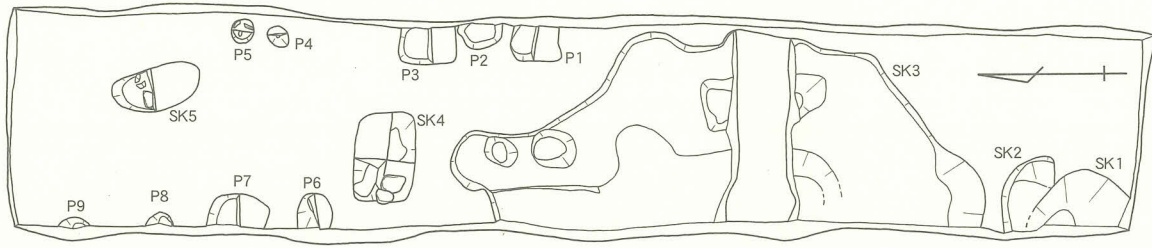
土坑5（SK5）は平面形態が長楕円形を呈し、南北 1.21m、東西 0.58m、検出面からの深さ 0.18mを測る。断面形状は箱型となる。埋土に暗褐色土、褐色砂礫土を持つ。古墳時代後期の土師器甕片 1点、製塩土器片 2点が出土。

## 小穴

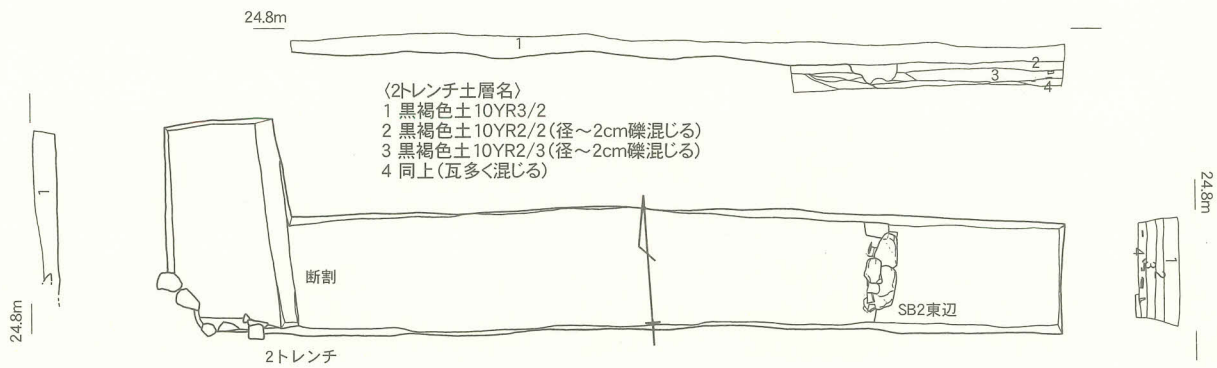
小穴1（P1）は平面形態が隅丸方形を呈し、南北 0.77m、東西検出長 0.49mを測る。検出面からの深さは 0.11mと浅い。断面形状は箱型となる。暗褐色土を埋土に持つ。古墳時代後期の土師器甕片 2点、製塩土器片 14点が出土。小穴2（P2）は平面形態が円形を呈し、南北 0.57m、東西検出長 0.34m、検出面からの深さ 0.15mを測る。断面形状は緩やかな弧状となる。黒褐色土を埋土に持つ。古墳時代後期の土師器甕片 2点（213）、製塩土器片 1が出土。小穴3（P3）は平面形態が崩れた円形を呈し、南北 0.63m、東西検出長 0.48m、検出面からの深さ 0.18mを測る。断面形状は箱型となる。黒褐色土、地山土が混じる黒褐色砂礫土を埋土に持つ。須恵器杯H蓋片 2点（214）、土師器甕片 2点、瓦片 1点、製塩土器片 58点、鉄釘 1点（215）が出土。小穴4（P4）は平面形態が円形を呈し、南北 0.28m、東西 0.26mを測る。検出面からの深さは 0.07mと極めて浅い。断面形状は弧状となる。暗褐色土を埋土に持つ。小穴5（P5）は平面形態が円形を呈し、径 0.28m、検出面からの深さ 0.21mを測る。断面形状は尖底状に深くなる。黒色土、黒褐色土を埋土に持つ。小穴6（P6）は平面形態が楕円形を呈し、南北 0.48m、東西検出長 0.47m、検出面からの深さ 0.26mを測る。断面形状は箱型となる。黒褐色土を埋土に持つ。古墳時代後期の土師器甕片 1点、製塩土器片 16点が出土。小穴7（P7）は平面形態が崩れた円形を呈し、南北 0.75m、東西検出長 0.43m、検出面からの深さ 0.27mを測る。断面形状は箱型。黒褐色土を埋土に持つ。古墳時代



- 〈1トレンチ土層名〉  
 1 黒褐色土10YR2/3  
 2 暗褐色土10YR3/3(径~3cm礫混じる)  
 3 黒褐色土10YR3/2(地山土混じる)  
 4 黒褐色土10YR2/3  
 5 褐色土10YR4/6

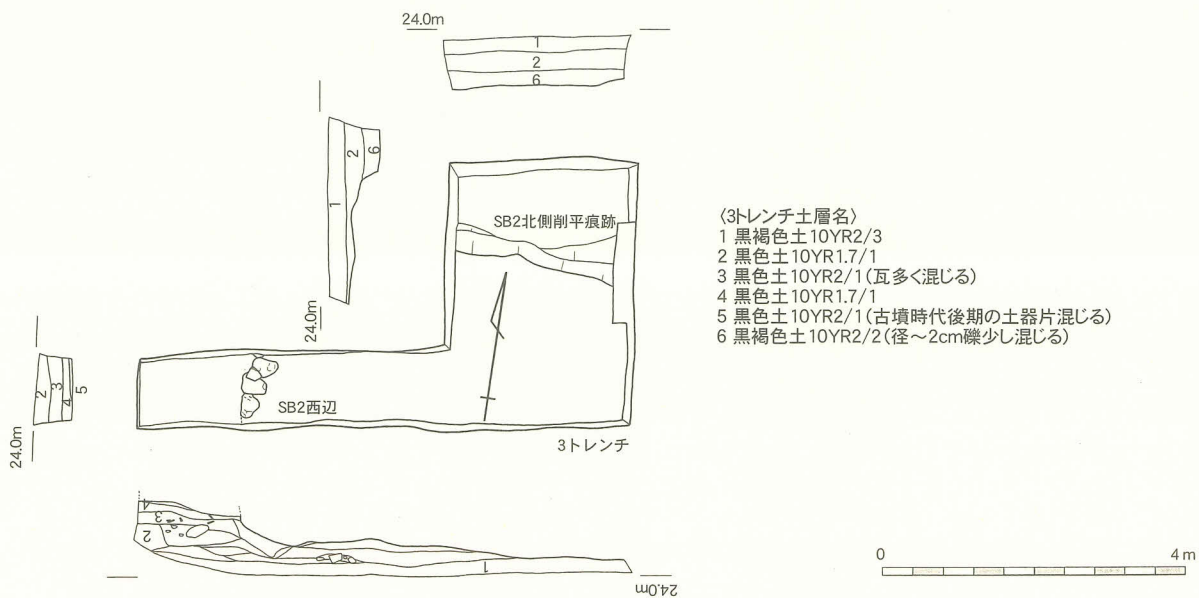


1トレンチ



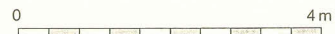
- 〈2トレンチ土層名〉  
 1 黒褐色土10YR3/2  
 2 黒褐色土10YR2/2(径~2cm礫混じる)  
 3 黒褐色土10YR2/3(径~2cm礫混じる)  
 4 同上(瓦多く混じる)

2トレンチ



- 〈3トレンチ土層名〉  
 1 黒褐色土10YR2/3  
 2 黒色土10YR1.7/1  
 3 黒色土10YR2/1(瓦多く混じる)  
 4 黒色土10YR1.7/1  
 5 黒色土10YR2/1(古墳時代後期の土器片混じる)  
 6 黒褐色土10YR2/2(径~2cm礫少し混じる)

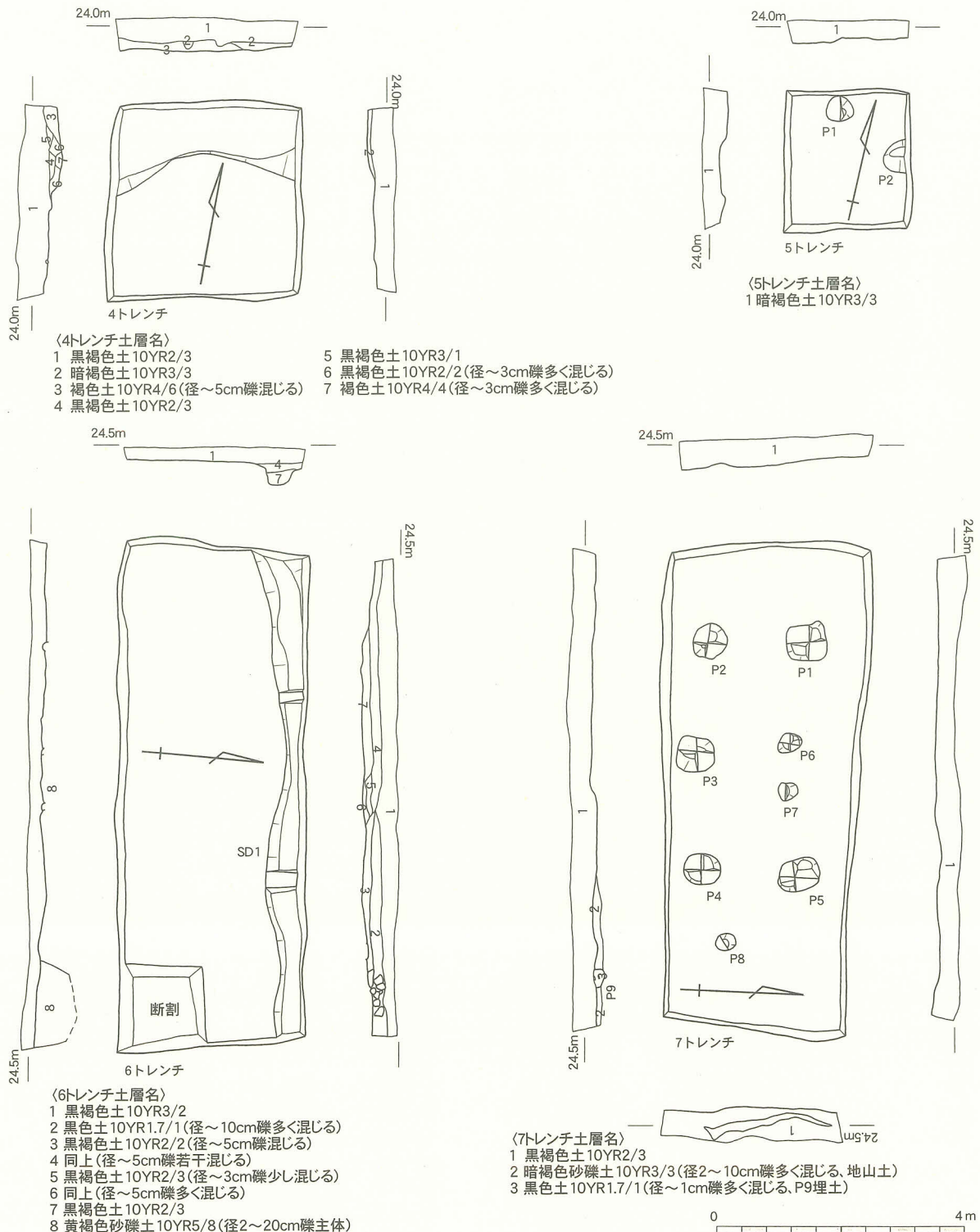
3トレンチ



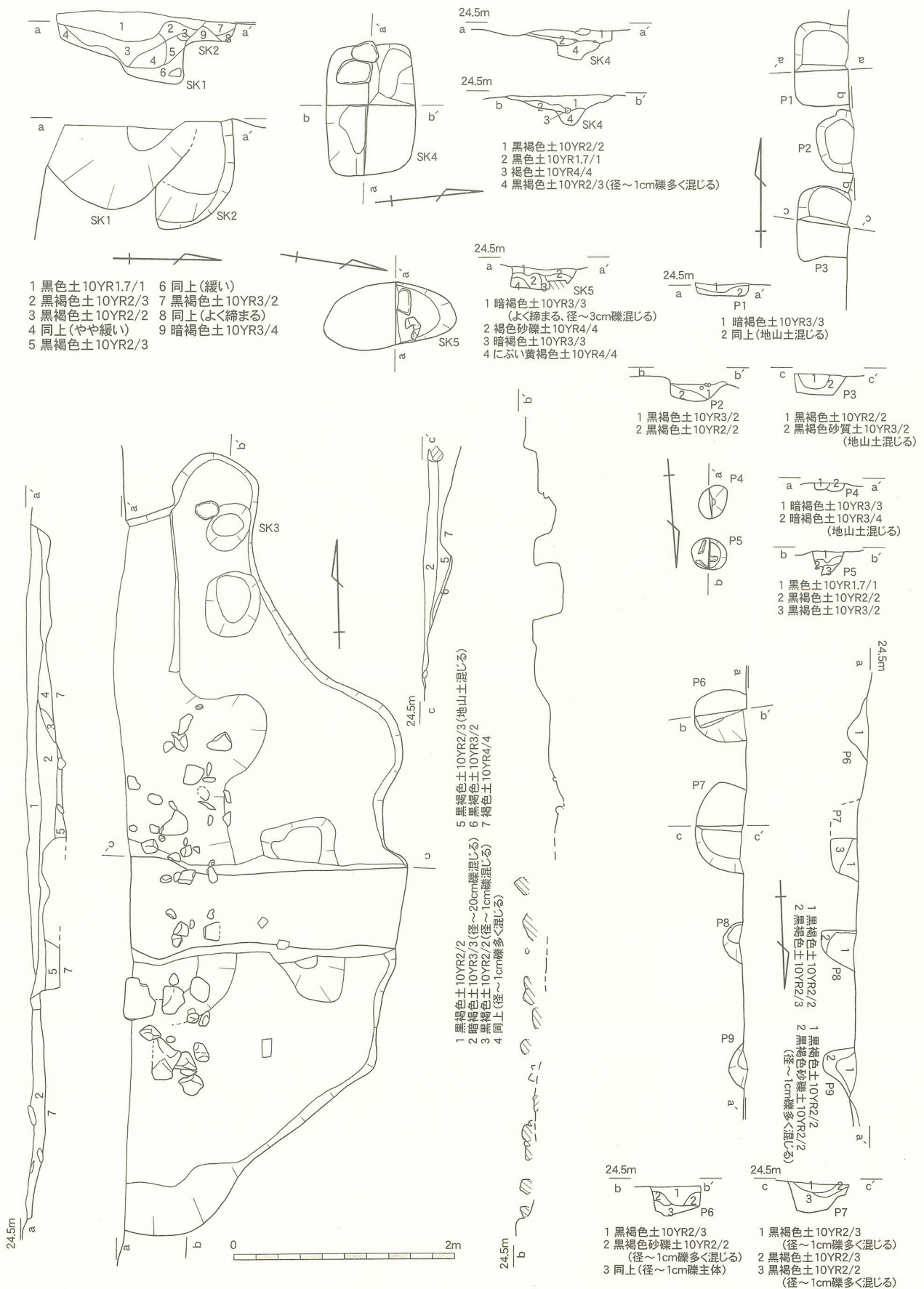
第52図 興道寺廃寺第6次調査1~3トレンチ平面図・土層断面図(縮尺1/100)

後期の須恵器杯H蓋片3点(216)、甕片1点、土師器甕片9点、製塩土器片11点が出土。小穴8(P8)は平面形態が円形を呈し、南北0.37m、東西検出長0.16m、検出面からの深さ0.31mを測る。断面形状は深い箱型となる。黒褐色土を埋土に持つ。古墳時代後期の土師器甕片1点が出土。小穴9(P9)は平面形態が円形を呈し、南北検出長0.42m、東西検出長0.17m、検出面からの深さ0.31mを測る。断面形状は尖底状に深くなる。黒褐色土を埋土に持つ。

小穴は総じて古墳時代後期の遺物を埋土に持ち、土坑4、土坑5とともに寺院造営段階には埋没しているものと考えられる。



第53図 興道寺廃寺第6次調査4~7トレンチ平面図・土層断面図(縮尺1/100)



第54図 興道寺廃寺第6次調査1 トレンチ遺構平面図・土層断面図 (縮尺 1/50)

## 遺物

199 は須恵器杯H蓋。復元口径は14.7 cmを測る。天井部外面には回転ヘラ切りを施す。天井部は低く丸みを持ち、口縁部との境には段をなす。口縁部は丸く収める。TK10 型式並行期に相当すると思われる。200 は須恵器杯H。復元口径は11.5 cmを測り、底部外面には回転ヘラ切りを施す。立ち上がりはやや内傾し、受け部は外方に向かって延びる。TK209 型式並行期と思われる。201 は須恵器壺で、復元口径は11.2 cmを測る。口頸部は受け口状を呈し、屈曲部外面に凸線を巡らす。口頸部外面上半に5条、中位には2条と10条の波状文を施す。外面は光沢のある黒色を呈する。内面は灰褐色である。6世紀後葉から7世紀初頭の時期に属すると思われる。202 は土師器碗口縁部。内面はナデ、外面にはハケメを施す。口縁部はやや内湾し、口縁端部は丸く収める。古墳時代後期の所産と考えられる。203・204 は土師器甕口縁部。203 は口縁部にナデを施し、頸部付近の内面にはケズリが見られる。口縁端部を丸く収め、口縁はさほど外反しないものと思われる。204 の口縁部はナデで調整する。203 に比べて口縁部は外に開く。口縁端部は面取りする。205 は土師器甕胴部。内面には粗いケズリを施す。外面はナデによる調整を行っている。206・207 は土師器甕把手。206 は内面にナデを施す。外面にはハケメがわずかに見られる。207 は内面にはケズリ、外面は把手の貼り付け部を中心にハケメを施す。板状の工具を用いて把手の整形を行ったと思われる。208 は製塩土器。内外面にナデの痕跡が残る。209・210 は鉄釘である。209 は基部で、残存する長さは7.9 cm、厚さは0.7 cmを測る。210 は先端部付近で、残存する長さは6.5 cm、厚さは前部が0.5 cm、後部が0.95 cmを測る。211 は須恵器杯H。復元口径13.0 cm。底部外面は回転ヘラ削りを施す。立ち上がりはやや内傾する。受け部はほぼ真横に延びる。TK209 型式の範疇に収まるとと思われる。212・213 は土師器甕口縁部。212 は口縁部にナデ、内面にはケズリを施す。口縁部は短く、やや大きく外反する。213 は口縁部にナデ、内面はやや粗いケズリ、外面は縦ハケを施す。口縁部は大きく外反する。これらの甕の時期は古墳時代後期と思われる。214 は須恵器杯H蓋。天井部外面に回転ヘラ切り痕が明瞭に残る。7世紀前後の時期と思われる。215 は鉄釘の基部で、L字状を呈する。残存する長さは10.1 cm、厚さは前部が0.8 cm、頭部が0.7 cmを測る。216 は須恵器杯H蓋。天井部外面は回転ヘラ切り後、ナデで調整している。天井部は丸みを帯び、口縁部は下方へ直線的に伸びる。TK43 型式の範疇に収まるとと思われる。

217 は単弁八葉蓮華文軒丸瓦。中房径3.3 cm、瓦当厚は中房付近で2.7 cmを測る。中房は小さく作り、径0.4 cmほどの珠文を1+5に配する。蓮弁には子葉が明瞭に残る。218 は三重弧文軒平瓦。瓦当厚0.4 cmを測る。瓦当文様の断面形状は弧線が平坦となり、凹線は浅く鋭いU字状を呈する。直線頸。平瓦部凸面には縦4.2 cm、横4.7 cmの方形区画の中に4枚からなる花卉を配する型押し文が見られる。さらに凸面剥離面には2 cmあたり5本の平行叩きが残る。凹面は布目を縦方向に強くナデ消す。土坑3からはさらに1点、同型式の軒平瓦が出土。

219 は平瓦。凸面は強い横ナデを施し、凹面は布目を縦方向に強くナデ消す。

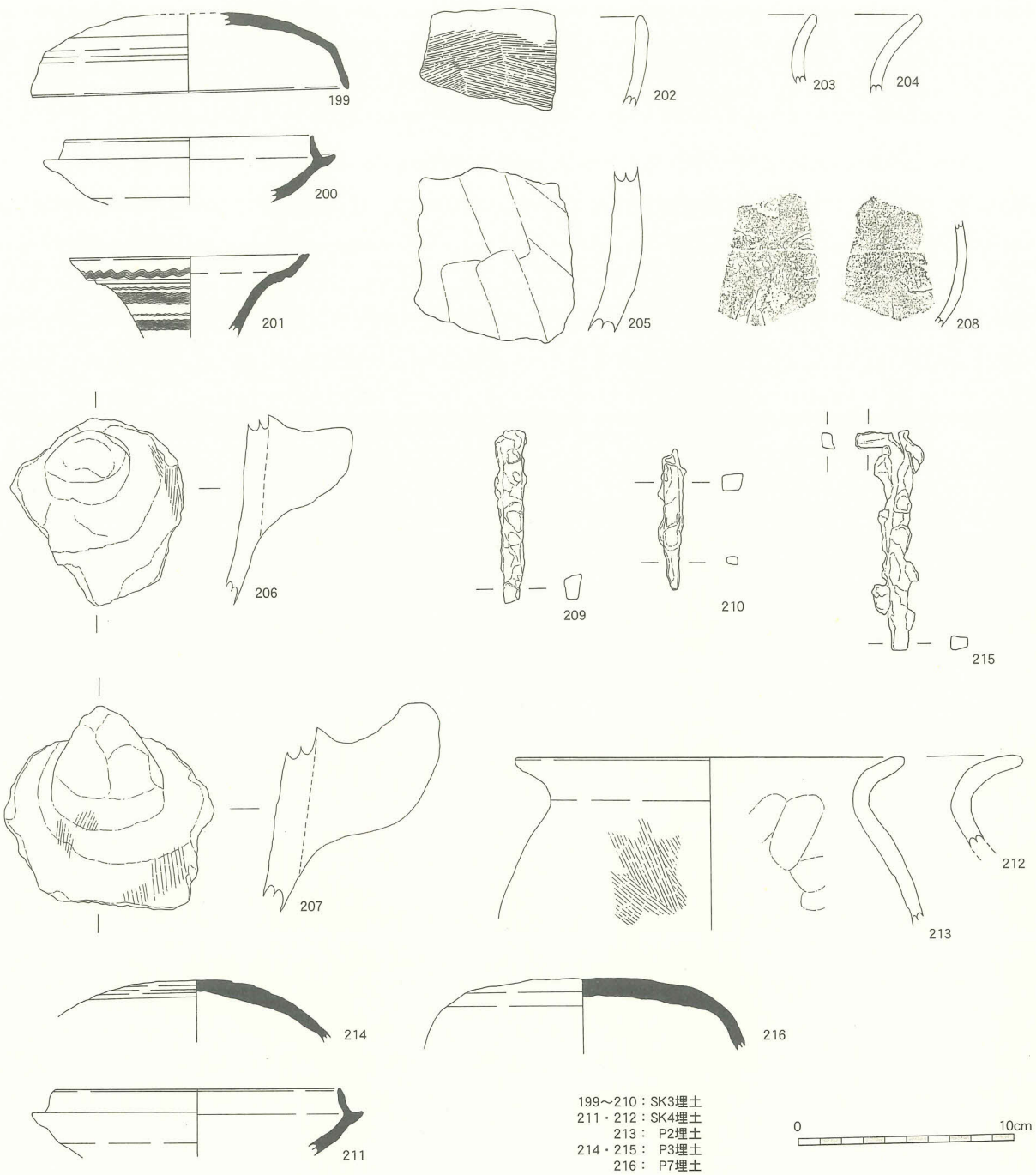
## 第3項 2 トレンチ

### 基本層序

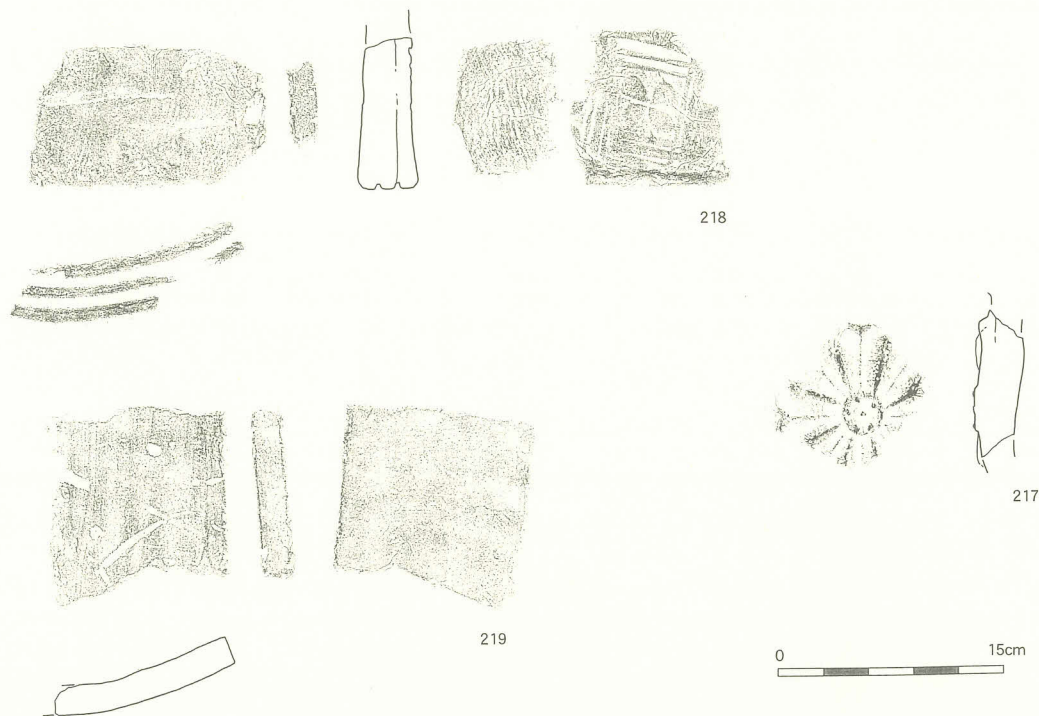
調査地は畑地であり、地表面の標高24.7~24.8m。耕作土となる黒褐色土(層厚0.2~0.3m)下、標高24.4~24.5mで基壇遺構の基壇面となり、トレンチ東側では小礫が混じる黒褐色土が堆積する瓦溜まりとなり、標高24.0m前後で地山土、明黄褐色砂礫土層上面へと至る。

### 遺構

明黄褐色粘質層上面に基底部を持つ基壇遺構2(SB2)が検出されている。



第55図 興道寺廃寺第6次調査1トレンチ出土土器・鉄製品実測図(縮尺1/3)



第56図 興道寺廃寺第6次調査1トレンチSK3出土瓦実測図(縮尺1/5)

### 基壇遺構

基壇遺構2(SB2)はこの調査で初めて検出された基壇遺構である。基壇面および基壇東辺を検出した。南北検出長2.77m、東西検出長9.61m、基壇東辺下端地山面から最高0.39mを測る盛土平坦面を検出した。基壇面の標高は24.4~24.5mで、東辺付近でわずかに低くなる。

基壇はトレンチ西側では、旧地表面の地山層を標高23.8~23.9mまで掘り込み、窪む部分に黒褐色砂礫土を入れることで平坦面を造り出した後、標高24.15m付近まで黒色土を2段に積み、さらに地山土、礫混じりのにぶい黄褐色土を標高24.1~24.2mまで積み、その上に標高24.2~24.3mまで黒色土を叩き締め、標高25.5mまで黄褐色砂礫土、黒褐色砂礫土を順に積み、叩き締めて版築とする。上面では部分的に黄褐色砂質土、黒褐色土を2、3cmの単位で互層に叩き締める。基壇構成土の内、下位層の黒色土中から土師器甕片1点、製塩土器片1点が出土。

トレンチ東側、東辺列石の裏込め部分では標高24.25m付近まで黄褐色砂礫土を叩き締め、さらに黒褐色土、黄褐色砂礫土を0.1~0.2mの厚さで東側に傾斜を持って4段に積み、叩き締めることで東辺を造り出しながら基壇を構築する。基壇上面には地山土が混じる黒褐色土を0.2mほどの厚さに積み、外縁に自然礫を列石状に置き並べることで外装とする。

基壇東辺では標高24.1m付近の地山面から版築状に黒褐色土、黄褐色砂礫土を積み、基壇上面に長辺0.6m前後、短辺0.3m程の自然礫を横位に奥に控えを取らずに置き並べることで外装とする。2石が元位置を保ち、トレンチ北壁土層断面で列石抜き痕を確認した。この現存する2石の上に小ぶりの自然礫が西側にずれて載るが、元来2段に積まれていた痕跡は認められない。使用石材は耳川流域で採集可能な花崗岩で、加工痕跡は認められない。列石下には興道寺廃寺最新型式となる偏行唐草文軒平瓦1点(223)が瓦当面を外側に向けて差し込まれていた。また、石列の裏込め部分、つまり基壇構成土中には軒平瓦1点(224)、隅落とし平瓦1点(225)、丸瓦片2点(226・227)、平瓦片13点(228~235)が混入しており、少なくともこの軒丸瓦の年代以後に基壇東辺の積み直しが行われたことを示唆する。基壇東辺がトレンチ西側で確



認された版築構造と異なる要因は時期差であるものと考えられる。

なお、この基壇東辺下端の地山上面のレベルが標高 24.1m であり、トレンチ西側で確認された基壇基底部での地山上面検出レベルが標高 23.8~23.9m であることから、基壇構築に当たっては基壇部分の掘り込み地業が広く行われたものと推測される。この掘り込み地業が第 2 次調査 1 トレンチまで及んでいるものとする。

基壇東辺からさらに東側には残存度の高い瓦片が地山直上、基壇東辺から 2.2m の範囲にまとまって分布し、さらにトレンチ外西方に広がりを持つ。軒丸瓦 9 点 (236~240)、軒平瓦 14 点 (241~254)、熨斗瓦 2 点 (255・256)、丸瓦 120 点 (257~269)、平瓦 255 点 (270~286)、須恵器杯 B 片 1 点 (222)、杯 B 蓋 2 点 (220・221)、杯 2 点、甕片 1 点、土師器甕片 1 点、製塩土器片 5 点が出土。この上に細片化した瓦が密に混じる暗褐色粘質土が薄く堆積し、さらに上面には黒褐色土が堆積する。堆積土からは軒丸瓦 1 点 (287)、丸瓦 105 点 (288~294)、平瓦 134 点 (295~301)、須恵器杯 A 1 点、杯 B 2 点、杯 1 点、製塩土器片 2 点、鉄製品 2 点が出土した。下層の出土状況がほぼ元位置を保つことに対して上層では二次堆積による流れ込みによるものと考えられる。

### 遺物

220・221 は須恵器杯 B。220 は復元口径 11.0 cm を測る。天井部は肥厚し扁平である。口縁端部をつまみ出し面取りする。221 の復元口径は 14.8 cm を測る。天井部にはつまみがつくものと思われる。220 に比べ器厚は薄く、天井部から緩やかに口縁部に至る。口縁端部をつまみ出し面取りする。9 世紀前葉の時期と思われる。222 は須恵器杯 B で、底径 7.4 cm を測る。高台を貼り付ける。高台内側は鋭い稜を持ち、外側は丸みを帯びる。接地部はやや内弯するが、ほぼ水平を呈する。時期は 9 世紀前葉頃に属すると思われる。

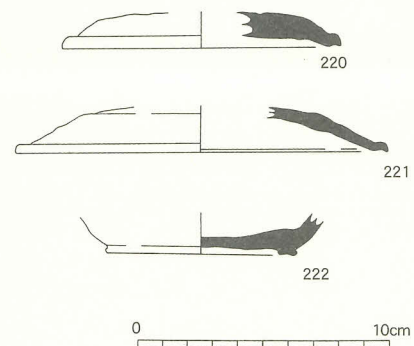
瓦については、基壇構成土中出土瓦 (223~235)、基壇遺構瓦溜まり下層 (236~286)、基壇遺構瓦溜まり上層 (287~301) の順に報告する。

223、224 は偏行唐草文軒平瓦。223 は瓦当復元厚 5.0 cm を測る。瓦当上外区には珠文を配したものと認められ、内区左界線と接続する唐草文主葉と内区上下界線から派生する支葉を配する。瓦当から 7.5 cm で段顎となる。224 は瓦当厚 4.7 cm を測る。瓦当文様構成は 223 と同様であるが、珠文が剥離により失われる。瓦当から 7.2 cm で段顎となる。いずれも凸面には強い横ナデを施し、凹面に布目を残す。

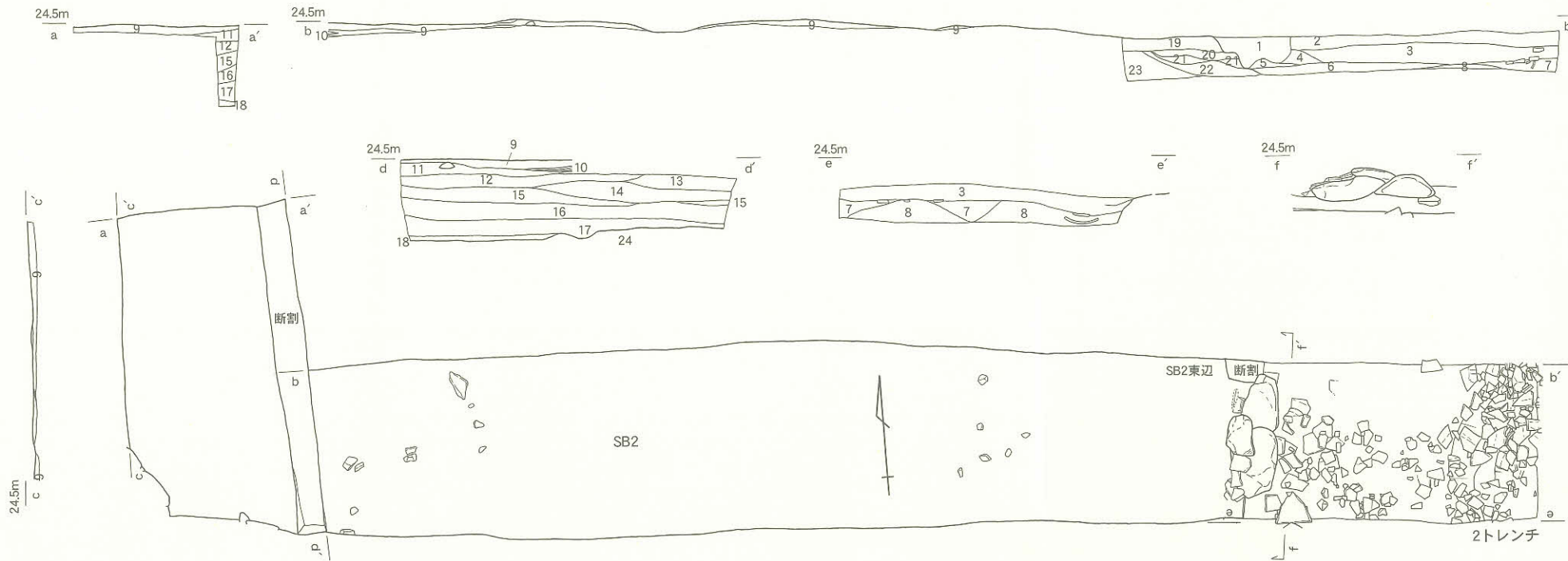
225 は隅落とし平瓦。凸面には 1 単位 4 本からなる平行叩きを連続して施す。凹面は布目を縦方向に強くナデ消し、側縁凹面に面取り状の強いナデを施す。

226、227 は丸瓦。226 は凸面に強い横ナデを施し、227 は凸面に平行叩きを施した後、横方向に強くナデ消す。227 の側縁凹面、凸面は薄く面取りする。

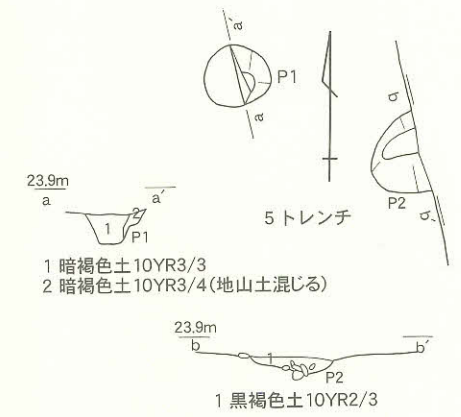
228~235 は平瓦。228、229 の凸面には 1 単位 4 本からなる平行文が連続する叩きを施す。229 の狭端凸面は横方向に叩き目をナデ消す。228 の凹面は布目を縦方向に強くナデ消し、229 の凹面は布目を残す。ともに端部、側縁部は未調整。230、231 は凸面に斜格子叩きを施す。斜格子の単位は、230 が縦 0.9 cm、横 1.4 cm、231 が縦 0.7 cm、横 0.9 cm である。ともに横方向に弱くナデ消す。格子目が大きい 230 の凹面は布目を縦方向に強くナデ消す。230 は側縁凹面を面取りする。232~235 は凸面をナデ調整し、凹面に布目痕を残す。232、233 凹面は模骨痕を残す。234 は側縁凸面を面取りする。



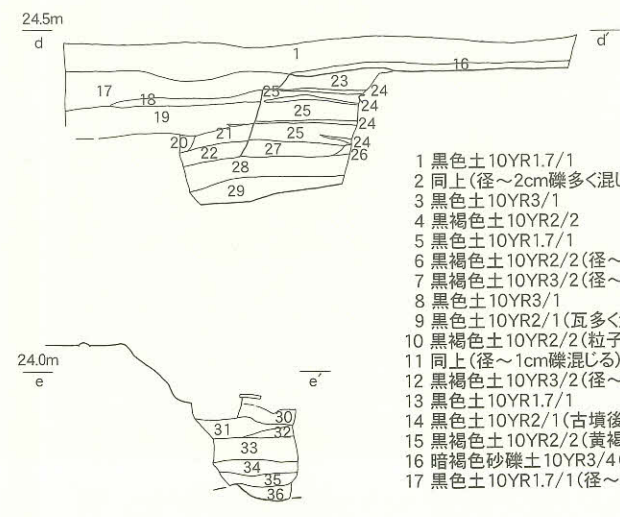
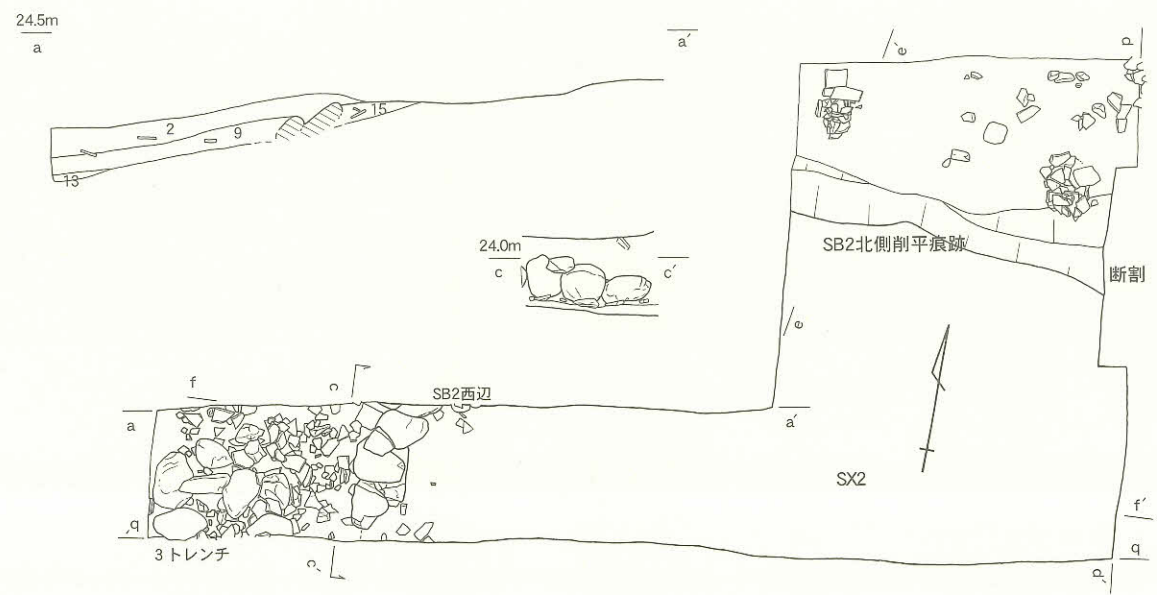
第 57 図 興道寺廃寺第 6 次調査 2 トレンチ SB 2 東辺瓦溜まり下層出土土器実測図 (縮尺 1/3)



- 1 黒褐色土 10YR2/2
- 2 同上(径~2cm礫混じる)
- 3 黒褐色土 10YR2/3(同上)
- 4 黒褐色土 10YR2/3
- 5 同上
- 6 暗褐色粘質土 10YR3/4(よく締まる)
- 7 黒褐色土 10YR2/3(瓦多く混じる)
- 8 暗褐色土 10YR3/4(よく締まる)
- 9 黒褐色砂質土 10YR2/2(よく締まる、黄褐色土混じる)
- 10 黄褐色砂質土 10YR4/4・黒褐色土 10YR2/2互層(よく締まる)
- 11 黄褐色砂質土 10YR4/4(よく締まる)
- 12 黒色土 10YR2/1(よく締まる)
- 13 黒色土 10YR2/1(よく締まる)
- 14 にぶい黄褐色砂礫土 10YR5/4(径~3cm礫多く混じる)
- 15 にぶい黄褐色土 10YR4/3(よく締まる、径~1cm礫密に混じる)
- 16 黒色土 10YR1.7/1(黄褐色土混じる)
- 17 黒色土 10YR1.7/1
- 18 黒褐色砂礫土 10YR2/3(径~2cm礫混じる)
- 19 黒色土 10YR1.7/1(黄褐色土混じる)
- 20 黒褐色土 10YR2/2(よく締まる)
- 21 黒褐色砂質土 10YR4/6(よく締まる)
- 22 黒褐色土 10YR2/2(よく締まる)
- 23 黄褐色砂礫土 10YR5/6(よく締まる、径~3cm礫混じる)
- 24 明黄褐色砂礫土 7.5YR5/6(径~3cm礫混じる)

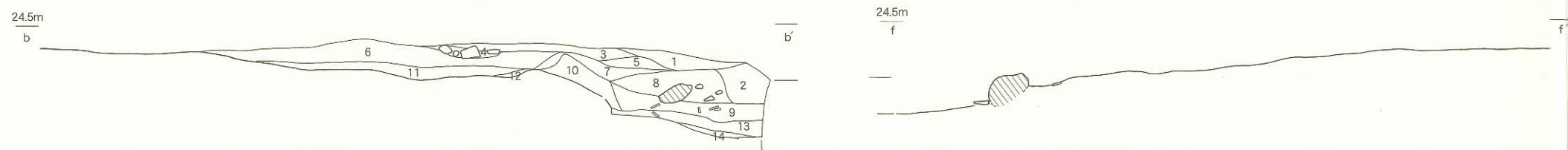


- 1 暗褐色土 10YR3/3
- 2 暗褐色土 10YR3/4(地山土混じる)
- 1 黒褐色土 10YR2/3



- 1 黒色土 10YR1.7/1
- 2 同上(径~2cm礫多く混じる)
- 3 黒色土 10YR3/1
- 4 黒褐色土 10YR2/2
- 5 黒色土 10YR1.7/1
- 6 黒褐色土 10YR2/2(径~3cm礫混じる)
- 7 黒褐色土 10YR3/2(径~5cm礫密に混じる)
- 8 黒色土 10YR3/1
- 9 黒色土 10YR2/1(瓦多く混じる)
- 10 黒褐色土 10YR2/2(粒子密)
- 11 同上(径~1cm礫混じる)
- 12 黒褐色土 10YR3/2(径~5cm礫密に混じる)
- 13 黒色土 10YR1.7/1
- 14 黒色土 10YR2/1(古墳後期の土器片混じる)
- 15 黒褐色土 10YR2/2(黄褐色粘土混じる)
- 16 暗褐色砂礫土 10YR3/4(径~1cm礫多く混じる)
- 17 黒色土 10YR1.7/1(径~2cm礫混じる)

- 18 黒褐色土 10YR2/2(黄褐色粘土混じる)
- 19 黒褐色土 10YR2/2(径~5cm礫少し混じる)
- 20 黒褐色土 10YR2/3
- 21 黒褐色土 10YR2/2(黄褐色粘土多く混じる)
- 22 褐色土 10YR4/4(径~1cm礫混じる)
- 23 黒褐色土 10YR2/2(よく締まる)
- 24 黄褐色砂礫土 10YR5/6(よく締まる、径~1cm礫密に混じる)
- 25 黒褐色土 7.5YR3/1(よく締まる、径~1cm礫密に混じる、黄褐色土混じる)
- 26 褐色砂礫土 7.5YR4/3(よく締まる、径~2cm礫多く混じる)
- 27 褐色砂礫土 7.5YR4/4(同上)
- 28 黒褐色土 10YR2/3(径~1cm礫多く混じる)
- 29 黒褐色土 10YR2/2
- 30 黒褐色土 10YR2/2(径~2cm礫混じる)
- 31 褐色土 10YR4/6(よく締まる)
- 32 黒褐色土 10YR2/2
- 33 黒色土 10YR1.7/1(径~5cm礫混じる)
- 34 黒色土 10YR2/2(径~2cm礫混じる)
- 35 黒色土 10YR1.7/1
- 36 黒色土 10YR2/1(古墳後期の土器片混じる)



第58図 興道寺廃寺第6次調査2・3・5トレンチ遺構平面図・土層断面図(縮尺1/50)

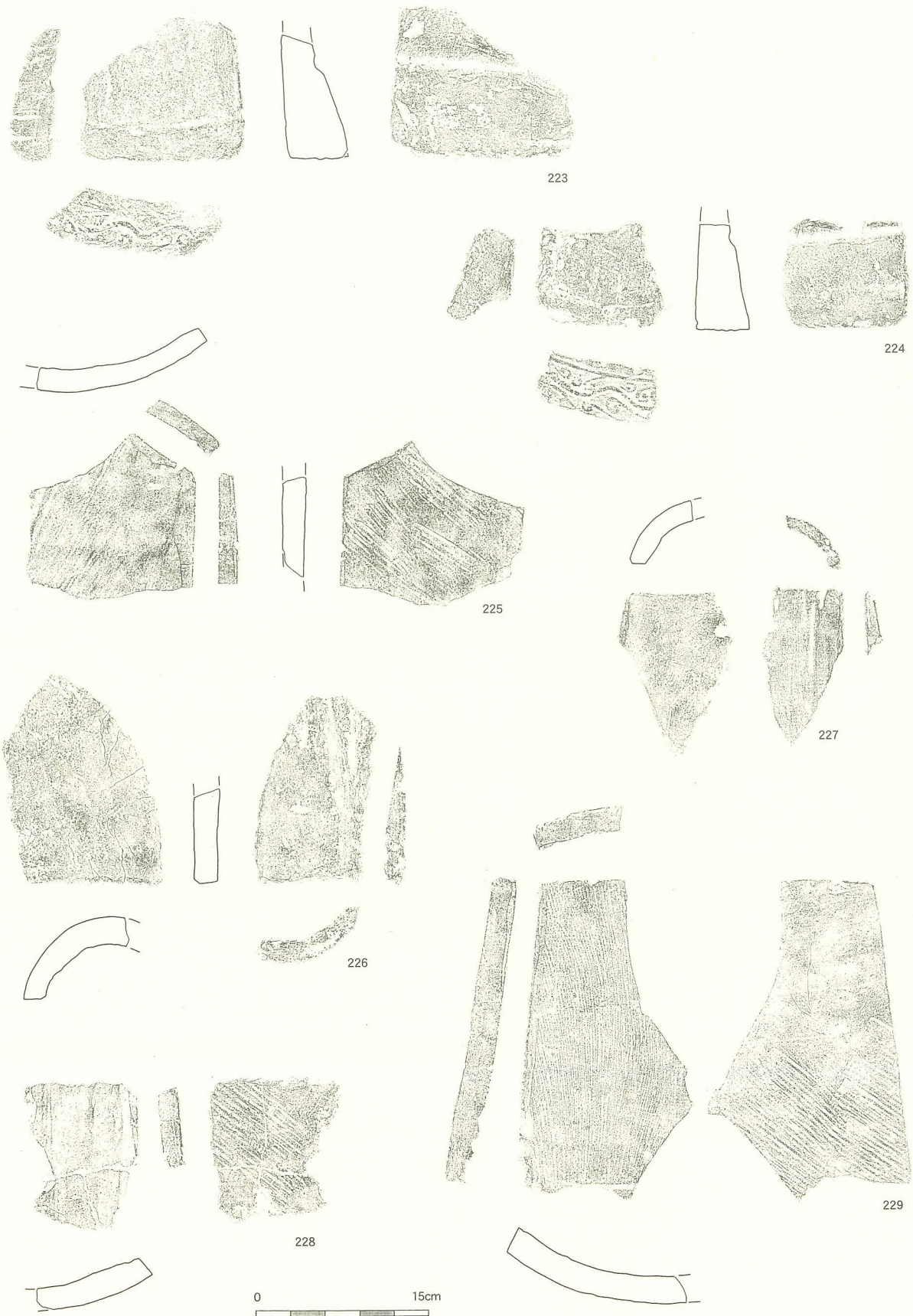
236～239は素弁十葉蓮華文軒丸瓦。236は瓦当外縁復元径17.0cm、中房径4.7cm、外縁幅1.4cm、瓦当厚2.8cmを測る。中房には0.4cmの珠文を1+8に配する。間弁は鋭さが失われるが、文様の崩れは見られない。瓦当裏面は不定方向のナデを施す。237は瓦当外縁復元径17.0cm、中房復元径4.8cm、外縁幅最大1.4cmを、239では瓦当外縁復元径16.6cm、中房復元径5.0cm、外縁幅1.6cmを測る。ともに外縁の歪みが顕著で、237は極端に外縁幅が薄くなる部分が見られ、239では外縁の一部が間弁の先端に接近する。また、237では蓮弁の一部に範傷を持ち、239では蓮弁、間弁を横断する範傷を持つなど、文様の崩れが進行する。238は瓦当外縁で幅1.5cmを測る。外縁に削りを施す。240は素弁九葉蓮華文軒平瓦。瓦当厚3.3cm。外区外縁に線鋸歯文を内縁には径0.3～0.4cmの珠文を配する。

241、242は三重弧文軒平瓦。瓦当復元厚は241が3.9cm、242が3.5cm。瓦当文様の断面形状は弧線がともに幅が厚く平坦であり、凹線は浅く幅が狭い箱型状を呈する。242にやや文様の崩れが見られる。凸面にはともに花卉型押し文が部分的に残るが、平瓦部凸面の剥離部に2cmあたり4～5本の平行叩き痕を残す。241の平行叩きは叩き目を交差させる。凹面はともに布目を残すが、241は布目を縦方向にナデ消す。241は側縁凹面を面取りする。243～248は三重弧文軒平瓦。瓦当厚はそれぞれ3.2cm、2.8cm、2.4cm、2.9cm、2.9cm、3.1cmを測る。243～245の瓦当文様の断面形状は弧線がやや丸みを帯びた鋭い山形状を、凹面は浅いU字状を呈することに対して、246～248は弧線を短く鋭い山形状、凹線は浅い箱型を呈する。凸面は総じて強い横ナデを施すが、243、244、247、248には一部に叩き目が大きい縄目叩き痕が残る。凹面は全て布目を残し、244、245には模骨痕を留める。側縁部は総じて未調整である。249～254は偏行唐草文軒平瓦。瓦当厚はそれぞれ3.5cm（現存厚）、5.1cm、5.0cm、5.0cm、5.3cm、復元5.1cmを測る。瓦当文様は上外区に径0.3～0.5cmの珠文を2.5cm内外の間隔で配し、内区には左右界線から派生する主葉と内区上下界線から派生する支葉を配する。顎形状は瓦当面からそれぞれ250が7.1cm、251が7.3cm、253が7.9cm、254が6.4cmで段顎となるが、249は直線顎である。凸面はいずれも強いナデを施すが、249、251、253には部分的に叩き目が粗い縄目叩き痕を残す。いずれも凹面、側縁部は未調整。

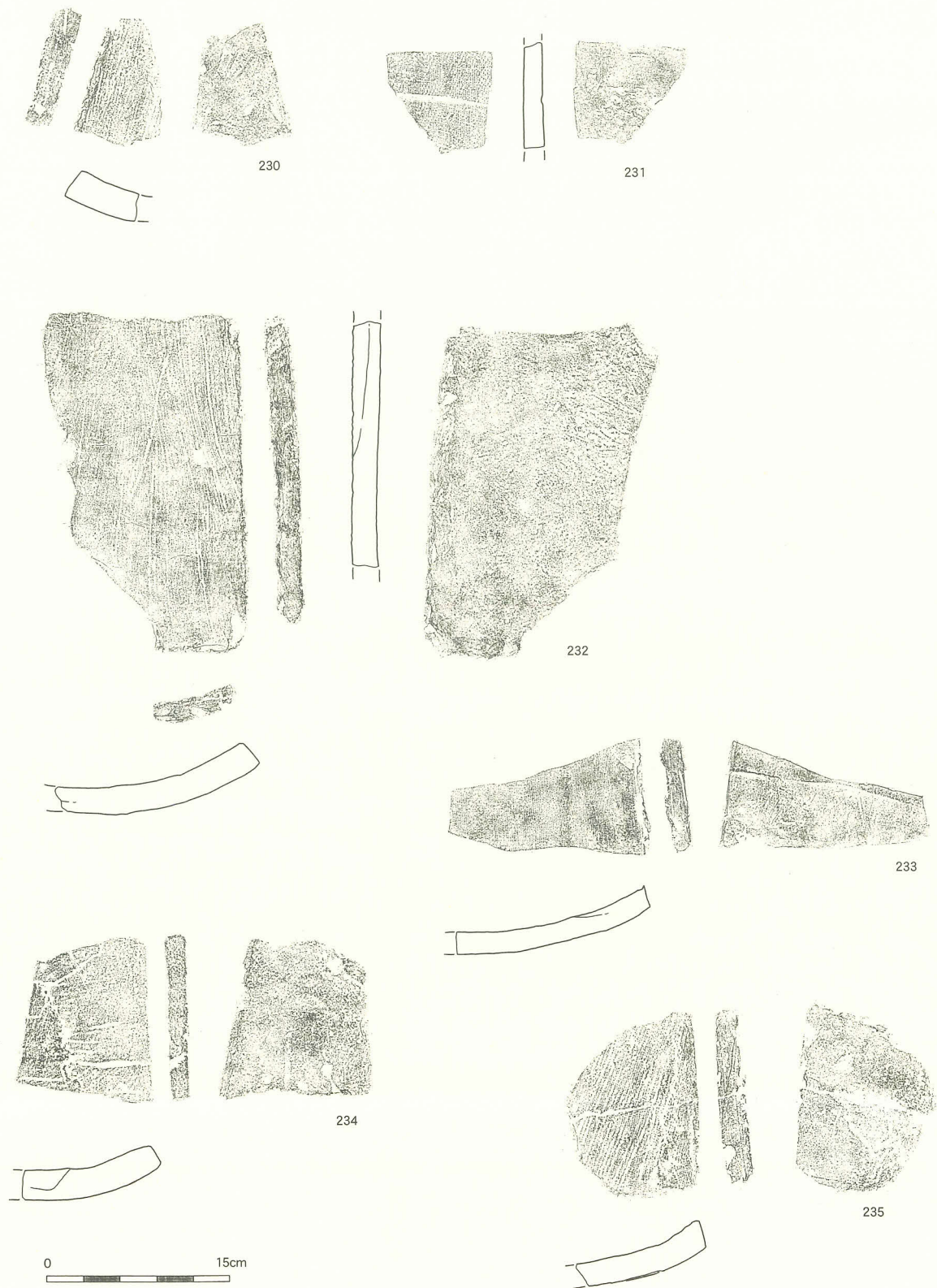
255、256は熨斗瓦。凸面は255が強い横ナデを、256は2cmあたり5本の平行叩きを施す。凹面はいずれも布目を縦方向に強くナデ消す。側縁部は未調整である。

257～269は丸瓦。257～261の凸面には平行叩きを施し、横方向に強くナデ消す。叩き目は総じて1単位4本からなり、端面、側面に対して斜方向に連続的に叩きを施すが、261、262は端面に平行する。凹面は布目を残す。262の布目痕は密であり、257には布綴じ合わせ目が残る。端部、側縁部の調整は、258、259、261、262の側縁凹面に面取りを施す以外は未調整である。259は全長36.0cm、259～261には釘穴が見られる。263～269の凸面は強い横ナデを施す。凹面の布目は264、267、268が密である。端部、側縁部の調整は265、266以外の側縁凹面を面取りする。

270～286は平瓦。270～272の凸面は1単位4本の平行叩きを連続的に施し、272は叩き目を横方向に薄くナデ消す。凹面はいずれも布目を縦方向に強くナデ消す。270には薄く模骨痕が残る。270は端部、側縁部の凹面、凸面を強く面取りする。273～275の凸面には斜格子叩きを施す。格子目の単位は、273が縦1.0cm、横1.2cm、274が縦0.7cm、横1.0cm、275は縦0.5cm、横0.7cmである。いずれも叩き目をナデ消すため、部分的に叩き目が残るに留まる。275は強いケズリ状の縦ナデを施し、狭端凹面には桶杵痕、狭端凸面にも同箇所未調整部分を残す。凹面は274が布目のナデ消しを施し、275に薄く模骨痕を残す。端部、側縁部は未調整。276～278は凸面に2cmあたり6本の縄目叩きを施すが、総じて横方向にナデ消す。278は全面に叩き目を薄く残す。凹面は276、278に模骨痕を残す。276、277の狭端凹面に桶杵痕を残す。端部、側縁部は未調整。279～286の凸面は総じて強い横ナデを施し、279、284は縦方向、283は縦、横方向のナデである。284はケズリ状のナデ。凹面は総じて未調整で、279～281、283、285、286は模骨痕、280は布綴じ合わせ目を残す。283、285の布目痕は密である。



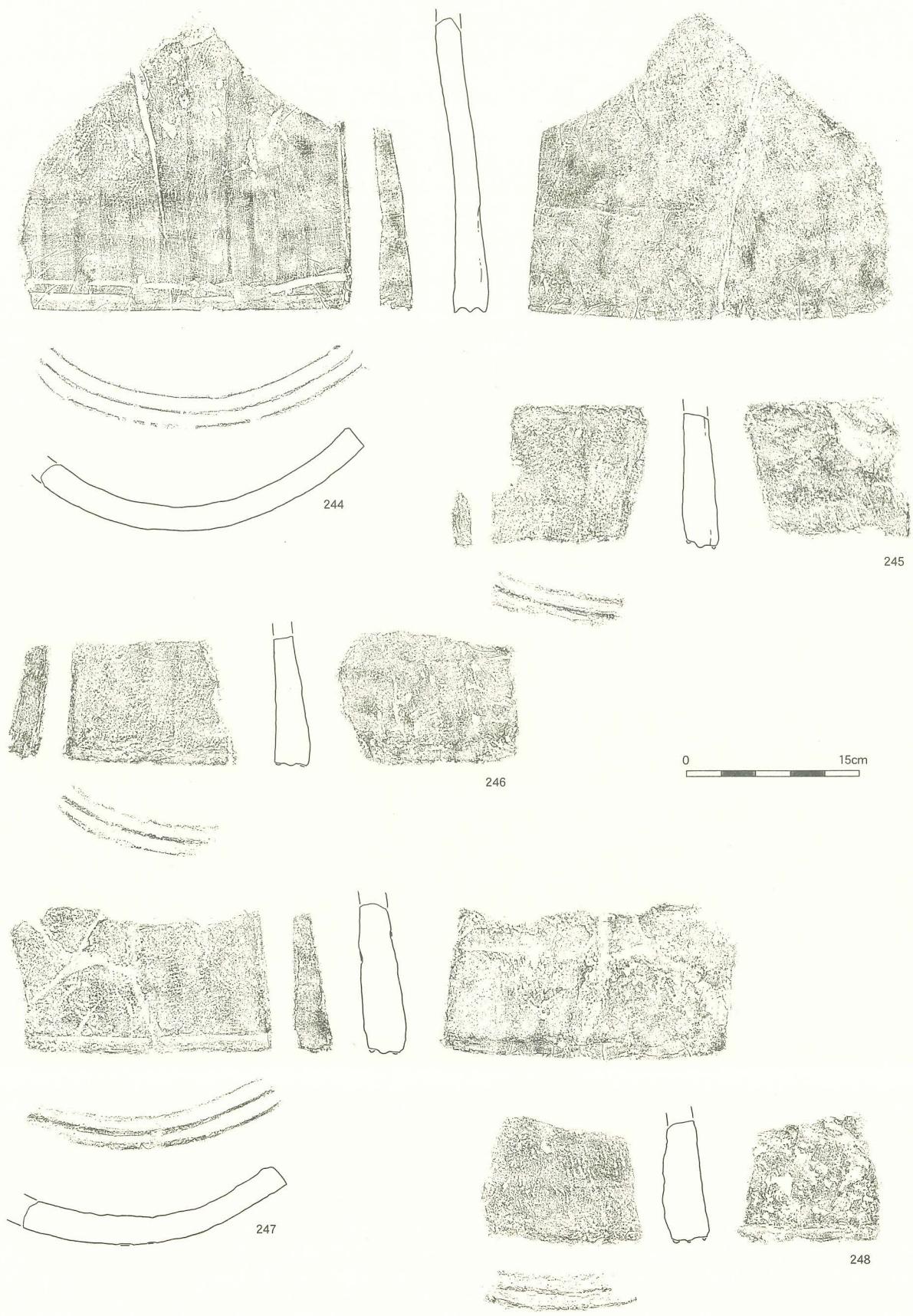
第 59 図 興道寺廢寺第 6 次調査 2 トレンチ SB 2 構成土出土瓦実測図 1 (縮尺 1/5)



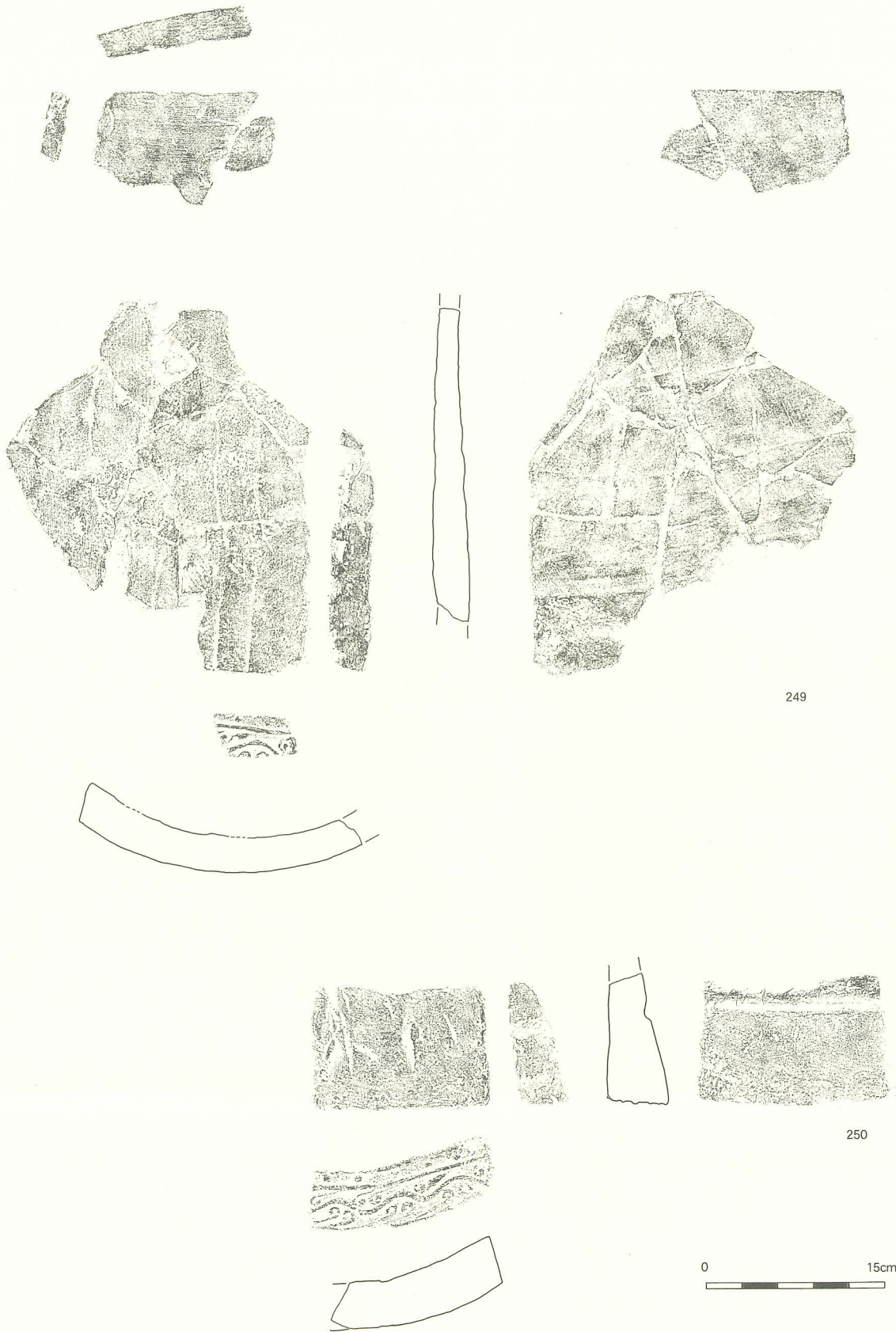
第60図 興道寺廃寺第6次調査2トレンチSB2構成土出土瓦実測図2 (縮尺1/5)



第61図 興道寺廃寺第6次調査2トレンチSB2東辺瓦溜まり下層出土瓦実測図1 (縮尺1/5)

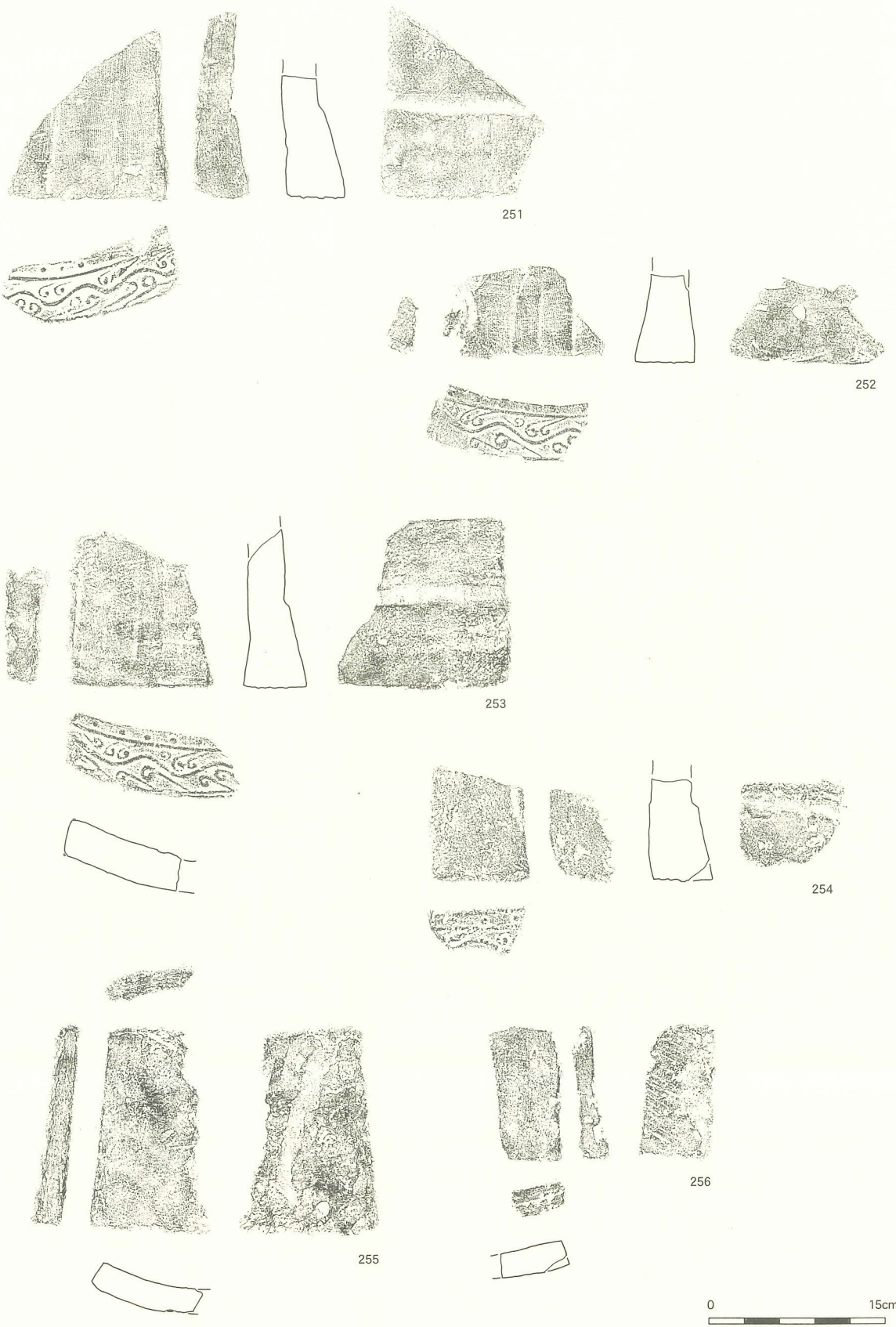


第62図 興道寺廃寺第6次調査2トレンチSB2東辺瓦溜まり下層出土瓦実測図2 (縮尺1/5)

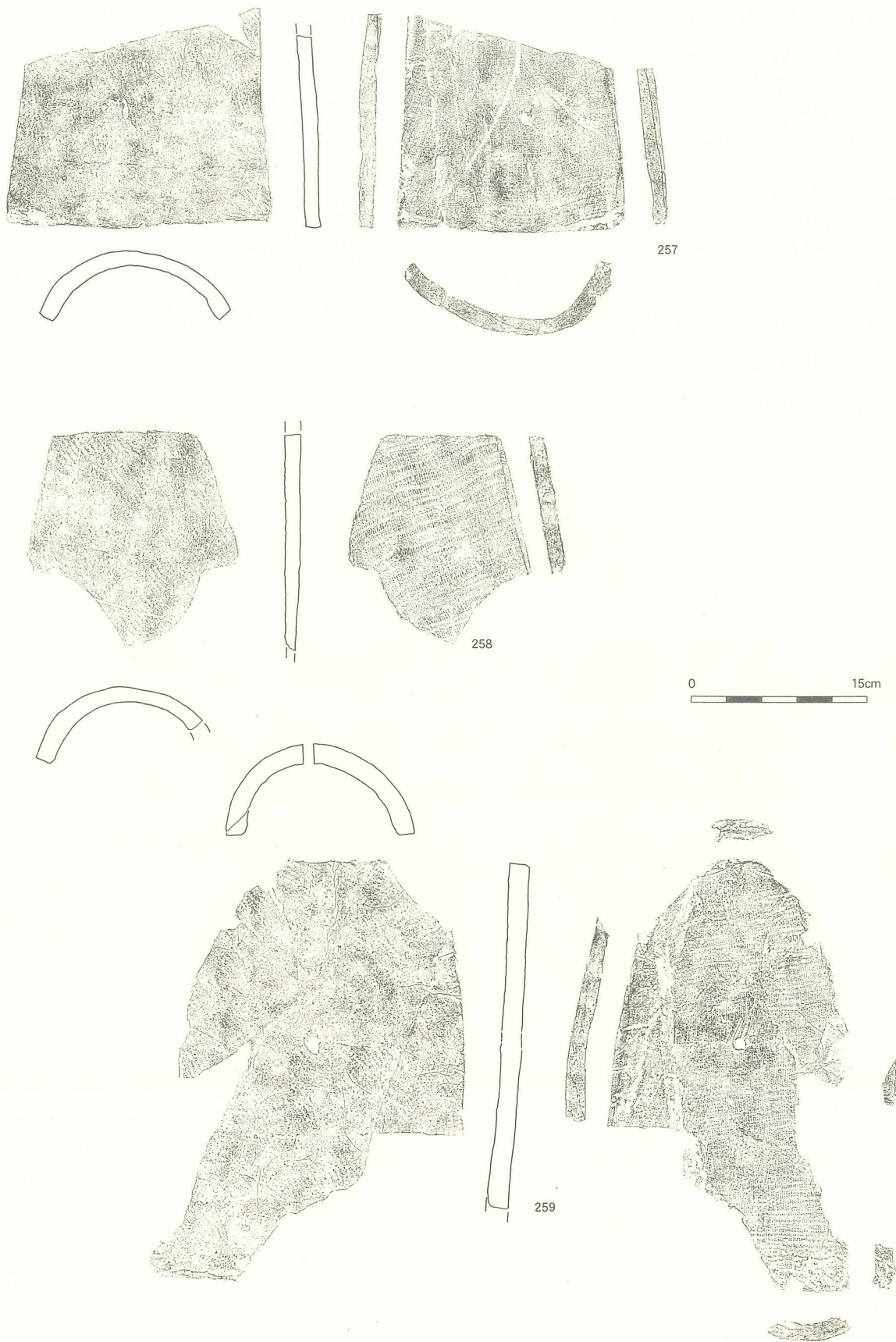


第63図 興道寺廃寺第6次調査2トレンチSB2東辺瓦溜まり下層出土瓦実測図3 (縮尺1/5)

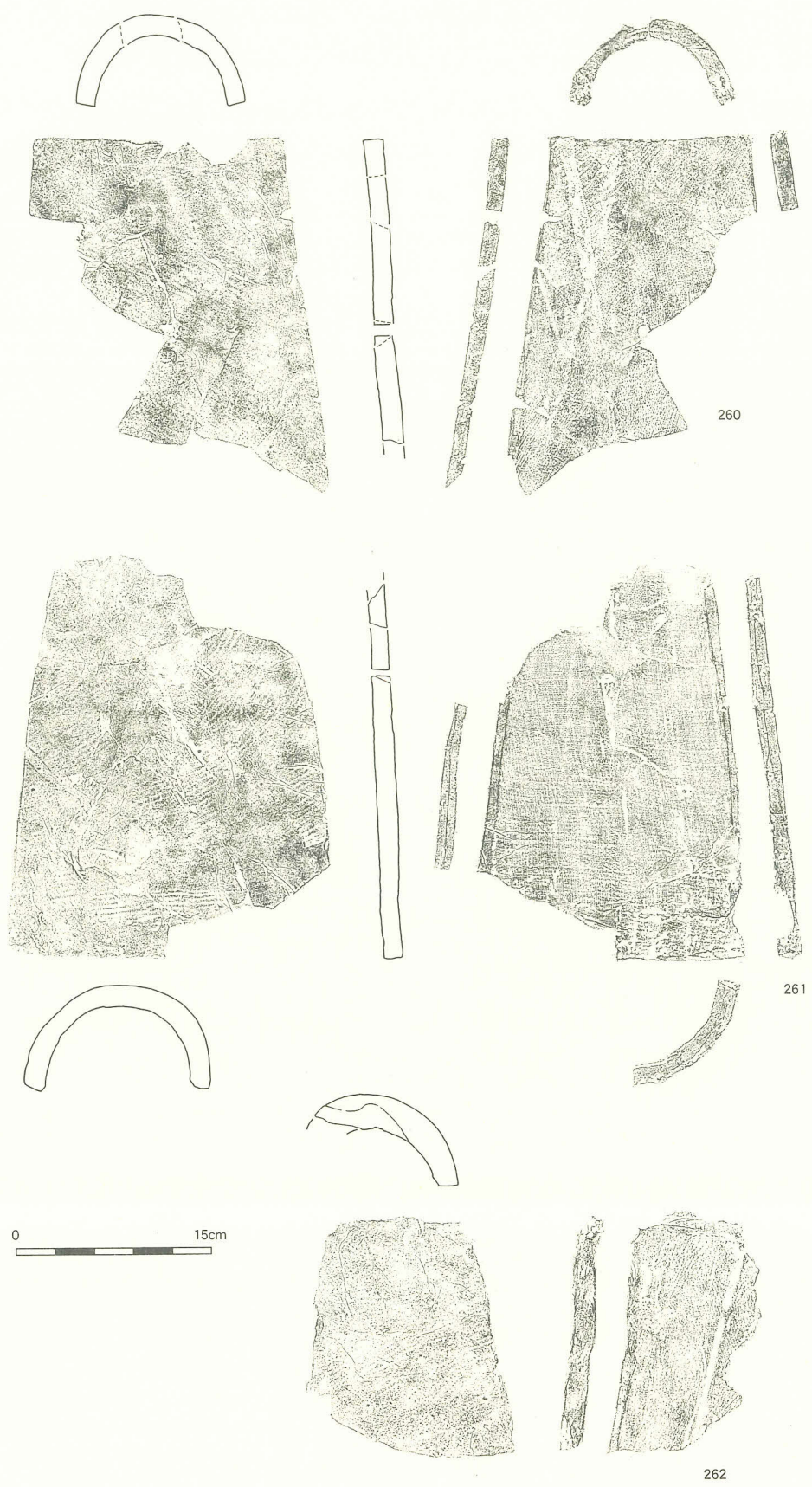




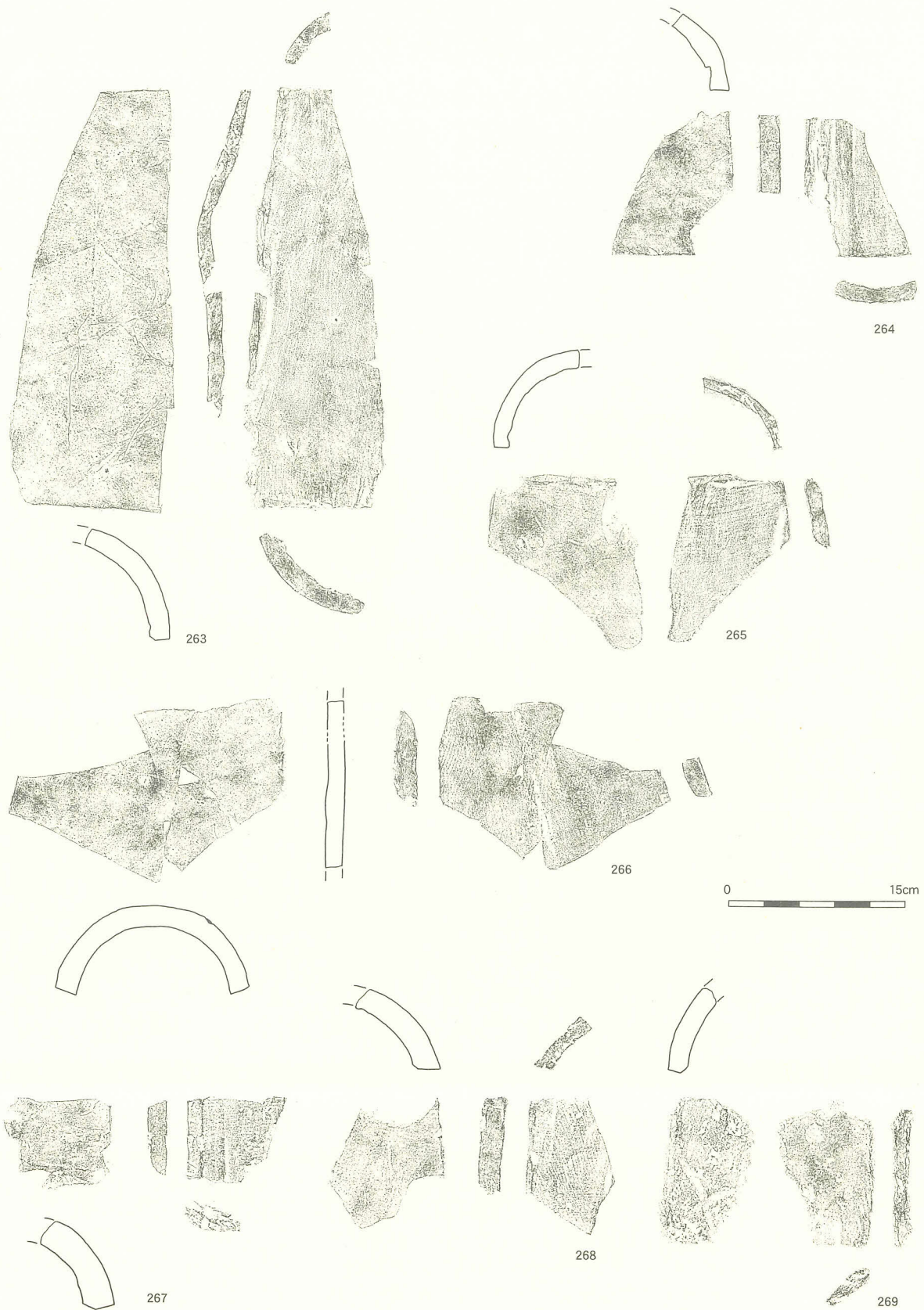
第64図 興道寺廃寺第6次調査2トレンチSB2東辺瓦溜まり下層出土瓦実測図4 (縮尺1/5)



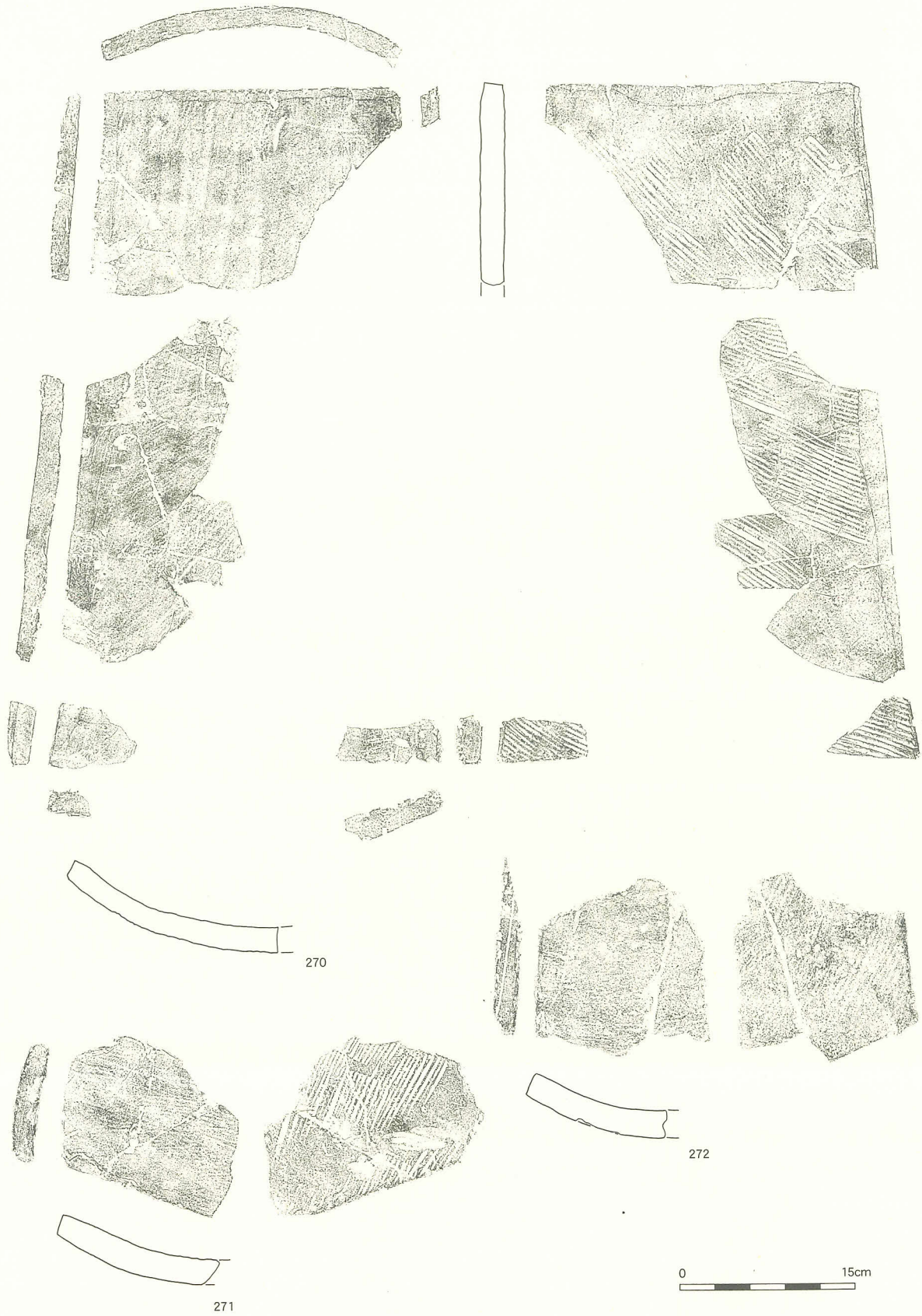
第65図 興道寺廃寺第6次調査2トレンチSB2東辺瓦溜まり下層出土瓦実測図5 (縮尺1/5)



第 66 図 興道寺廃寺第 6 次調査 2 トレンチ SB 2 東辺瓦溜まり下層出土瓦実測図 6 (縮尺 1/5)



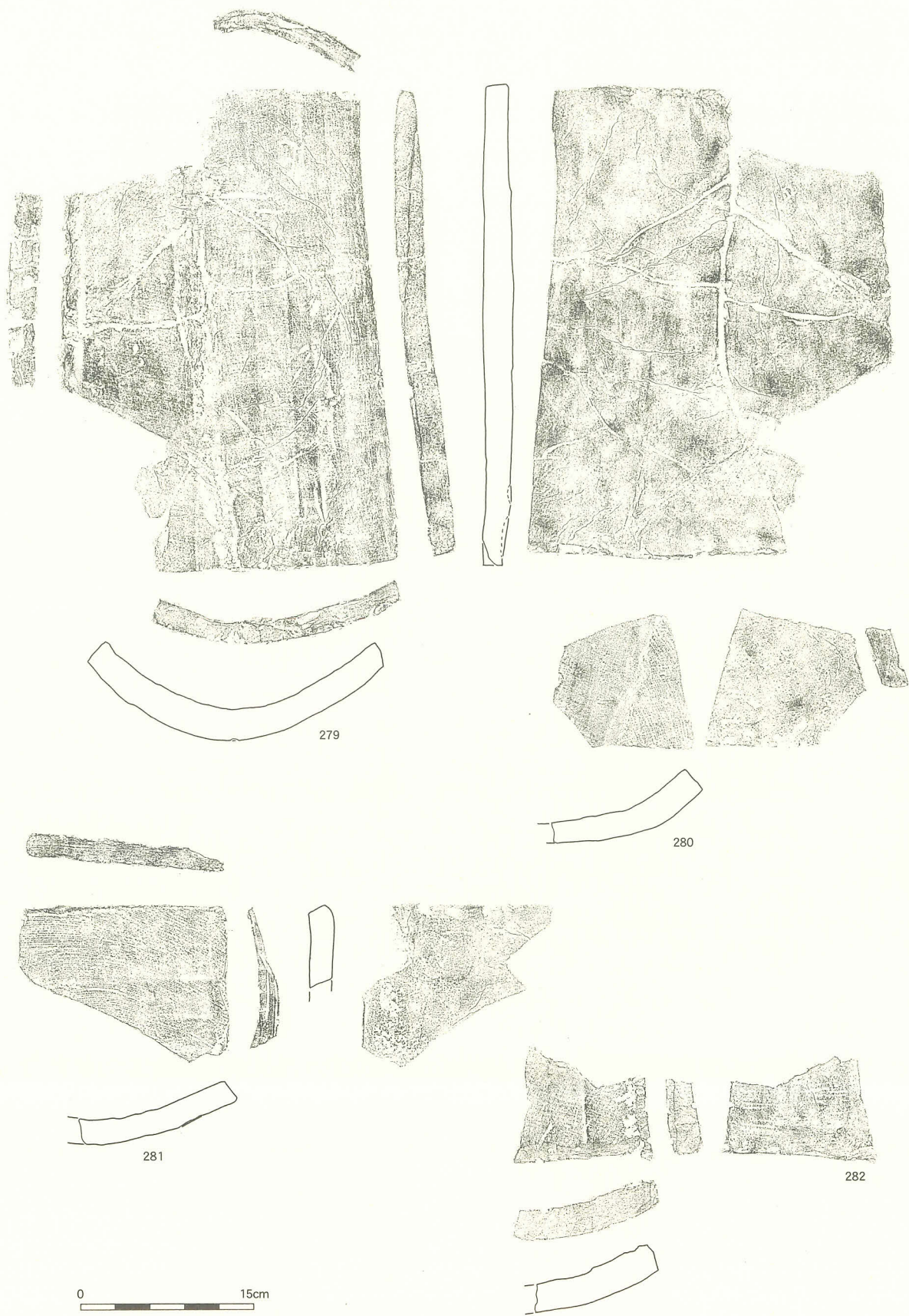
第67図 興道寺廃寺第6次調査2トレンチSB2東辺瓦溜まり下層出土瓦実測図7 (縮尺1/5)



第68図 興道寺廃寺第6次調査2トレンチSB2東辺瓦溜まり下層出土瓦実測図8 (縮尺1/5)



第69図 興道寺廃寺第6次調査2トレンチSB2東辺瓦溜まり下層出土瓦実測図9 (縮尺1/5)

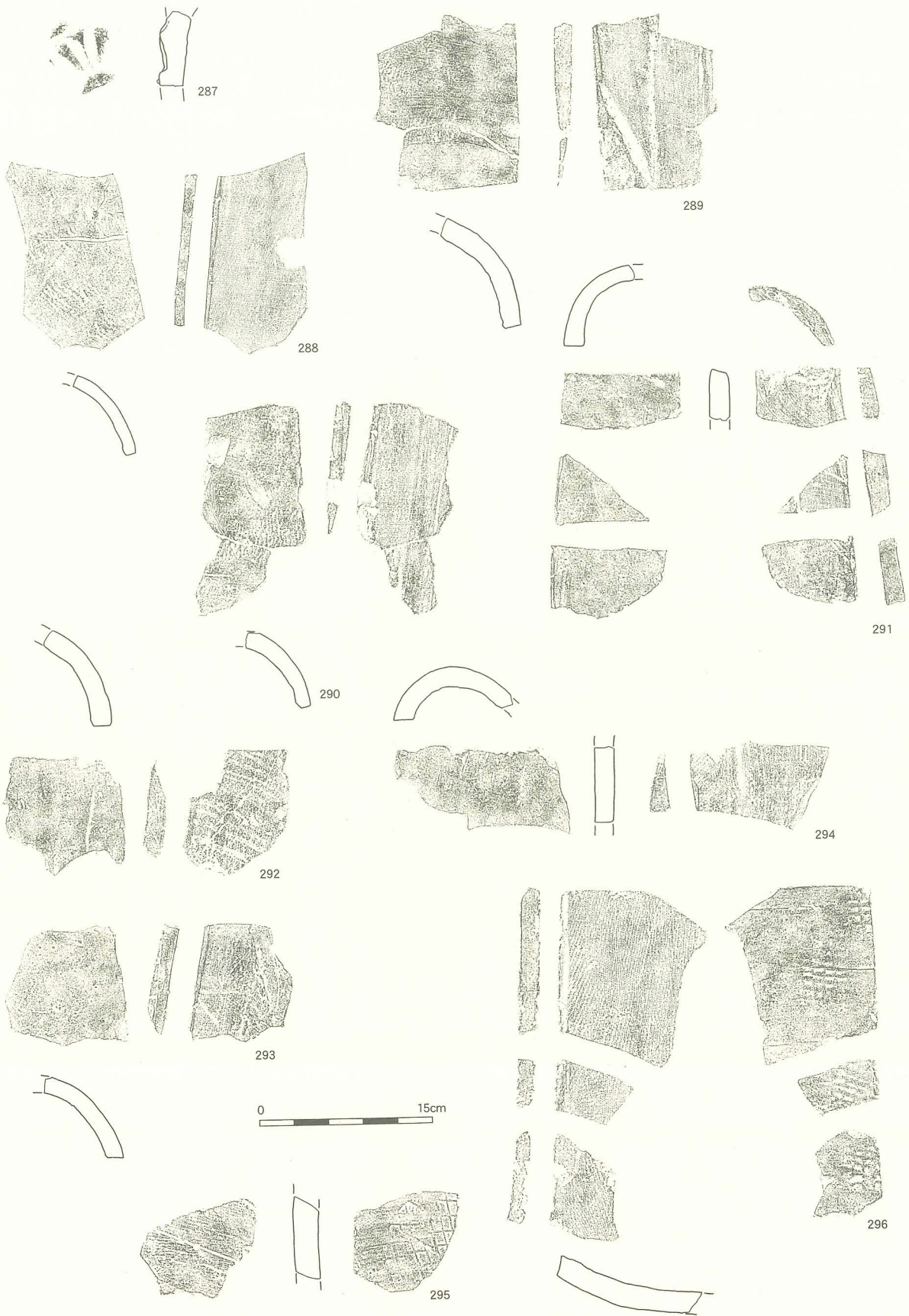


第70図 興道寺廃寺第6次調査2トレンチSB2東辺瓦溜まり下層出土瓦実測図10 (縮尺1/5)



第71図 興道寺廃寺第6次調査2トレンチSB2東辺瓦溜まり下層出土瓦実測図11 (縮尺1/5)





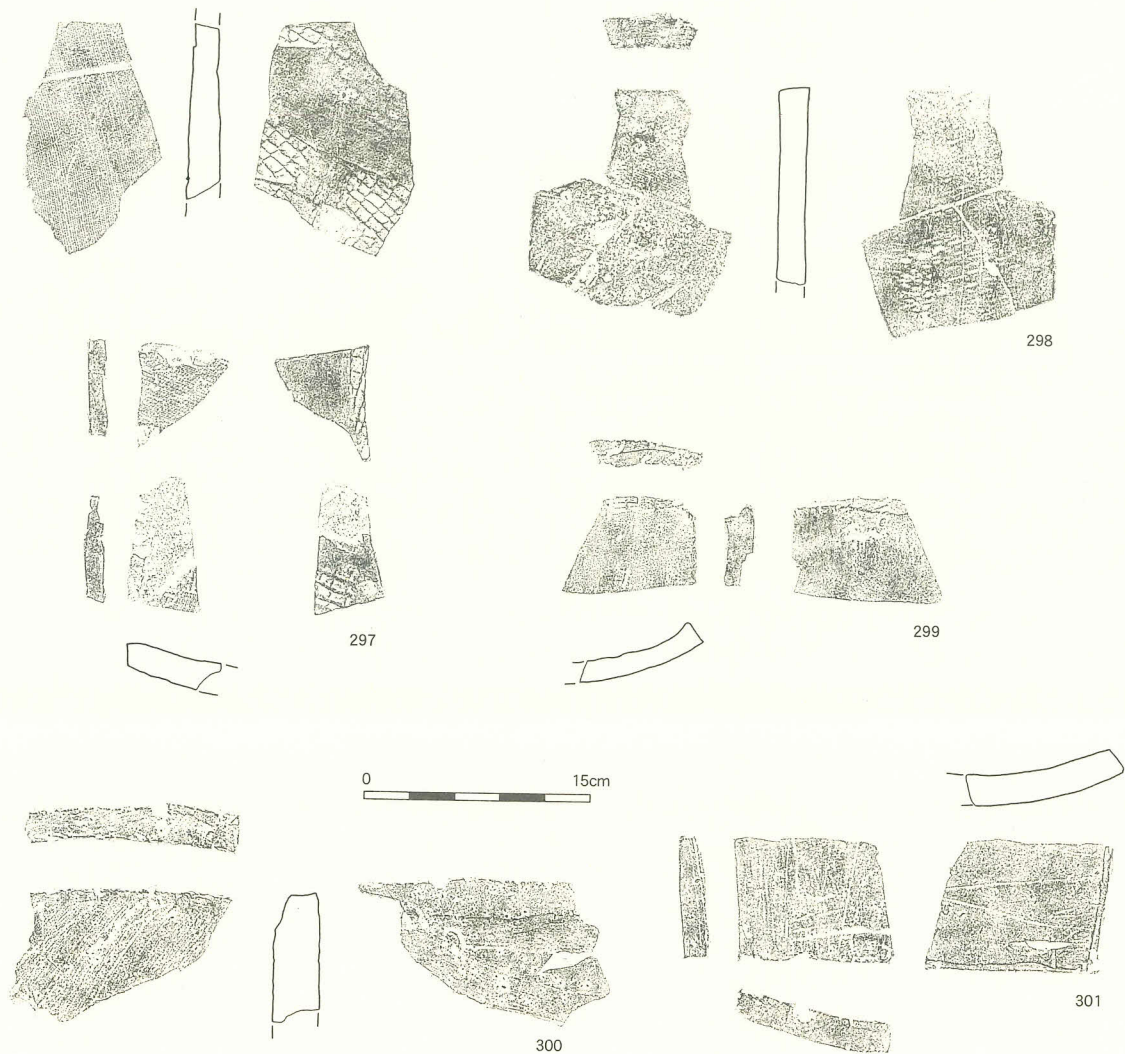
第72図 興道寺廃寺第6次調査2トレンチSB2東辺瓦溜まり上層出土瓦実測図1 (縮尺1/5)

端部、側縁部の調整は282、283、285が側縁凹面を面取りする。

287は素弁九葉蓮華文軒丸瓦。外区内縁に珠文が見られる。

288～294は丸瓦。288～290の凸面には2cmあたり5、6条の縄目叩きを施す。いずれも叩き目を横方向に強くナデ消す。凹面は布目を残し、側縁凹面を薄く面取りする。291～294は凸面に強く横ナデを施す。凹面は294の布目が密。293の側縁凹面を薄く面取りする。

295～301は平瓦。295の凸面には1単位が縦0.7cm、横1.2cmの斜格子叩きを施す。凸面には部分的に赤色顔料の付着が見られる。凹面は布目の強いナデ消しを施す。296の凸面には1単位が縦0.4cm、横0.6cmの正格子叩きを施し、凹面は模骨痕を残す。297は凸面に1単位が縦0.5cm、横1.0cmの正格子叩きを施した後、強く横ナデする。298、299は凸面に縄目叩きを施した後、強くナデ消す。299の叩き目は2cmあたり9条と細い。299の凹面には模骨痕を残す。側縁部は未調整。300、301は凸面を強く横ナデする。凹面は300に布目を残すが、301は布目を縦方向に強くナデ消す。300は狭端凸面を、301は広端凸面、側縁凸面を面取りする。



第73図 興道寺廃寺第6次調査2トレンチS B 2東辺瓦溜まり上層出土瓦実測図2 (縮尺1/5)

#### 第4項 3トレンチ

##### 基本層序

調査地は畑地であり、地表面の標高 24.4~24.5m。耕作土となる黒褐色土（層厚 0.2m）下、標高 24.0~24.3mで基壇遺構の基壇面となり、トレンチ北側、西側では小礫が混じる黒色土、黒褐色土が堆積する瓦溜まりとなり、トレンチ西端では標高 23.5m前後で地山土、明黄褐色粘質土層上面に、トレンチ北端では標高 23.8mで同じく明黄褐色粘質土層上面へと至る。

##### 遺構

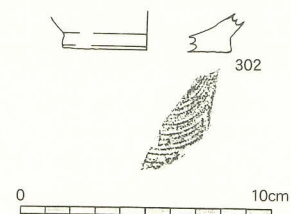
明黄褐色粘質層上面に基底部を持つ基壇遺構 2（SB 2）が検出されている。

##### 基壇遺構

基壇遺構 2（SB 2）は 2 トレンチにおいて確認された基壇遺構と同一遺構で、基壇面、基壇西辺および基壇北側の削平痕跡を検出した。南北検出長 2.16m、東西検出長 5.08m、基壇西辺下端の地山面から最高 0.58mを測る盛土平坦面を検出した。基壇面の標高は 24.0~24.3mで、西辺に向けて標高が徐々に低くなる。2 トレンチで検出された基壇面とは 0.2、0.3mほど基壇面の標高が低く、総じて基壇面の削平を受けている。基壇北側では標高 23.25~23.5mまで地山層を削平し、標高 23.6m付近まで、黒色土、黒褐色土を水平に積み、基壇基部を造る。標高 23.9mまでは褐色砂礫土（一部、褐色土）、黒褐色土を順に盛り、叩き締める。さらに標高 24.25mまで厚さ数cmからなる褐色砂礫土と厚さ 0.1m強、小礫が混じる黒褐色土を交互に叩き締め、標高 24.3mまで暗褐色砂礫土を固めて基壇面としている。ただし、後世の基壇削平を受けており、基壇北辺はさらに北側に位置したものと考えられる。この基壇削平部分では基壇基底部となる黒色土、黒褐色土層中から須恵器杯H蓋 1 点が出土。

基壇西辺では標高 23.5m付近を上面とする地山面の上に、東に向けて緩やかな傾斜を持たせて約 0.3mの盛土を行い、標高 23.8m付近の盛土面上に自然礫を石列状に配することで基壇外装とする。石列の使用礫は 0.3m内外の未加工の花崗岩を横位に奥に控えを取って小口面を外に向けて並べる。4石が元位置を保つ。基壇西辺のさらに西側には同等規格の石材 6石が瓦とともに出土しており、確認列石が石積みの基底石となり、2、3段の石積みが存在した可能性もある。石列の裏込め部分の基壇構成土中、あるいは列石に潰されるように直下から丸瓦片 5 点（304）、平瓦片 14 点（305~311）、瓦小片 9 点が出土し、また列石下には 2 トレンチと同様に偏行唐草文軒平瓦 1 点（303）が瓦当面を外側に向けて差し込まれていた。

基壇西辺からさらに西側では、地山面の上の盛土面に厚く黒色土が堆積し、残存度が高い瓦片が基壇東辺から 1.35mの範囲にまとまって分布し、さらにトレンチ外西方に広がりを持つ。軒平瓦 1 点（312）、丸瓦片 104 点（313~320）、平瓦片 134 点（321~328）、土師器甕片 2 点、底部に糸切りを施す皿片 1 点（302）が出土した。さらに上層には小ぶりの瓦片が大量に堆積する。軒丸瓦 1 点（329）、丸瓦片 71 点（330~332）、平瓦片 88 点（333）、須恵器杯H片 1 点、杯H蓋片 3 点、皿片 1 点、甕片 3 点、土師器甕片 3 点、赤彩土師器杯片 1 点、製塩土器片 7 点、底部に糸切りを施す土師器皿 1 点、土師質羽釜片 1 点、鉄釘 1 点が出土。下層の出土状況はほぼ元位置を保つものと考えられる。トレンチ北側で確認された基壇削平痕跡部分においても、堆積する黒褐色土中にブロック状のまとまりを持って丸瓦片 42 点（334・335）、平瓦片 75 点（336~340）、瓦小片 32 点、須恵器杯H蓋片 1 点、甕片 1 点、鉄製品 1 点が出土しているが、元位置を保つものではない。



第74図 興道寺廃寺第6次調査3トレンチ  
SB 2西辺瓦溜まり下層出土土器  
実測図（縮尺 1/3）

## 遺物

302 は土師器皿底部。復元底径 6.7 cm を測る。底部は平底となる。回転ナデを施し、底部外面は回転糸切り痕がみられる。時期は 10 世紀後半から 11 世紀代に属すると思われる。

瓦は、基壇構成土中出土瓦 (303~311)、基壇遺構西辺瓦溜まり下層 (312~328)、基壇遺構西辺瓦溜まり上層 (329~333)、基壇遺構北辺削平痕跡部分 (334~340) の順に報告する。

303 は偏行唐草文軒平瓦。瓦当厚 5.0 cm。瓦当面から 8.1 cm で有段となる。瓦当文様は上外区に径 0.4 cm ほどの珠文を 2.0 cm の間隔で配し、内区には主葉の上下に内区上下界線から派生する支葉を巡らす。平瓦部凸面には強い横ナデを施し、凹面には布目を残す。

304 は丸瓦。凸面は強い横ナデを施し、凹面には布目を残す。側縁部は未調整。

305~311 は平瓦。305、308、309 は凸面に 2 cm あたり 5 本からなる平行叩きを施す。凹面はいずれも強いナデ消しを施し、305、308 はわずかに模骨痕が残る。端部、側縁部は 305、308 が未調整であるが、309 は側縁凹面、凸面を強く面取りする。306 は凸面に 1 単位が縦 0.8 cm、横 0.9 cm の正格子叩きを施し、横方向に強くナデ消す。凹面の一部にナデ消し痕が残る。側縁部は未調整。309 は凸面に縦 0.4 cm、横 0.6 cm の斜格子叩きを施す。310、311 は凸面に横ナデを、凹面は 310 に強いナデ消しを施す。いずれも凹面に模骨痕を残す。310 の側縁凸面を面取りする。

312 は三重弧文軒平瓦平瓦部。凸面に 1 単位 4 枚の花弁型押し文が重複して見られる。凹面には布目を残す。

313~320 は丸瓦。313 の凸面には 2 cm あたり 4 本の平行叩きを施した後、弱く横ナデする。凹面には布綴じ合わせ目が残る。314 の凸面には 2 cm あたり 4 条の縄目叩きを施し、横方向に弱くナデ消す。凹面、側縁部は未調整。315~320 の凸面は強い横ナデを施し、凹面は布目を残す。端部は未調整であるが、315、316 は側縁凹面、凸面を、319、320 は側縁凹面を面取りする。

321~328 は平瓦。321、324 の凸面には、321 が 1 単位が縦 0.7 cm、横 0.8 cm、324 が縦 2 cm、横 0.8 cm の正格子叩きを施し、強くナデ消す。凹面にはともに布目、模骨痕を残す。端部、側縁部は 324 が側縁凹面、凸面を薄く面取りする。322、323 は凸面に斜格子叩きを施し、強くナデ消す。323 のナデは強いケズリ状である。叩き目の単位はともに縦 0.4 cm、横 0.7 cm である。凹面、端部、側縁部は未調整。325 は凸面に 2 cm あたり 6 条の縄目叩きを施す。326~328 は凸面をナデ調整する。凹面、端部、側縁部は未調整であるが、327 の凹面に布目のナデ消し痕が残る。

329 は軒丸瓦の丸瓦部。瓦当接合部分の広端面を削り調整する。凸面には縄目叩きのナデ消し痕が残る。

330~332 は丸瓦。330 の凸面には 1 単位 4 本の平行叩きを施す。331 の凹面は布目をナデ消す。側縁凹面を面取りする。331、332 は凸面に強い横ナデを施す。332 凹面には布綴じ合わせ目が残る。332 は側縁凹面を面取りする。

333 は平瓦。凸面には 1 単位が縦 0.4 cm、横 1.0 cm の正格子叩きを施し、強くナデ消す。端部、側縁部は未調整。

334、335 は丸瓦。334 の凸面には縄目叩きのナデ消し痕が残る。側縁凹面を面取りする。335 の凸面は強い横ナデを施す。側縁凸面を面取りする。

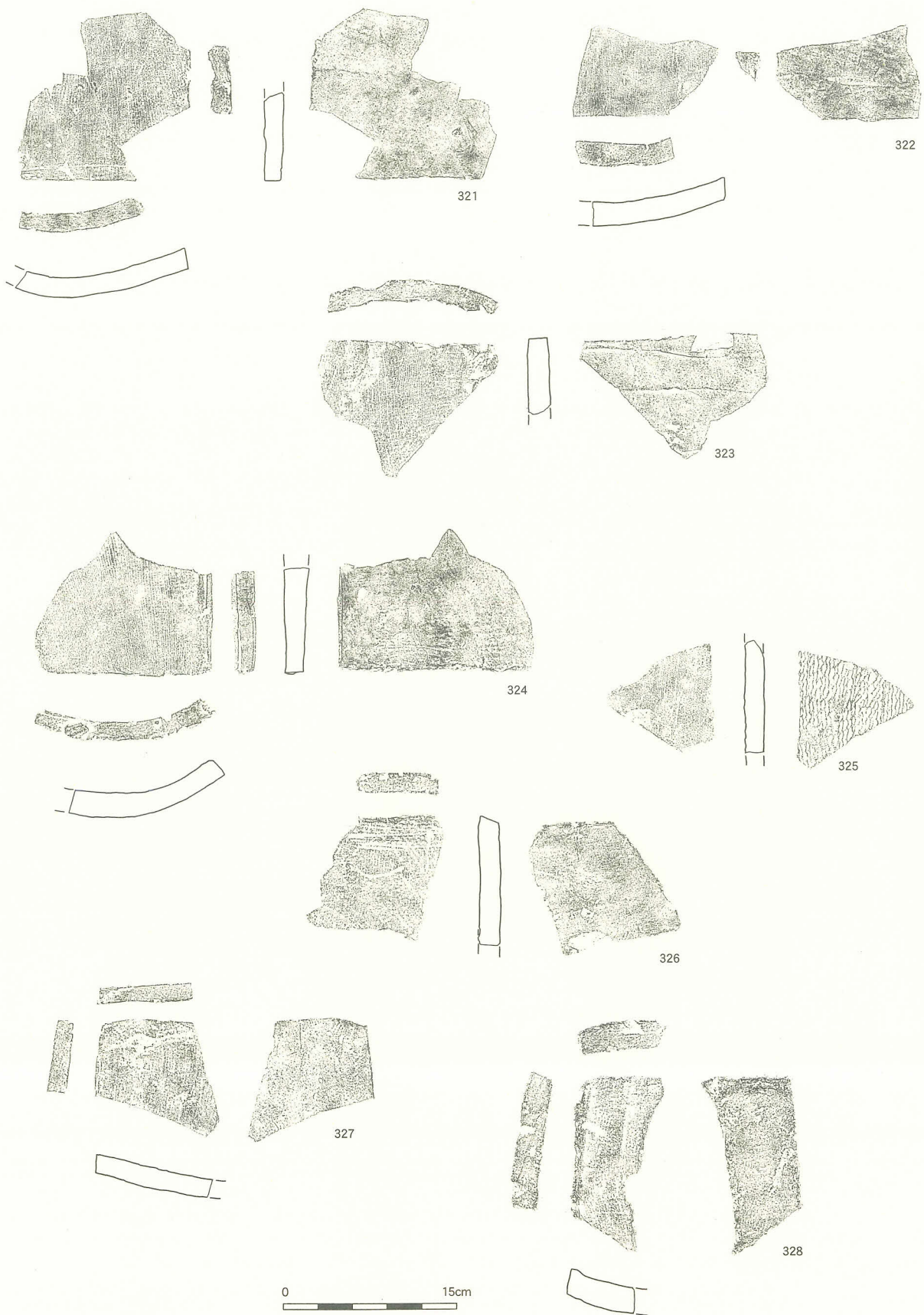
336~340 は平瓦。336 の凸面には 1 単位 4 本の平行叩きを施す。凹面には布目、模骨痕を残す。側縁凹面、凸面を面取りする。337 の凸面には 1 単位が縦 0.4 cm、横 0.7 cm の正格子目叩きを施し、強くナデ消す。凹面には布目、模骨痕を残す。端部、側縁部は未調整。338~340 の凸面は強い横ナデを施す。凹面は 339 が布目を横方向に強くナデ消し、340 は模骨痕を残す。340 の側縁凹面を面取りする以外は未調整。



第75図 興道寺廃寺第6次調査3トレンチSB2構成土出土瓦実測図(縮尺1/5)



第76図 興道寺廃寺第6次調査3トレンチSB2西辺瓦溜まり下層出土瓦実測図1 (縮尺1/5)



第77図 興道寺廃寺第6次調査3トレンチSB2西辺瓦溜まり下層出土瓦実測図2 (縮尺1/5)

#### 第5項 4トレンチ

##### 基本層序

調査地は畑地であり、地表面の標高 24.1~24.2m。耕作土となる黒褐色土（層厚 0.3~0.5m）下、標高 23.7m で地山土、黄褐色砂礫土層上面へと至る。なお、トレンチ北側においては不定形に東西に広がりを持って浅く落ち込む。黒褐色土、褐色土、暗褐色土が小礫とともにブロック状に堆積する。出土遺物はなく、明確な遺構として認識できなかった。

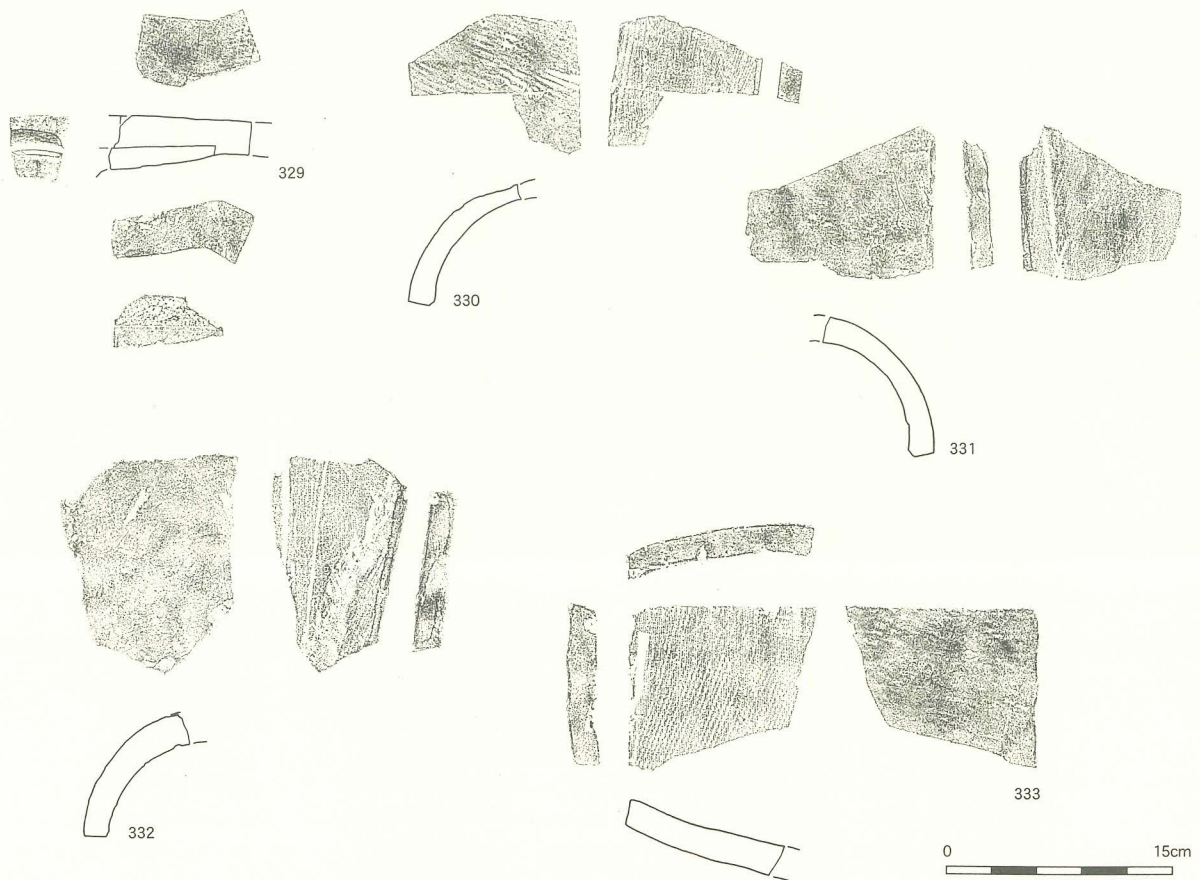
#### 第6項 5トレンチ

##### 基本層序

調査地は畑地であり、地表面の標高 24.1m。耕作土となる暗褐色土（層厚 0.4m）下、標高 23.7m で地山土、黄褐色砂礫土層上面へと至る。

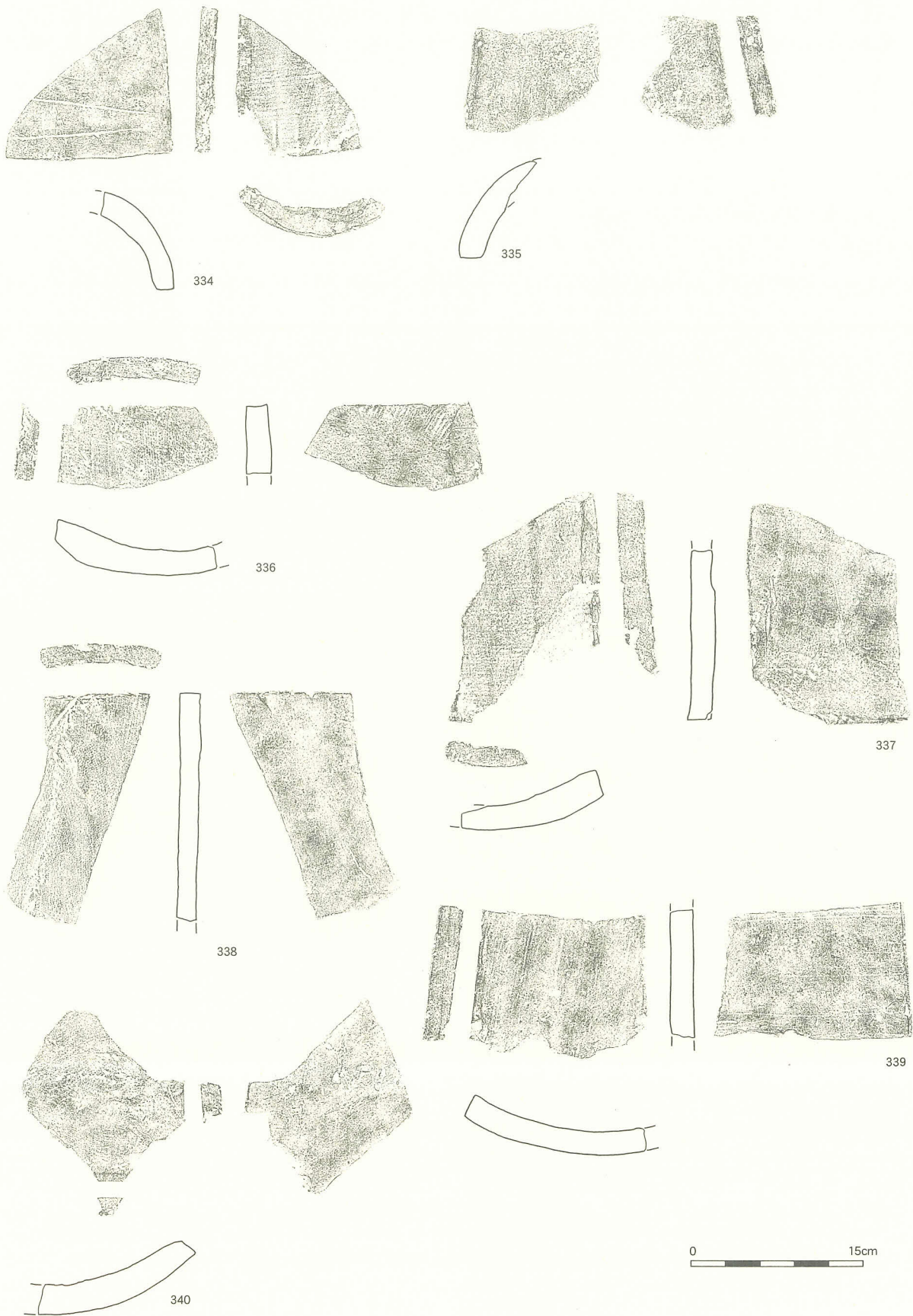
##### 遺構

黄褐色砂礫土層上面において小穴 2 基（P 1、P 2）が検出されている。表土から軒丸瓦片 1 点（341）、三重弧文軒平瓦片 1 点、平瓦片 1 点、土師器甕片 1 点が出土している。



第78図 興道寺廃寺第6次調査3トレンチSB2西辺瓦溜まり上層出土瓦実測図（縮尺 1/5）





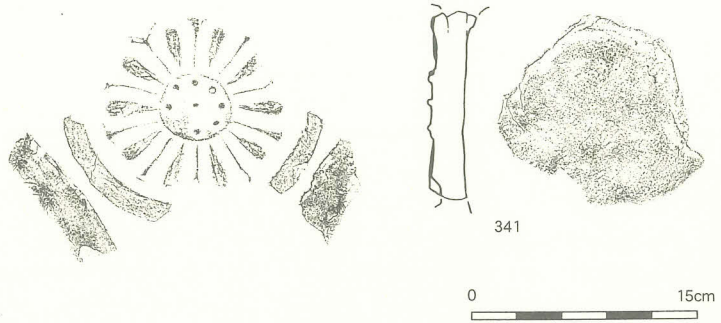
第 79 図 興道寺廃寺第 6 次調査 3 トレンチ S B 2 北側削平痕跡出土瓦実測図 (縮尺 1/5)

## 小穴

小穴1 (P1) は径0.3m、小穴2 (P2) は南北0.54m、東西検出長0.36mを測る。平面形態はともに円形を呈し、検出面からの深さは小穴1が0.19m、小穴2が0.10m。断面形状は小穴1が雷鉢状、小穴2が浅い弧状となる。小穴1は地山土が混じる暗褐色土を、小穴2は黒褐色土を埋土に持つ。ともに出土遺物はない。

## 遺物

341 は素弁十葉蓮華文軒丸瓦。外縁復元径16.6cm、中房径最大4.7cm、外縁幅1.2cm、瓦当厚2.1cmを測る。瓦当は厚みがあり、花卉の肉厚はやや乏しいが、花卉、間弁ともに鋭く作る。瓦当側面、丸瓦部との剥離面には布目痕が残る。



第80図 興道寺廃寺第6次調査5トレンチ表土出土瓦実測図(縮尺1/5)

## 第7項 6トレンチ

### 基本層序

調査地は畑地であり、地表面の標高24.5~24.6m。耕作土となる黒褐色土(層厚0.2m)下、標高23.3m前後で地山土、黄褐色砂礫土層上面へと至る。

## 遺構

黄褐色砂礫土層上面において溝1基(SD1)が検出されている。

## 溝

溝1(SD1)は細長く東西に延びる。東西検出長15.28m、検出最大幅0.75mを測る。平面形態からトレンチ外に長く伸張するものと思われる。検出面からの深さは0.34m。断面形状は箱型となる。基本的には黒褐色土を埋土に持ち、上位に拳大ほどの礫が混じる。平瓦片4点が出土。

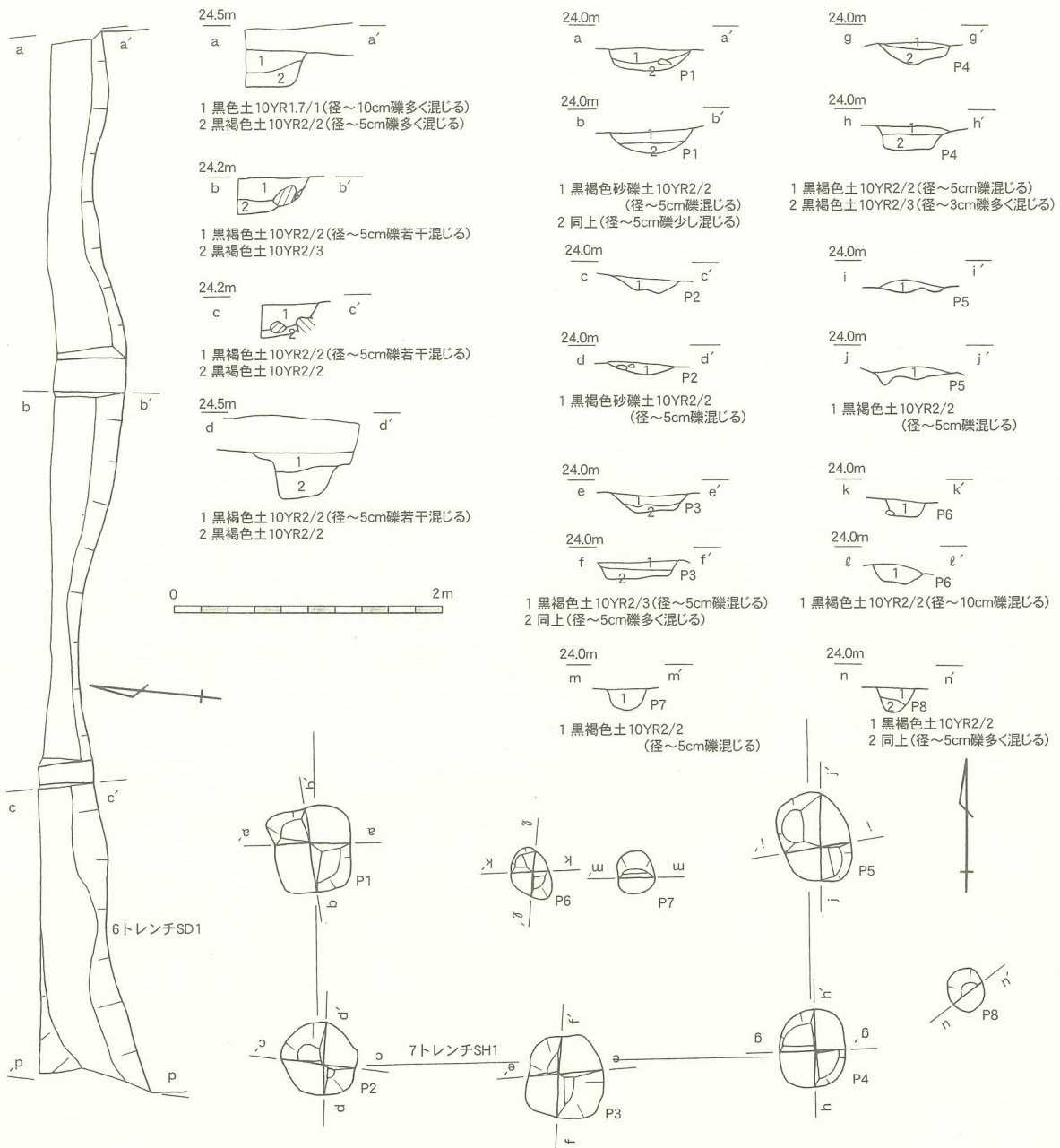
## 第8項 7トレンチ

### 基本層序

調査地は畑地であり、地表面の標高24.7~24.8m。耕作土となる黒褐色土(層厚0.3~0.4m)下、トレンチの南東付近では暗褐色砂礫土が0.1m程薄く堆積する。標高24.1~24.25m付近で地山土、黄褐色砂礫土層上面へと至る。

## 遺構

黄褐色砂礫土層上面において柱穴5基(P1~5)を伴う掘立柱建物跡1棟(SB1)、小穴3基(P6~8)が、また暗褐色砂礫土層上面から掘り込む小穴1基(P9)が検出されている。



第81図 興道寺廃寺第6次調査6・7トレンチ遺構平面図・土層断面図 (縮尺1/50)

### 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡1 (SH1) はトレンチ外、北方に延びるため全形は不明であるが、2間×1間以上の側柱建物である。柱穴となる小穴1~5で構成される。梁行は3.6m、桁行は検出されている1間分で1.6m。建物方位は方位に載る。

柱穴1 (P1) は平面形態が丸みを帯びた方形を呈する。東西、南北ともに0.64m、検出面からの深さ0.16mを測る。断面形状は緩やかな弧状となる。黒褐色砂礫土を埋土に持つ。律令期の須恵器壺片1点が出土。柱穴2 (P2) は平面形態が円形を呈し、南北0.54m、東西0.58m、検出面からの深さ0.10mを測る。断面は緩やかな弧状となる。黒褐色砂礫土を埋土に持つ。柱穴3 (P3) は平面形態が丸みを帯びた方形を呈する。南北0.61m、東西0.58m、検出面からの深さ0.12mを測る。断面形状は浅い箱型となる。小礫が混じる黒褐色土を埋土に持つ。製塩土器片1点が出土。柱穴4 (P4) は平面形態が円形を呈し、南北0.58m、東西0.50m、検出面からの深さ0.17mを測る。断面形状は底面が不定形である。小礫

が混じる黒褐色土を埋土に持つ。柱穴5（P5）は平面形態が楕円形を呈し、南北0.66m、東西検出長0.53mを測る。検出面からの深さは0.10mと浅い。断面形状は緩やかな弧状となるが、底面は不定形である。小礫が混じる黒褐色土を埋土に持つ。製塩土器片1点が出土。

## 小穴

小穴1（P6）は平面形態がいびつな円形を呈し、径0.30m、検出面からの深さ0.12mを測る。断面形状は箱型となる。小礫が混じる黒褐色土を埋土に持つ。小穴2（P7）は平面形態が円形を呈し、南北0.31m、東西0.26m、検出面からの深さ0.15mを測る。断面形状は弧状となる。小礫が混じる黒褐色土を埋土に持つ。小穴3（P8）は平面形態が円形を呈し、南北0.32m、東西0.28m、検出面からの深さ0.18mを測る。断面形状は丸みを帯びた尖底状となる。小礫が混じる黒褐色土を埋土に持つ。小穴4（P9）は平面形態がトレンチ南壁土層断面において検出したに留まる。平面形態は不明。深さは0.16m。断面形状は弧状となる。小礫が混じる黒褐色土を埋土に持つ。底部に糸切りを施す土師器皿片1点が出土。

## 第10節 興道寺廃寺第7次調査

### 第1項 調査の概要

調査地の地番は福井県三方郡美浜町興道寺4号観音3番地、5番地、6号淵ノ上21番地、22番地1。調査地は興道寺廃寺中心伽藍地内に位置する。個人住宅増築に伴う遺構存否確認を目的として1トレンチを、中心伽藍南辺の様相確認を目的として2トレンチを、第2次、第4次調査などで確認されている基壇遺構北辺の様相確認を目的として3トレンチを、そして第6次調査で確認された基壇遺構2東辺北側の様相確認を目的として4トレンチ、5トレンチと、休耕地に5箇所トレンチを設定した。トレンチの規模は、1トレンチ東西1.8m、南北1.6m、2トレンチ東西5.2m、南北4.1m、3トレンチは北側に東西3.0m、幅1.0m、南側に第2次調査2トレンチと重複するように南北3.1m、幅1.9m、4トレンチ南北2.0m、幅0.8m、5トレンチはL次状に南北3.0m、東西2.0m、幅0.55m、調査面積は計36㎡である。

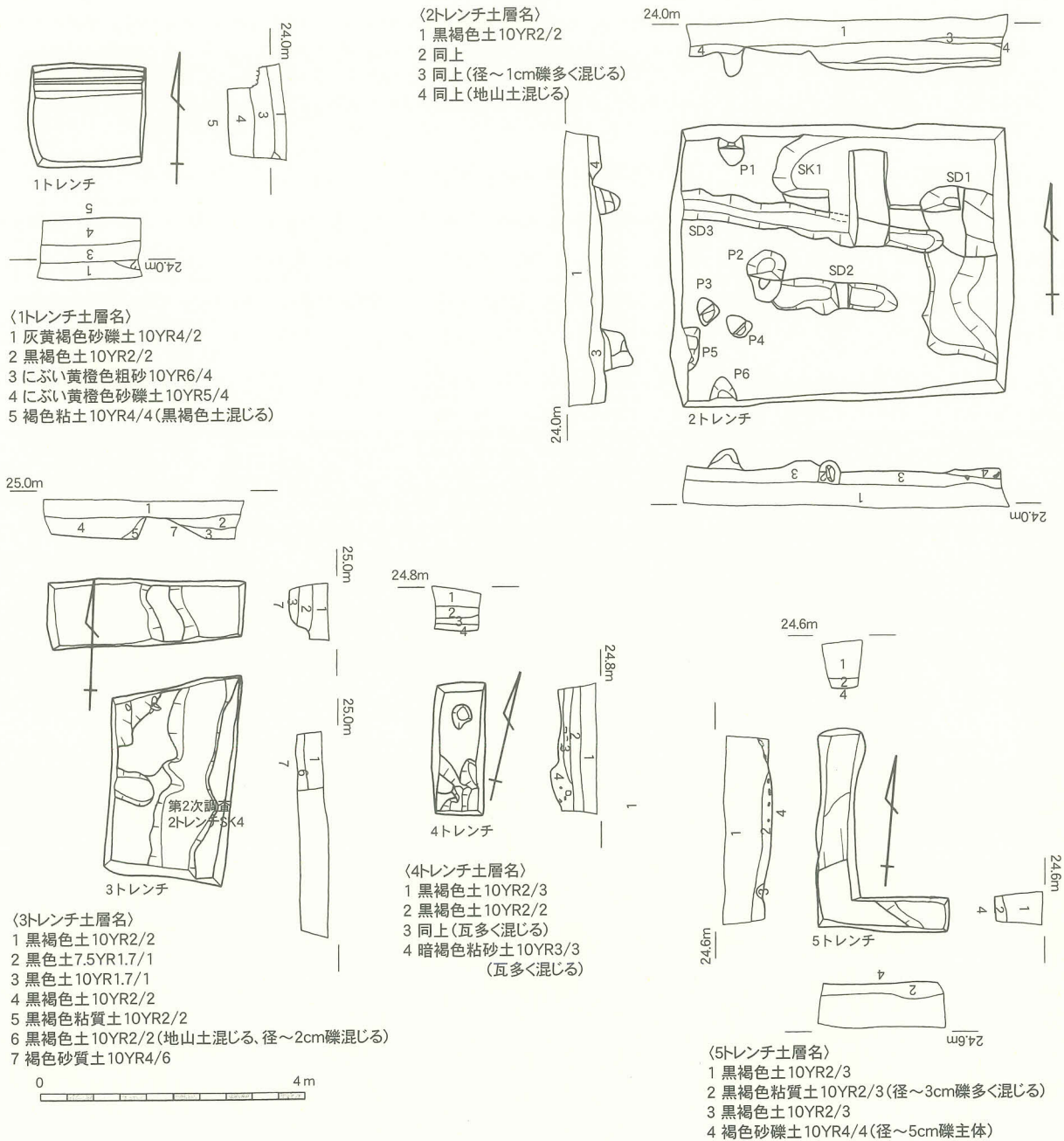
調査は平成17年11月21日から平成18年1月20日まで実施。以下に調査日誌を抄録する。

11月21日 調査区設定、表土掘削、調査機材搬入。11月24日 各トレンチにて地山面人力精査に着手。遺構検出の上、並行して写真撮影、遺構掘削を進める（～12月9日）。11月28日 4トレンチにて瓦溜まりを検出。水野和雄氏（県一乗谷朝倉氏遺跡資料館）来跡。12月6日 調査図面作成に本格的に着手。12月7日～ 3～5トレンチにて瓦溜まりを検出。12月9日 5トレンチ瓦溜まり出土遺物取り上げ。12月12日～ 降雪のため調査長期休止（～1月9日）。12月21日 除雪し、4トレンチ瓦溜まりを写真撮影。1月10日 人力による除雪を始める。調査図面作成を再開。1月10日～ 3～5トレンチ瓦溜まりの図化とともに出土遺物の取り上げを進める。1月19日 調査機材搬出。1月20日 調査区埋め戻し。

### 第2項 1トレンチ

#### 基本層序

調査地は造成地であり、地表面の標高24.2m。標高23.4m付近で地山層、褐色粘土層上面へ至るまでに転圧を受けて締まる客土である黄色系の砂礫土、粗砂が堆積する。トレンチ北端の上面に水道管が通る。遺構、遺物ともに確認されていない。



第 82 図 興道寺廃寺第7次調査1～5トレンチ平面図・土層断面図(縮尺 1/100)

### 第3項 2トレンチ

#### 基本層序

調査地は畑地であり、地表面の標高 24.0m。上層から耕作土となる黒褐色土(層厚 0.4m)、小礫、地山土が混じる黒褐色土(層厚 0.2m)を経て、標高 23.4m付近で地山土、黄褐色粘質土層上面へと至る。黒褐色土から軒丸瓦 1 点(358)、丸瓦 1 点(357)が出土した。

#### 遺構

黄褐色粘質土層上面において土坑 1 基(SK1)、溝 3 基(SD1~3)、小穴 6 基(P1~6)が検出されている。

## 土坑

土坑1 (SK1) は平面形態が丸みを帯びる逆L字状を呈し、トレンチ外の北東方に広がりを持つ。南北、東西ともに検出長3.38m、検出面からの深さ0.43mを測る。断面形状は北側では浅い平底状となるが、南側ではさらに深くなり丸底状となる。埋土は上位に古墳時代後期の須恵器、土師器、製塩土器の細片が大量に混じる黒色土が、下位に地山土が混じる黒褐色土が堆積する。丸瓦3点(350・352)、平瓦5点(353・354)、須恵器杯H14点(343・345)、杯H蓋16点(342)、杯A1点、杯B蓋1点(344)、甕12点(346・347)、甕1点、壺6点、土師器甕83点(349)、椀2点(348)、土師器皿1点、丸瓦3点、平瓦5点、瓦小片10点、古墳時代後期から律令期に伴う製塩土器374点がいずれも破片、細片の状態出土。溝1、溝3に切られる。

## 溝

溝1 (SD1) は土坑1を切り、溝3に切られて東に延びる。平面形態は強い丸みを帯びた楕円形を呈し、東西検出長1.07m、最大幅1.05mを測る。平面形態からトレンチ外の比較的近いところで収束するものと思われる。検出面からの深さは0.36m。断面形状は弧状となる。土坑1下位埋土である小礫、地山土が混じる黒褐色土層の上面、標高23.5m付近から掘り込む。埋土は一部に小礫が混じる黒色土、黒褐色土を持ち、下位に丸瓦片1点(351)、平瓦片1点(355)が含まれている。

溝2 (SD2) は土坑1の南側に位置し、東西に短く直線的に延びる。小穴2に切られる。東西検出長1.92m、最大幅0.54mを測り、検出面からの深さは0.18mである。断面形状は底面の両側壁側が一段深くなる。粗砂、地山土が混じる黒褐色土を埋土に持つ。丸瓦片1点、須恵器杯B1点出土。

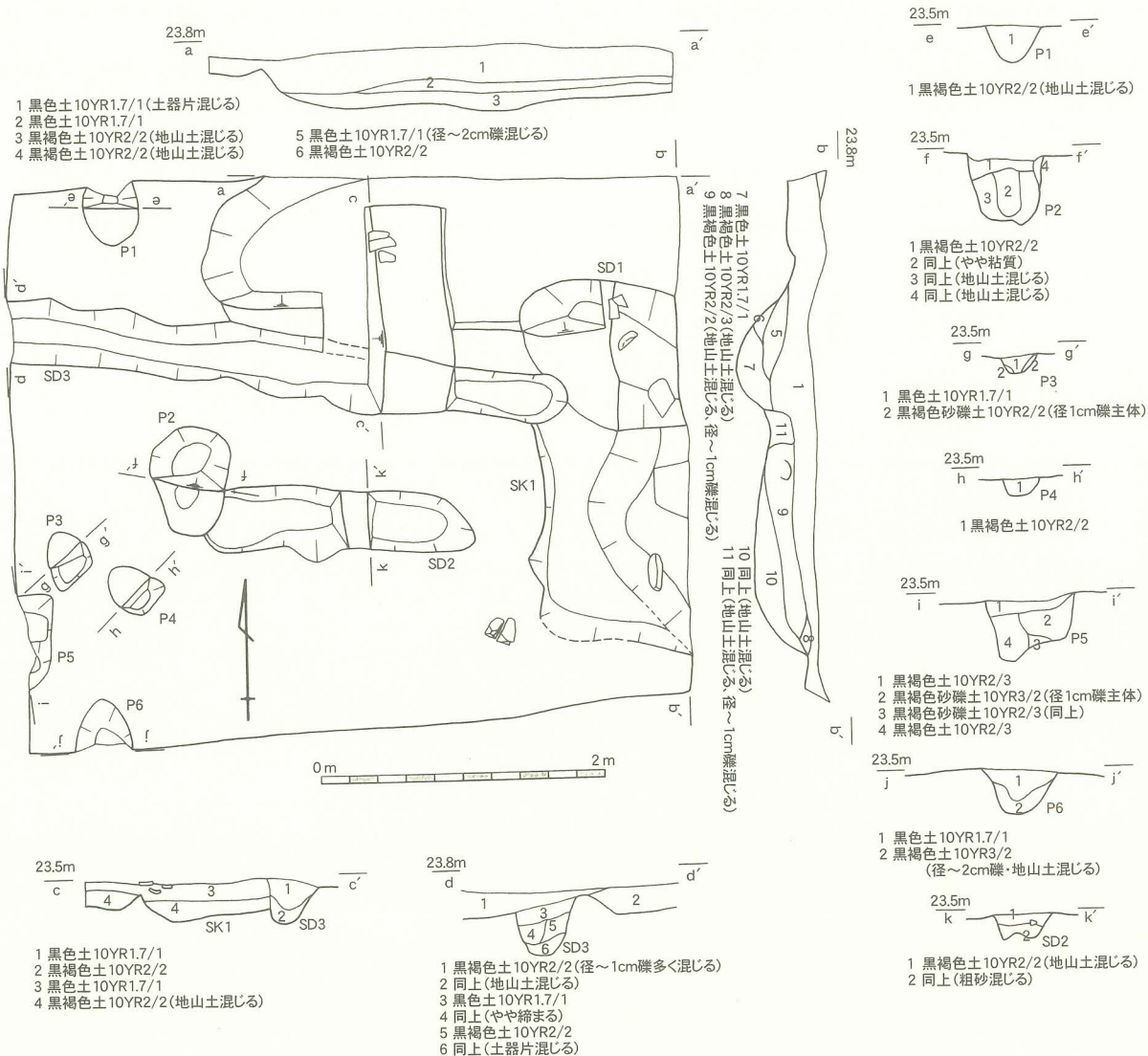
溝3 (SD3) は土坑1、溝2を切って、東西に直線的に長く延びる平面形態を持つ。南北検出長3.97m、最大幅0.45m、最小幅0.32mを測り、検出面からの深さは0.39mである。断面形状は深みを帯びる丸底状となる。黒色土、黒褐色土を埋土に持つ。須恵器杯H蓋2点、甕片1点、土師器甕片1点、製塩土器片23点出土するが、土坑1に付随する遺物が混入している可能性が高い。

## 小穴

小穴1 (P1) は南北検出長0.35m、東西0.39m、小穴2 (P2) は南北0.77m、東西0.56m、小穴3 (P3) は南北0.42m、東西0.32m、小穴4 (P4) は南北0.34m、東西0.40m、小穴5 (P5) は南北0.66m、東西検出長0.25m、小穴6 (P6) は南北検出長0.32m、東西0.40mを測り、ともに平面形態は崩れた円形を呈する。検出面からの深さは順に0.21m、0.45m、0.11m、0.12m、0.43m、0.27mである。断面形状は総じて丸みを帯びた弧状となる。小穴2は溝2を切る。小穴の埋土に黒色土、黒褐色土を持つが、小穴2、小穴5は土層断面に柱痕跡を残す。小穴2から丸瓦片1点、平瓦片1点(356)が、小穴6から古墳時代後期の土師器甕片6点出土。

## 遺物

342は須恵器杯H蓋。復元口径12.4cmを測る。天井部から口縁部にかけてやや丸みを帯びる。口縁端部の内面は端面をなす。343は須恵器杯Hで、復元口径13.2cmを測る。立ち上がりをほぼ真上に短くつまみ出し内傾しない。受け部は斜め外方に伸び、弱い沈線を施す。器高は高くならないものと考えられる。342とともにTK209型式の範疇に収まるとされる。344は須恵器杯B蓋天井部。宝珠つまみを有し、貼り付け後ナデで調整する。天井部内面は不定方向ナデを施す。時期は8世紀中葉に属すると思われる。345は須恵器杯H口縁部。立ち上がりは内側に直線的に延び、口縁端部を鋭く収める。受け部は小さく、弱い沈線を施す。TK43型式の範疇に収まるとされる。346・347は須恵器甕胴部。346は内面に同心円状当て



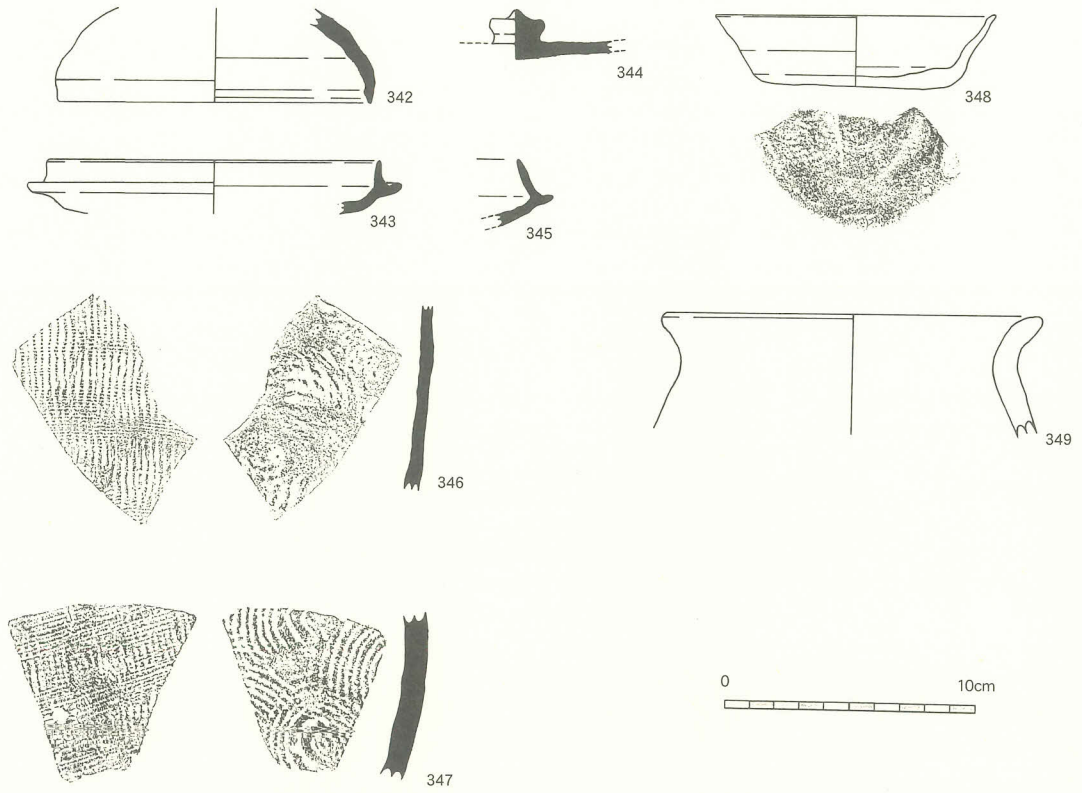
第83図 興道寺廃寺第7次調査2トレンチ遺構平面図・土層断面図(縮尺1/50)

具痕、外面には平行文叩きが残る。叩きの後、繊維状のものでナデを施していると思われる。347 は内面に同心円状当て具痕が残り、一部にナデを施す。外面も平行文叩き後にナデを施す。348 は土師器碗。復元口径11.1 cm、器高2.8 cm、底径7.5 cmを測る。回転ナデで調整し、底部外面に回転ヘラ切りを施す。平坦な底部から口縁にかけて直線的に上外方に立ち上がり、口縁はわずかに外反する。口縁内面に黒色付着物が残る。13世紀後半頃の所産と思われる。349 は土師器甕で復元口径14.8 cmを測る。口縁部はナデ、内面にはケズリを施す。口縁部は短く外反する。器壁は厚くなる。

350~352・357 は丸瓦。351 は凸面に2 cmあたり4本の平行叩きを施した後、横方向に強くナデ消す。凹面には布綴じ合わせ目が残る。側縁部は未調整。釘穴を穿つ。350 は凸面に強い横ナデを施す。凹面の布目は緻密。側縁凹面を面取りする。357 は全長36.1 cm。焼け歪みが見られ、扁平である。凸面に強い横ナデを施し、凹面には布目、糸切り痕を残す。側縁凹面を面取りするが、端部は未調整。352 の凸面調整は弱いナデである。

358 は単弁八葉蓮華文軒丸瓦。瓦当径19.8 cm、中房径2.7 cm、外区外縁幅1.7 cmを測る。瓦当は中房中心部で4.1 cmと厚く作り、小さな中房に径0.4 cmほどの蓮子を1+5に配する。花卉の肉厚はやや薄い。外区外縁に二重圏文を巡らせ、外区内縁に段を持つ。丸瓦の広端凹面を未加工のまま瓦当側面に当て接合し、丸瓦広端面が瓦当先端近くまで達する。焼成は甘く、灰白色を呈する。

353～356 は平瓦。354・355 は凸面に削り状の強い縦ナデを施す。356 の凸面は2 cmあたり 5 条の縄目叩きを施した後、弱く横ナデする。353、355 の凹面には模骨痕を残す。355 の側縁部、端部、356 の側縁部は未調整。



第84図 興道寺廃寺第7次調査2トレンチSK1出土土器実測図(縮尺1/3)

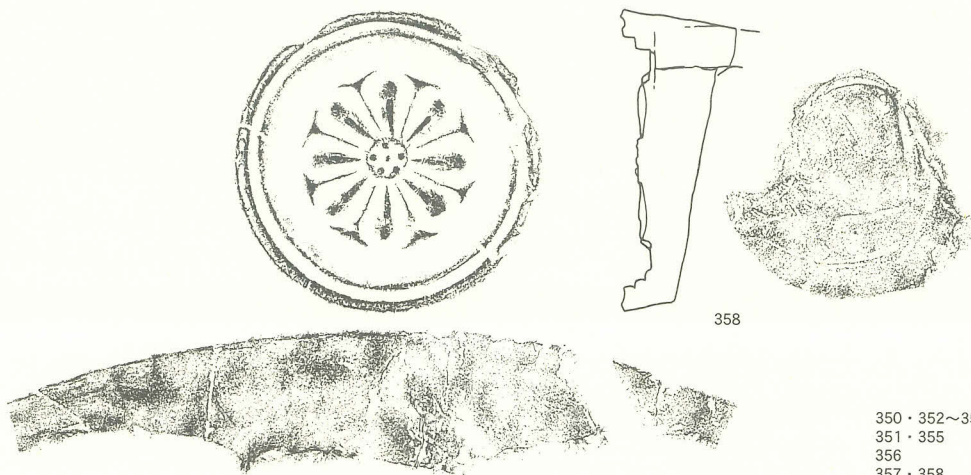




第85図 興道寺廃寺第7次調査2トレンチ出土瓦実測図1 (縮尺1/50)



0 15cm



350・352~354 : SK1  
 351・355 : SD1  
 356 : P2  
 357・358 : 地山直上

第86図 興道寺麿寺第7次調査2トレンチ出土瓦実測図2 (縮尺1/5)

## 第4項 3トレンチ

### 基本層序

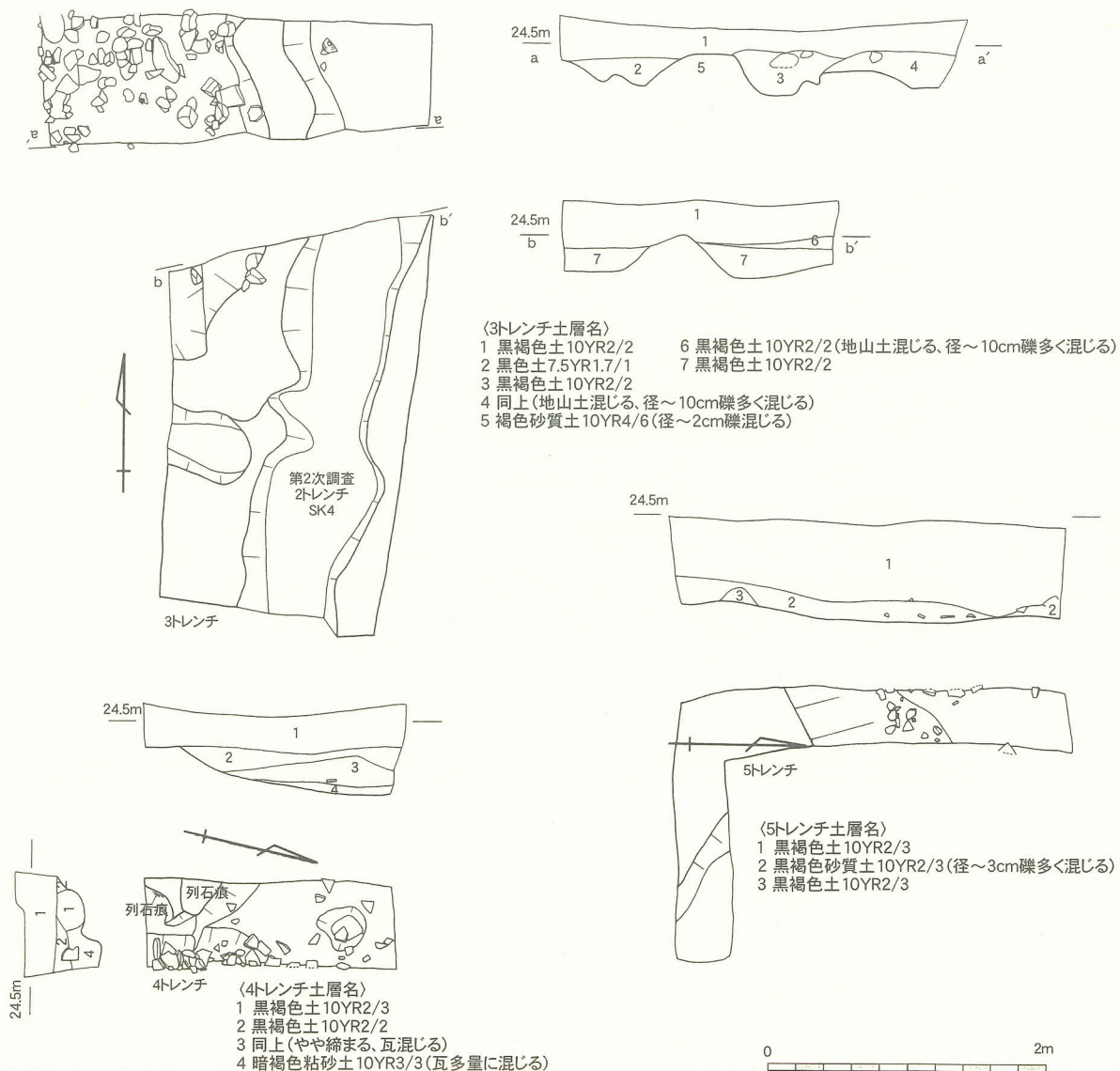
調査地は畑地であり、地表面の標高 24.75m。耕作土となる黒褐色土（層厚 0.2~0.3m）下、標高 24.5 mで地山土、褐色砂質土層上面へと至る。

### 遺構

褐色砂質土上面を基壇面とする基壇遺構 1 を検出した。

### 基壇遺構

第1次調査1トレンチの土壇状遺構、第2次調査2トレンチと第4次調査7トレンチで確認された基壇遺構 1（SB1）と同一遺構であり、基壇の北東隅部に相当する。基壇面の標高は約 24.5m。基壇検出規模は南北 1.72m、東西 0.62mを測る。基壇の東辺を第2次調査2トレンチ土坑4から北に延びる溝状の遺構（溝1）によって造る。基壇側の溝の断面形状はやや直線的に鋭く立ち上がるが、反対側では直線的で



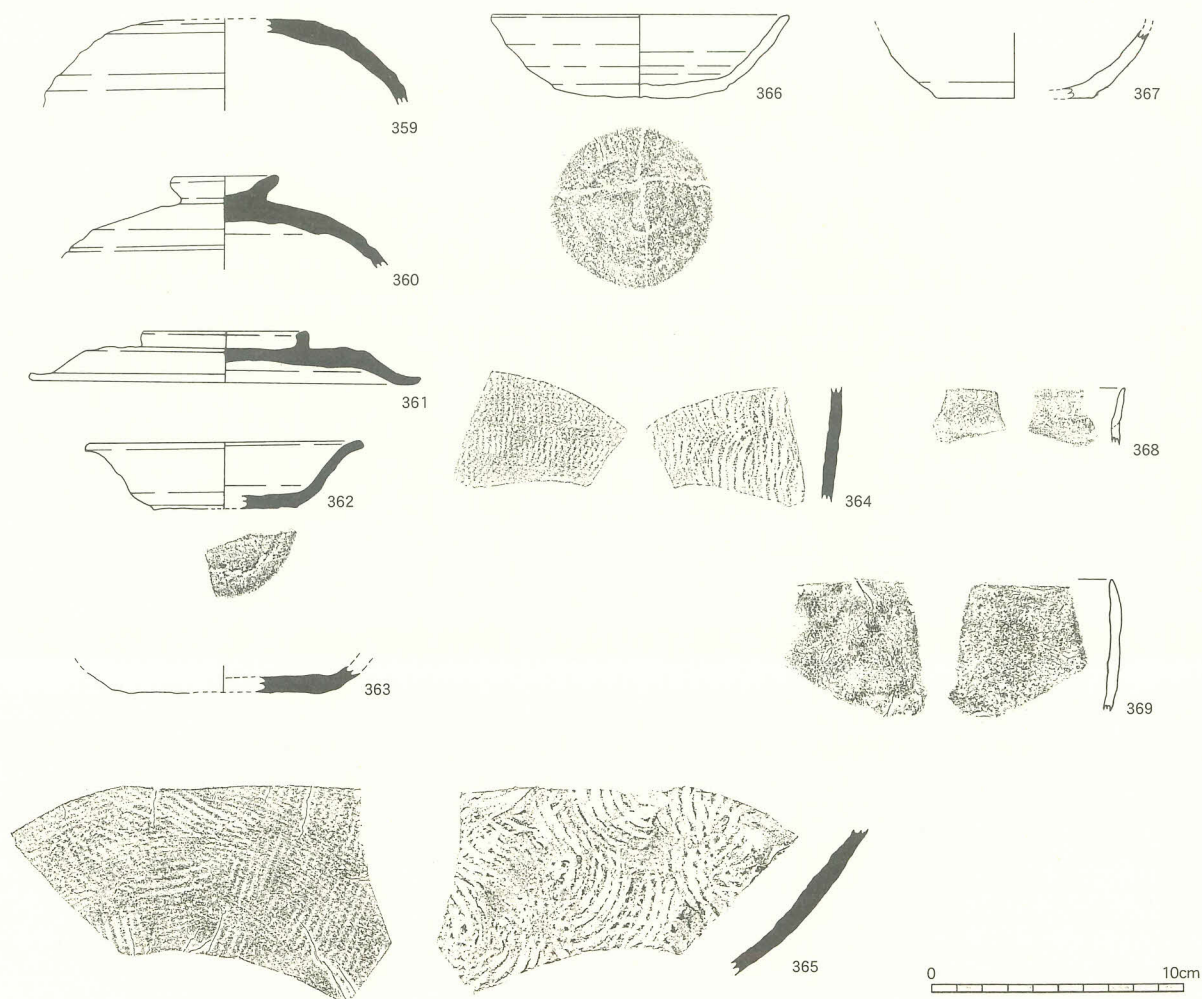
第87図 興道寺廃寺第7次調査3~5トレンチ遺構平面図・土層断面図（縮尺 1/50）

はあるものの比較的緩やかに地山と連続する。底面の標高は 24.2m、基壇面と約 0.3m のレベル差を持つ。溝は黒褐色土を埋土に持つ。

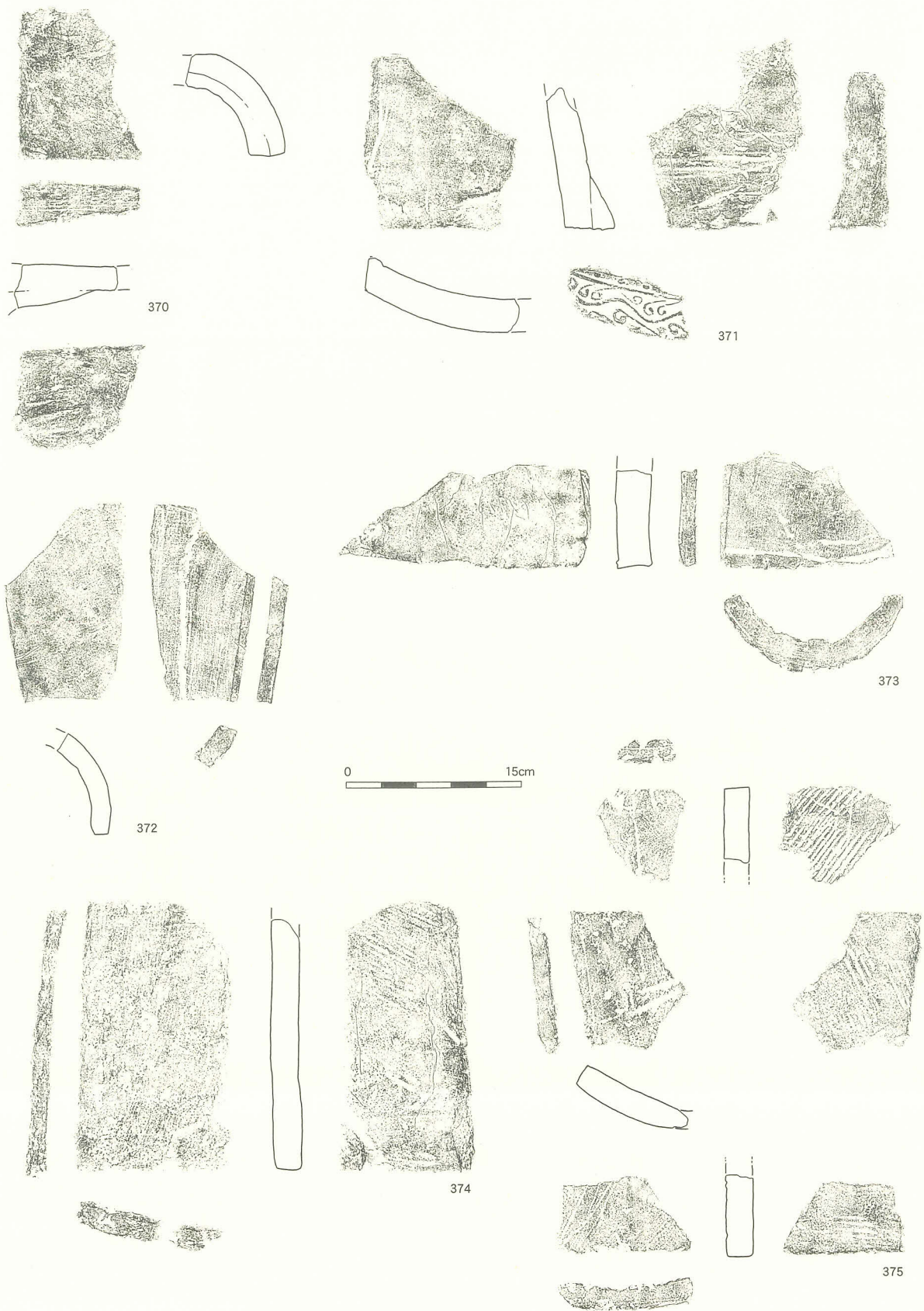
北側トレンチでは、南側トレンチの北西隅から掘り込まれて北側トレンチでさらに深くなる地山削り出しによる落ち込みが見られる。底面標高は 24.2m。落ち込みには黒褐色土が堆積し、拳大の礫とともに須恵器杯H蓋 4 点 (359)、高杯蓋 1 点 (360)、杯A 5 点 (363)、杯B蓋 2 点、杯蓋 1 点 (361)、皿 1 点 (362)、甕 1 点 (364・365)、土師器椀 2 点 (366・367)、土師器甕 12 点、軒丸瓦 1 点 (370)、丸瓦 17 点 (372・373)、軒平瓦 1 点 (371)、平瓦 33 点 (374~379)、瓦小片 18 点、製塩土器 13 点 (368・369) が破片で出土している。

### 遺物

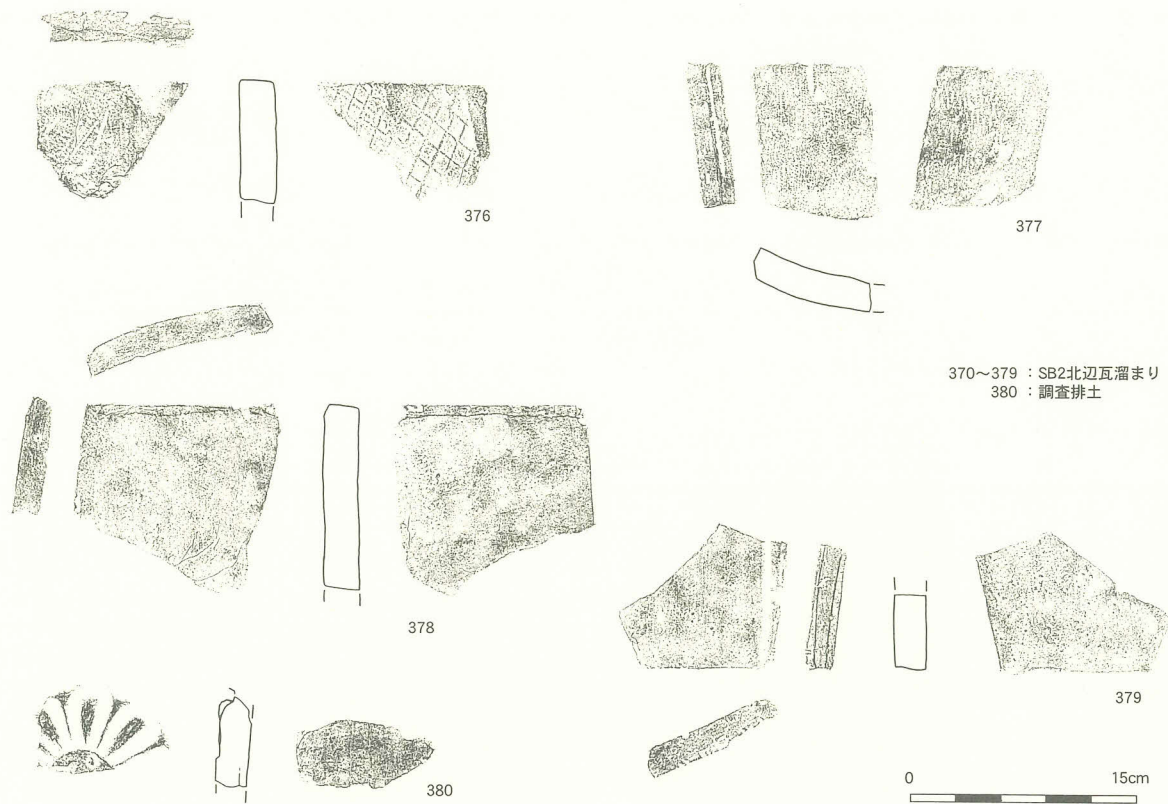
359 は須恵器杯H蓋。天井部外面には回転ヘラ削りを施す。天井部と口縁部の境にやや弱い 2 条の沈線を巡らす。MT85 型式並行期に相当すると思われる。360 は高杯蓋。天井部につまみを貼り付け、繊維状のもので丁寧に貼り付け部をナデで調整する。つまみは中央が窪む。時期は 6 世紀前半と思われる。361 は須恵器蓋。口径 15.2 cm、器高 2.0 cm を測る。天井部に環状のつまみを貼り付け、ナデで調整する。天井部内面には不定方向にナデを施している。天井部は平坦をなし、口縁部は外反する。口縁端部はやや丸く収める。362 は須恵器皿。復元口径 10.8 cm、器高 2.6 cm、復元底径 5.7 cm を測る。底部を回転ヘラ切りする。口縁部は強く外反する。口縁端部はやや面取りする。9 世紀中葉から後半の時期に属すると思われる。



第 88 図 興道寺廃寺第 7 次調査 3 トレンチ SB 1 北辺瓦溜まり下層出土土器実測図 (縮尺 1/3)



第89図 興道寺廃寺第7次調査3トレンチ出土瓦実測図1 (縮尺1/5)



第90図 興道寺廃寺第7次調査3トレンチ出土瓦実測図2 (縮尺1/5)

363は須恵器杯A。復元底径8.9cmを測る。底部回転ヘラ切り後、不定方向ナデを施す。364・365は須恵器甕胴部。内面に同心円状当て具痕、外面は平行文叩きが残る。365は外面を平行文叩き後に一部ナデを施す。底部付近の部位とみられる。366・367は土師器椀。366は口径11.8cm、器高3.3cm、底径6.8cmを測る。回転ナデで調整し、底部は回転ヘラ切りを施す。口縁部はやや内弯しながら立ち上がり、端部は丸く収める。367も回転ナデで調整し、底部に回転ヘラ切りを施す。復元底径は6.2cmを測る。ともに10世紀後半の時期に収まると思われる。368・369は製塩土器。器厚は薄い。368は外面に輪積み痕のナデ消しが残る。369はナデや手捏ねによる指圧痕が見られる。

370は軒丸瓦の丸瓦部広端と瓦当との接合部分。広端面には削りを施し、広端凹面に瓦当接合時の粘土を残す。凸面はナデ調整する。371は偏行唐草文軒平瓦。瓦当厚4.2cm。瓦当上外区に珠文を配し、内区の唐草文支葉は上下界線から派生する。凸面は瓦当面から4.5cmで有段となる。凸面は横ナデし、側縁部は未調整である。

372・373は丸瓦。ともに凸面に弱いナデを施し、凹面に粗い布目を残す。側縁部は、372は凹面を面取りし、373は凹面、凸面ともに面取りする。373の広端凹面に桶杵痕が残る。

374~379は平瓦。374・375の凸面に2cmあたり4本の平行文叩きを施すが、375の一部に1単位4本の平行叩き目をナデ消した痕跡が残る。375の凹面は布目を縦方向にナデ消すが、374は布目をそのまま残す。376は狭端凸面に1単位が縦1.0cm、横1.2cmの斜格子叩きを施し、側縁凸面をナデ消す。凹面は布目を一部ナデ消す。377の凸面には2cmあたり7条の縄目叩きを施した後、全体的に薄くナデ消す。側縁凸面を面取りする。378・379は凸面を強い横ナデし、凹面は布目を縦方向に強くナデ消す。側縁部は378が未調整とすることに対して、379は凹面、凸面に幅の狭い削りを施し面取りする。

380は調査排土から出土した単弁八葉蓮華文軒丸瓦瓦当である。

## 第5項 4トレンチ

### 基本層序

調査地は畑地であり、地表面の標高24.6m。耕作土となる黒褐色土（層厚0.25～0.3m）下、標高24.3mで基壇上面となり、トレンチ東端、北端ともに標高24.00m付近で地山土、黄褐色砂礫土層へと至る。耕土下、トレンチ北側、東側で確認された黒褐色土は攪乱層である。

### 遺構

基壇遺構褐色砂質土上面を基壇面とする基壇遺構2を検出した。

### 基壇遺構

第6次調査2トレンチ、3トレンチで確認された基壇遺構2（SB2）と同一遺構であり、第6次調査2トレンチで確認された基壇東端の北側に相当する。基壇上面で南北0.56m、東西0.40m、地山面から最高0.38mの高さを測る盛土平坦面を部分的に検出した。基壇上面の標高は24.3mで、東側に向かってほぼ直立的に急激に落ち込む。基壇構成土は黒褐色土で、叩き締めることで構築する。基壇上面には黄褐色粘土を薄く叩き締めた版築痕跡が残るが、基壇上面では総じて攪乱を受けており、遺存状況は悪い。第6次調査で見られた東端の列石がこのトレンチでは見られず、列石抜き痕と思われる小穴2基が南北に並列して確認されたに留まる。トレンチ東端の堆積土上半は攪乱によって失われるものの、地山直上から多量の瓦片がまとまって出土した。丸瓦片23点（381～384）、平瓦片37点（385～390）、瓦小片26点が出土している。

なお、基壇はさらに北側に延びるものと考えられるが、トレンチ北側では後世の削平を受けているようで大半が失われている。この状況は基壇東端に伴う瓦の分布状況が北に向けて希薄になることと一致する。

### 遺物

381～384は丸瓦。381は凸面に1単位4本の平行叩きを施し、横方向に薄くナデ消す。側縁凹面をわずかに面取りする。382～384は凸面にナデを施す。凹面は382、384に密な布目を残す。側縁凹面は382が未調整、381、383、384は面取りする。

385～390は平瓦。385、387は凸面に1単位4本の平行叩きを施し、386の凸面には1単位が縦0.4cm、横0.6cm、388の凸面には縦0.5cm、横1.1cmの斜格子叩きを施す。いずれも凹面に布目を残し、386、388には模骨痕が見られる。端部、側縁部は未調整。389は凸面に幅4.5cmほどの削り状の横ナデを施し、側縁凸面を面取りする。390は凸面に強い横ナデを施し、凹面に粗い布目を残す。

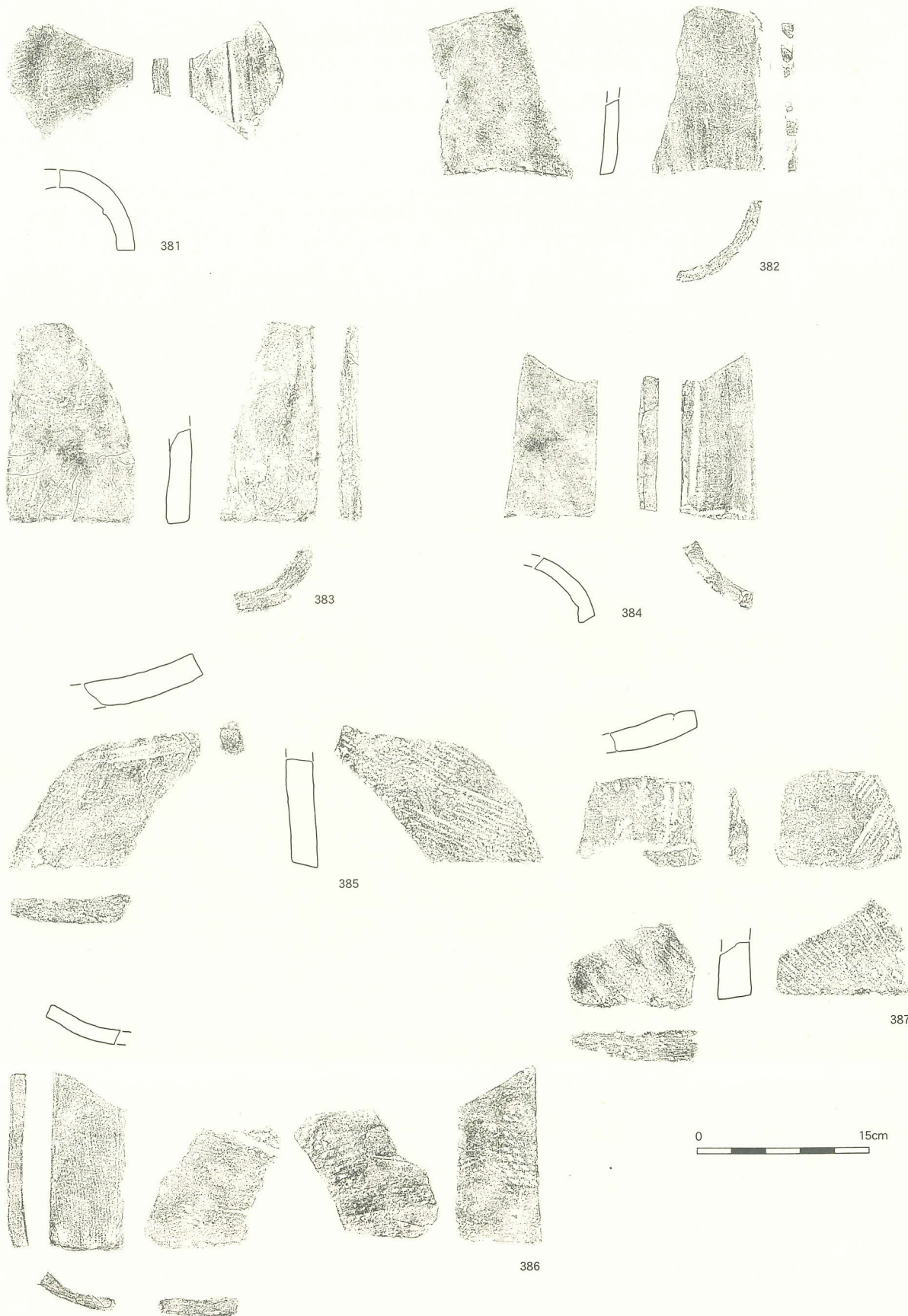
## 第6項 5トレンチ

### 基本層序

調査地は畑地であり、地表面の標高24.5m。上層から耕作土となる黒褐色土（層厚0.45～0.65m）、小礫が多く混じる黒褐色粘質土標（層厚0.25m）を経て、標高23.75～23.9mで地山土、黄褐色砂礫土層上面へと至る。

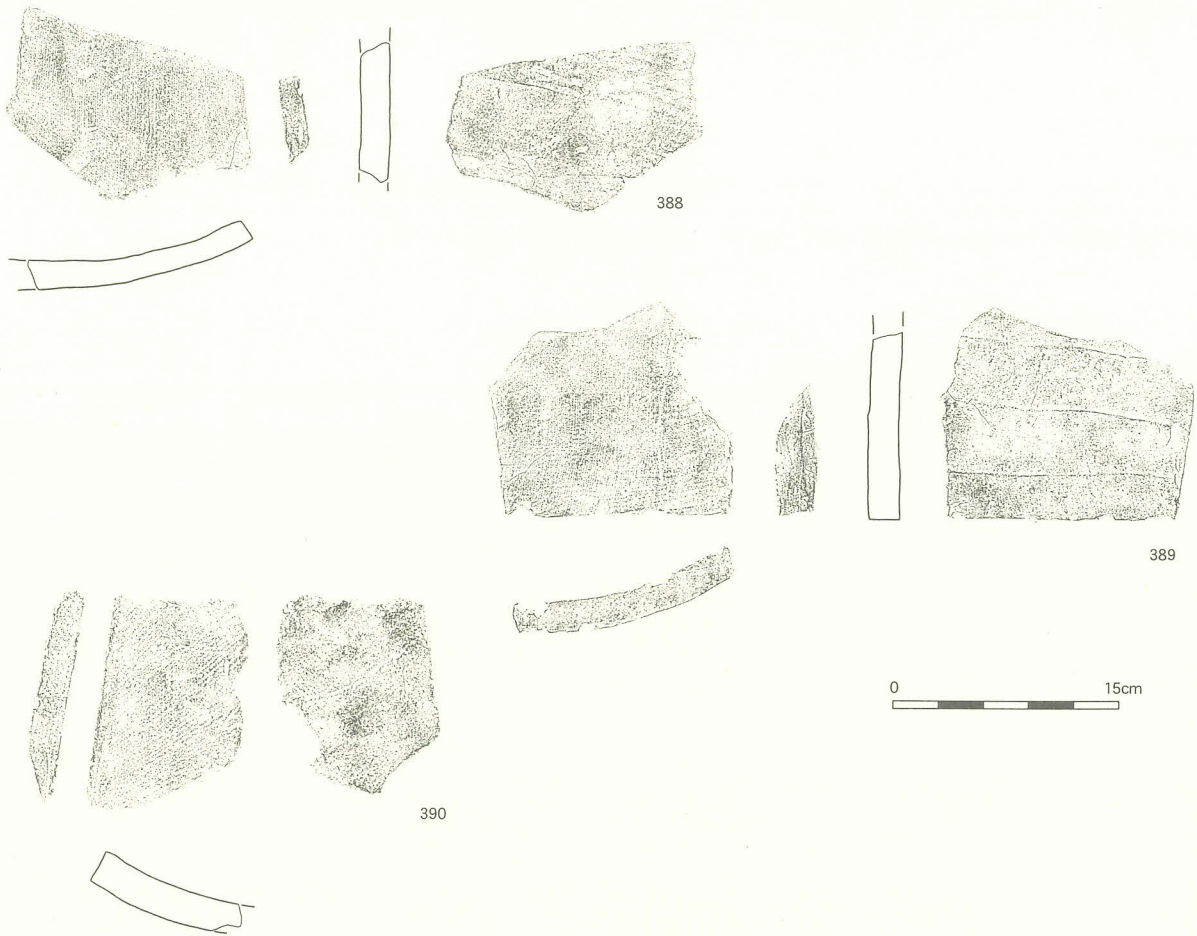
### 遺構

明確な遺構としては捉えられないが、若干の瓦片を伴う浅い落ち込みを確認した。この落ち込みはトレンチ南西隅を最高位として、それぞれ北側、東側に向かって極めて浅く、緩やかに標高を減じる。トレン

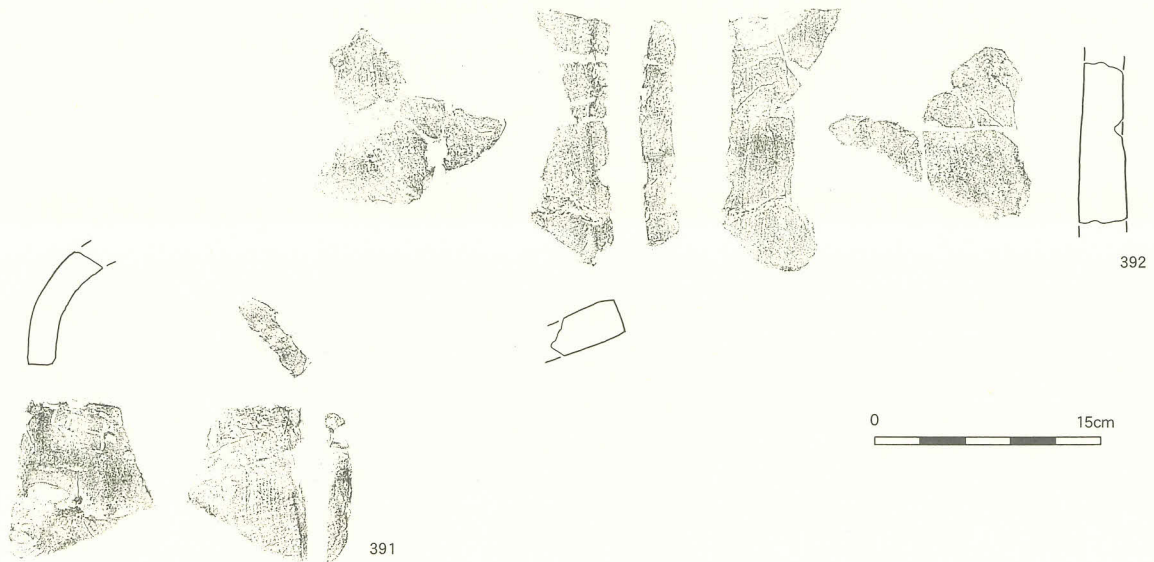


第91図 興道寺廃寺第7次調査4トレンチSB2東辺瓦溜まり出土瓦実測図1 (縮尺1/5)





第92図 興道寺廃寺第7次調査4トレンチSB2東辺瓦溜まり出土瓦実測図2 (縮尺1/5)



第93図 興道寺廃寺第7次調査5トレンチ出土瓦実測図 (縮尺1/5)

チ北側では若干標高を上げ、調査区外に至るが、この浅い窪み状となった部分に丸瓦片4点(391)、平瓦片10点(392)、瓦小片16点が出土している。表土からも丸瓦片9点、平瓦片22点、瓦小片48点が出土するなど、瓦の出土量は一定量を占めるが、トレンチ外南側からの流れ込みによる堆積によるものと考えている。4トレンチで確認された基壇遺構2の北側への伸張は5トレンチまでは及ばないものと思われる。

## 遺物

391は丸瓦。凸面に強い横ナデを施し、凹面に粗い布目を残す。側縁凹面を面取りする。392は平瓦。凸面は強い縦ナデを施し、凹面に布目を残す。側縁凹面を強く面取りする。

## 第11節 興道寺廃寺第8次調査

### 第1項 調査の概要

調査地の地番は福井県三方郡美浜町興道寺6号測ノ上12番地、20番地、21番地。第6次、第7次調査において塔、金堂の位置関係が把握されたものの中門を含めた伽藍南辺の具体相が全く不明であったことから中門基壇の様相確認を目的として3トレンチを、また伽藍東辺の様相確認を目的として1トレンチ、2トレンチを、また金堂南辺の様相確認を目的として4トレンチ、5トレンチを、休耕地に5箇所のトレンチを設定した。トレンチの規模は、1トレンチ東西15.1m、幅0.5m、2トレンチ東西8.1m、幅1.5m、3トレンチ南北15.3m、幅1.1~1.2mを基調に東側は東西1.9m、幅0.9m、西側には南北7.55m×東西2.5mの範囲に随時トレンチを拡張、4トレンチ南北3.0m、幅0.5m、5トレンチ南北4.15m、幅2.1m、調査面積は計55㎡である。

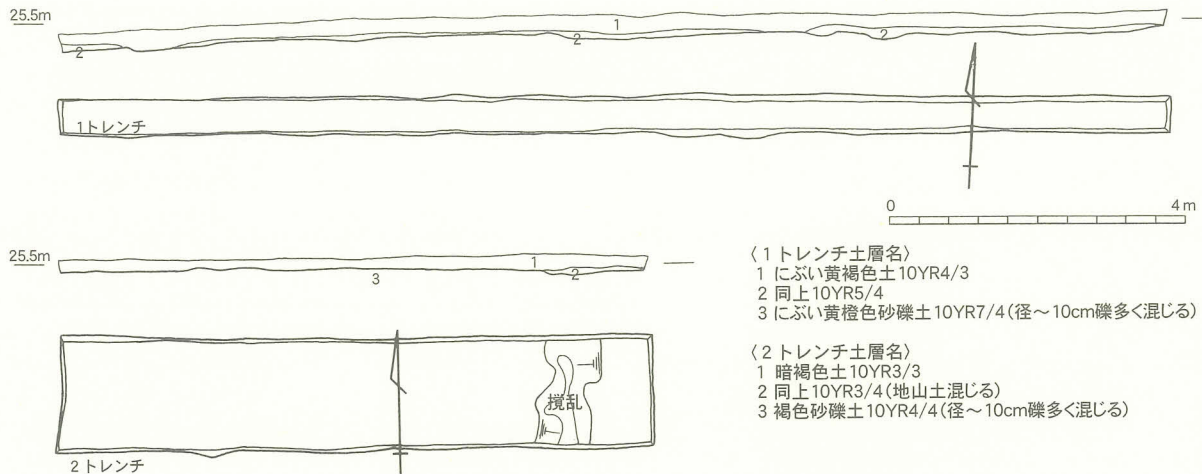
調査は平成18年7月24日から平成18年9月22日まで実施。以下に調査日誌を抄録する。

7月25日 調査区設定、表土掘削、調査機材搬入。7月27日 1・3トレンチ地山面の人力精査に入る。3トレンチにて南辺に石積みが見られる基壇状遺構を検出。4トレンチ表土の人力掘削。7月28日 各トレンチ地山面の人力精査を進める。並行して遺構検出写真撮影。3トレンチを一部拡張する。7月31日 各トレンチにて平断立面図、遺物出土状況図などの調査図面作成に本格的に着手。3トレンチにて瓦溜まりを検出。8月1日 調査休止(～8月6日)。8月7日 3トレンチ基壇にて掘込地業痕跡を確認。1・2トレンチ調査図面作成終了し、埋め戻し。8月8日 工藤俊樹氏・中川佳三氏(県文化課文化財保護室)来跡。8月9日 3トレンチ拡張、精査。8月10日 森本輝久氏(県文化財パトロール員)来跡。8月14日 3トレンチ拡張、地域住民来跡。8月15日 3トレンチにて基壇状遺構北西隅部を確認。地域住民来跡。8月16日 森本輝久氏(県文化財パトロール員)来跡。8月17日 仁科章氏(県立歴史博物館)、水野和雄氏(県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館)来跡。8月18日 3トレンチ瓦溜まり出土遺物を一部取り上げ。8月25日 4・5トレンチ埋め戻し。8月31日 3トレンチ基壇状遺構西辺から銭貨が出土し始める。9月12日 3トレンチにて銭貨がさらに出土。9月14日 3トレンチ全体写真撮影。9月15日 3トレンチ基壇西辺にて小穴3基を検出、埋土に銭貨が含有する。9月19日 3トレンチ出土遺物最終取り上げ。調査図面最終確認。9月20日 調査排土精査。9月21日 調査機材搬出、調査排土精査。9月22日 記者発表、調査機材搬出、全トレンチ埋め戻し。

### 第2項 1トレンチ

#### 基本層序

調査地は畑地であり、地表面の標高25.4~25.6m。耕作土となるにぶい黄褐色土(層厚0.3m)下、標高25.2m付近で地山層、褐色砂礫土層上面へと至る。地山層上面はトレンチの中央で高く、東西に向かって若干標高を下げる。地山層上面に砂礫層の一部が露頭しており、地山表層の粘土層が既に削平を受けているものと思われる。遺構、遺物ともに確認されていない。



第94図 興道寺廃寺第8次調査1・2トレンチ平面図・土層断面図 (縮尺 1/100)

### 第3項 2トレンチ

#### 基本層序

調査地は畑地であり、地表面の標高 25.6m。耕作土となる暗褐色土 (層厚 0.2m) 下、標高 25.4m 付近で地山層、褐色砂礫土層上面へと至る。地山層上面は東側がわずかに高く、西に向かって若干標高を下げる。トレンチ東端で耕作攪乱を確認し、地山層上面に砂礫が全体的に露頭していることから、地山表層の粘土層が既に削平を受けているものと思われる。遺構、遺物ともに確認されていない。

### 第4項 3トレンチ

#### 基本層序

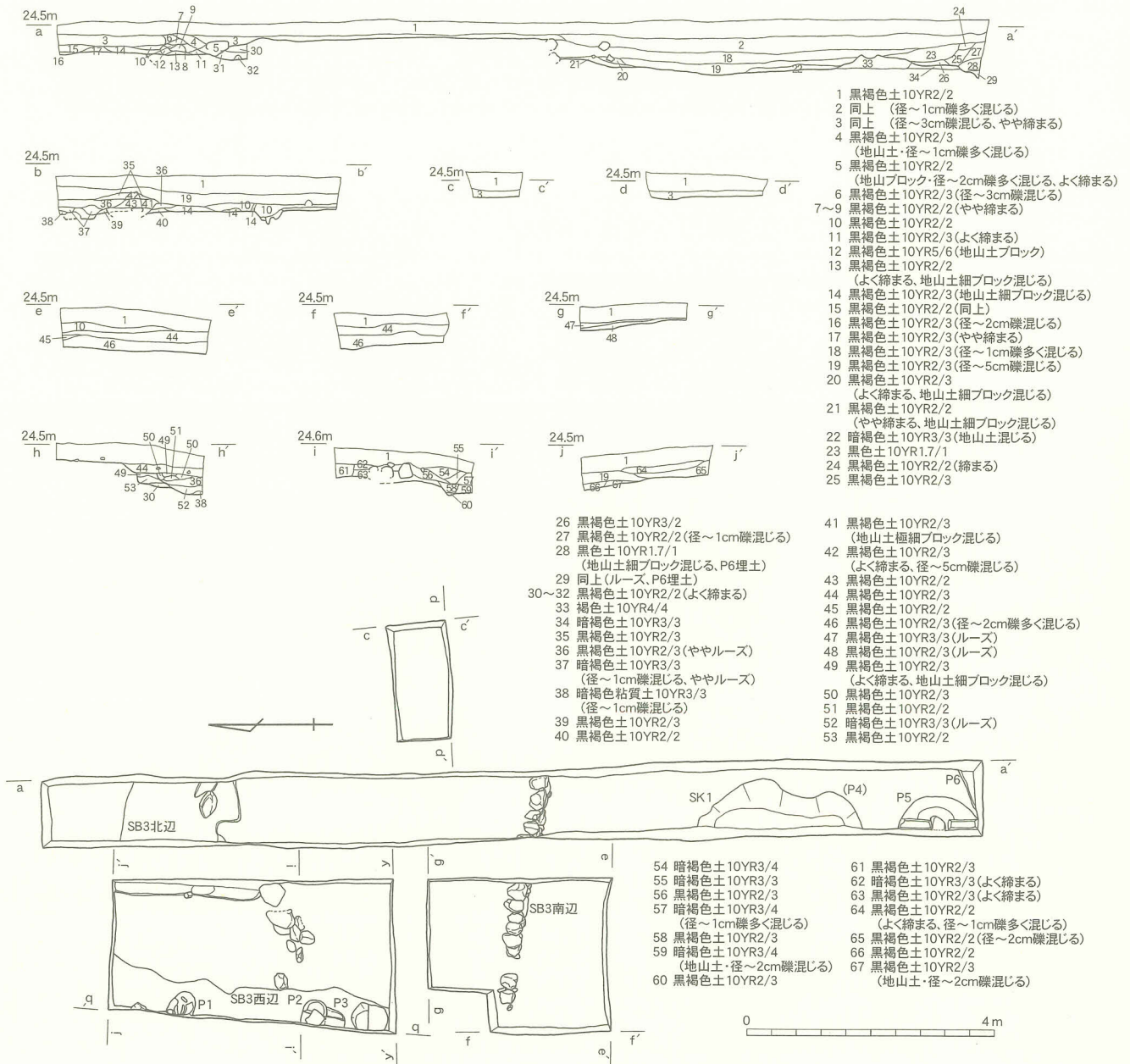
調査地は畑地であり、地表面の標高 24.3~23.6m。耕作土となる黒褐色土 (層厚 0.2~0.3m) 下、標高 24.0~24.3m で基壇遺構の基壇面となり、トレンチ南側、北側、西側では黒褐色、暗褐色系の軟質土の堆積を経て、トレンチ北端で標高 24.0m、トレンチ南端で標高 23.8m、トレンチ西端では 23.75m 前後で地山土、黄褐色粘質土層上面へと至る。

#### 遺構

黄褐色粘土層上面において基壇遺構 1 基 (SB 3)、土坑 1 基 (SK 1)、小穴 3 基 (P 1~3) を、黒褐色土上面において小穴 3 基 (P 4~6) が検出されている。

#### 基壇遺構

基壇遺構 3 (SB 3) として南北 6.64m、東西検出長 6.00m、高さ 0.9m を測る盛土平坦面を検出した。基壇面の標高は 24.0~24.3m。西側に向かって若干の傾斜を持ち、基壇面西側では削平を受けている。基壇は小礫、地山土ブロックが混じる黒褐色土を細かく積み、叩き締めることで構築する。基壇面数箇所断ち割りを行ったところ、基壇構成土中から丸瓦片 1 点、平瓦 4 点、須恵器杯H蓋片 1 点 (408)、甕片 2 点 (409・410)、土師器甕片 1 点、製塩土器片 1 点、銭貨 1 枚 (444) が出土した。基壇上面において数cm の厚みを持つ褐色粘土を部分的に叩き締める痕跡を確認したが、第6次調査で確認した基壇遺構 2 における明瞭な版築痕跡は見られない。基壇面の西側において 0.2~0.5m の自然礫 7 石が密集する状況を確認したが、耕作土中に埋め殺された状況で出土しており、基壇構成材が二次移動したものと考えられる。また、基壇面から若干浮いた状態で長辺 0.42m、短辺 0.35m の偏平な自然礫が出土した。安定面を上に向けてお



第95図 興道寺廃寺第8次調査3 トレンチ平面図・土層断面図 (縮尺 1/100)

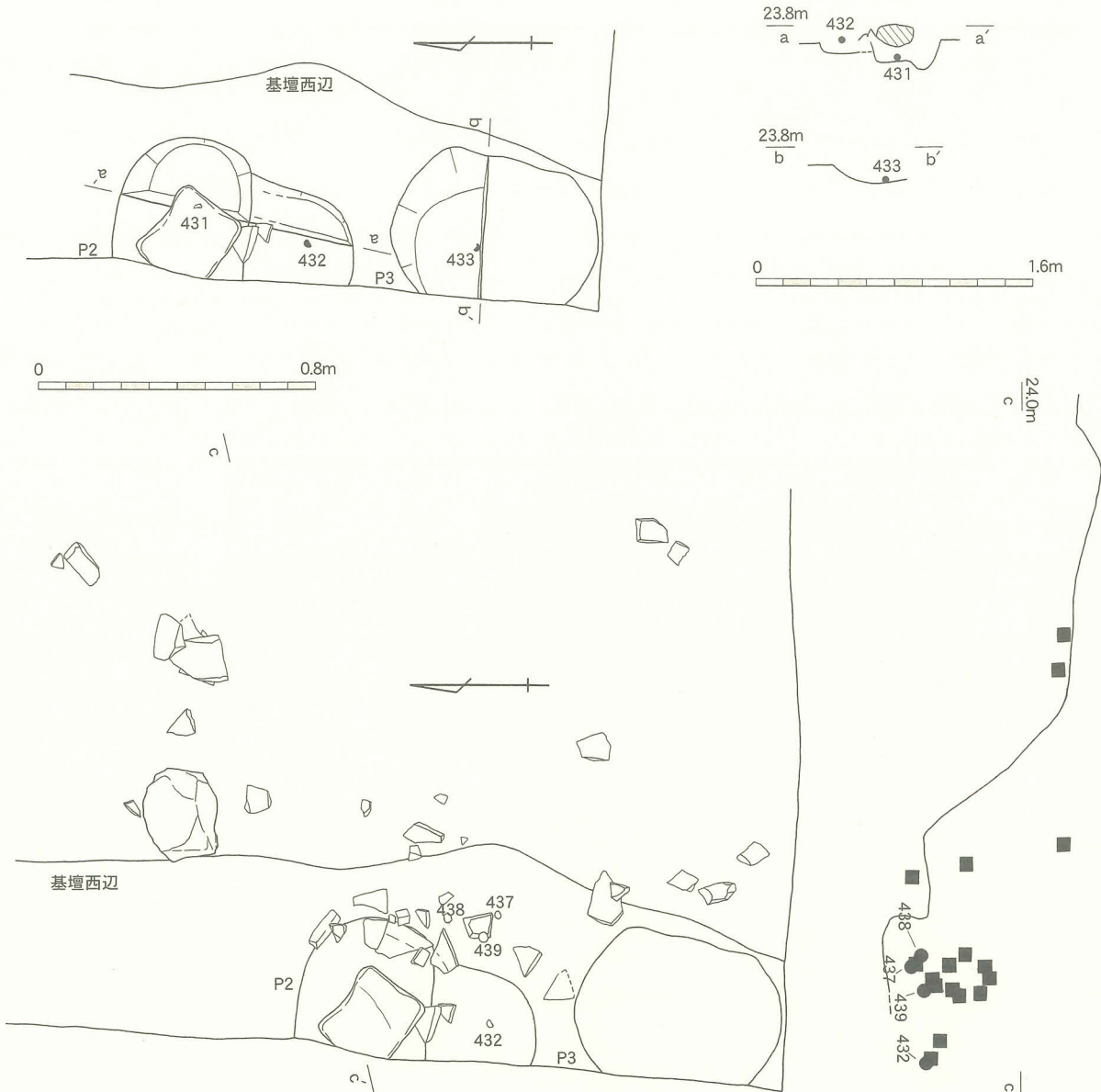
り、基壇建物の礎石となるものと思われるが、厳密に元位置を保っている保証はない。

基壇南辺は基本的には自然礫を2段に積むことで構築する。使用石材は耳川流域で採集可能な花崗岩、砂岩、チャート、緑色片岩などで加工痕跡は認められない。石積みの下段は長辺 0.3m強、短辺 0.3m前後の礫の平坦面を外側(南側)に向けて横位に、奥に控えを取らずに並べ、上段は長辺 0.3m強、短辺 0.3m前後の礫を奥に控えを取って小口積み状に積み、隙間に拳大程度の小礫を詰める。断面形状は石積み下段は直立することに対して、上段は基壇側にやや外反する。上下段で礫の積み方は異なるものの、石材法量は規格的である。石積みの西端は既に大半の礫が抜き取られ、遺存状況は不良である。この南辺石積みは未掘部分を含めて西端から約 7.2mまで伸張することを確認しており、さらに 1m前後東に延びるものと考えられることから基壇東西規模は 8.2m前後に復元できる。

この石積みの南側、つまり基壇南側では地山の上に盛土を行い、その上に基壇基底を構築している。標高 23.6~23.65mの上に小礫、地山土ブロックが混じる黒褐色土を基壇(石積み)基底となる標高 24.0







第98図 興道寺廃寺第8次調査3トレンチ銭貨出土状況図 (縮尺1/20・1/40)

m付近まで2層に盛り、叩き締めることで構築する。石積みから南側に1.15~2.1m、幅0.95mの範囲においては地山を溝状に深く掘り窪める痕跡を確認した。この盛土内から寺院造営以前の遺物である土師器甕5点(402)が破片で出土している。

一方、基壇北辺では部分的に検出したに留まるが、標高24.1m付近に分布する地山層を掘り込み、地山土ブロックが混じる黒褐色土を入れて叩き締めることで構築する。元来、南に向けて緩やかに傾斜する地山面を基壇構築に際して南辺で盛土、北辺では地山の掘り込みを行うことで基壇最下面を平坦に整えたことが窺える。前述の基壇構成土中から出土した銭貨、神功開寶(444)はこの部分から水平な状態で瓦片とともに出土。基壇北辺には石積みは見られず、基壇構成土である黒褐色土がスロープ状に下がり地山面につながるものと考えられる。

基壇西側でも北辺と同様、スロープ状にすることで構築する。石積みは見られないが、長辺0.27m、短辺0.21mの自然礫1石が奥に控えを取って小口面を西側に向けて水平に置かれていた。第6次調査で確認された基壇遺構2の東西辺で確認された石列と同様の性格を帯びるものかは判然としない。西辺では掘り込み地業は行われておらず、地山面の上に直接黒褐色土を積むことで構築する。北辺で見られたような強

い叩き締めは見られず、総じて軟質な基壇構成土であり、西辺の平面プランが直線的でない一因となっている。基壇西辺に接するように、西辺から約0.15m西に離れて小穴1、小穴2が約4.2mの間隔を持って並列し、小穴2の南側には接するように小穴3が分布する。

基壇周辺には黒褐色土からなる堆積土が外側に向かって傾斜を持ちながら堆積する。堆積土中、下層から軒丸瓦1点、丸瓦18点(411~414)、平瓦36点(415~423)、瓦小片49点、須恵器杯H1点、杯H蓋15点(393)、杯B1点、杯B蓋2点(394)、杯11点、甕24点(399・400)、壺5点(395~398)、土師器椀1点(403)、赤彩土師器杯1点、土師器甕73点(401)、底部に糸切りを施す土師器皿2点(404・405)、製塩土器37点、鉄釘2点(406・407)が、上層からは丸瓦6点(428)、平瓦7点(429・430)、杯H2点、須恵器杯H蓋12点、杯B蓋2点、杯3点、高杯1点、甕3点、罌1点、提瓶1点、甕1点、壺4点、土師器杯3点、土師器甕25点、底部に糸切りを施す土師器皿3点、製塩土器23点、土錘1点、鉄釘1点がいずれも破片で出土している。瓦の出土量は基壇遺構1、基壇遺構2に伴う瓦溜まりと比べると総じて少なく、また残存度も乏しい。西辺中央部、小穴2付近から瓦片とともに和同開珎1枚(437)、萬年通寶2枚(438・440)、神功開寶3枚(439・441・442)、萬年通寶か神功開寶と思われる銭貨1枚の計7枚がまとまって出土。440~443の4枚はこの銭貨が集中して出土した地点の調査排土から確認したに留まるが、437~439については若干のレベル差を持ちながらもほぼ水平な状態で出土している。

## 土坑

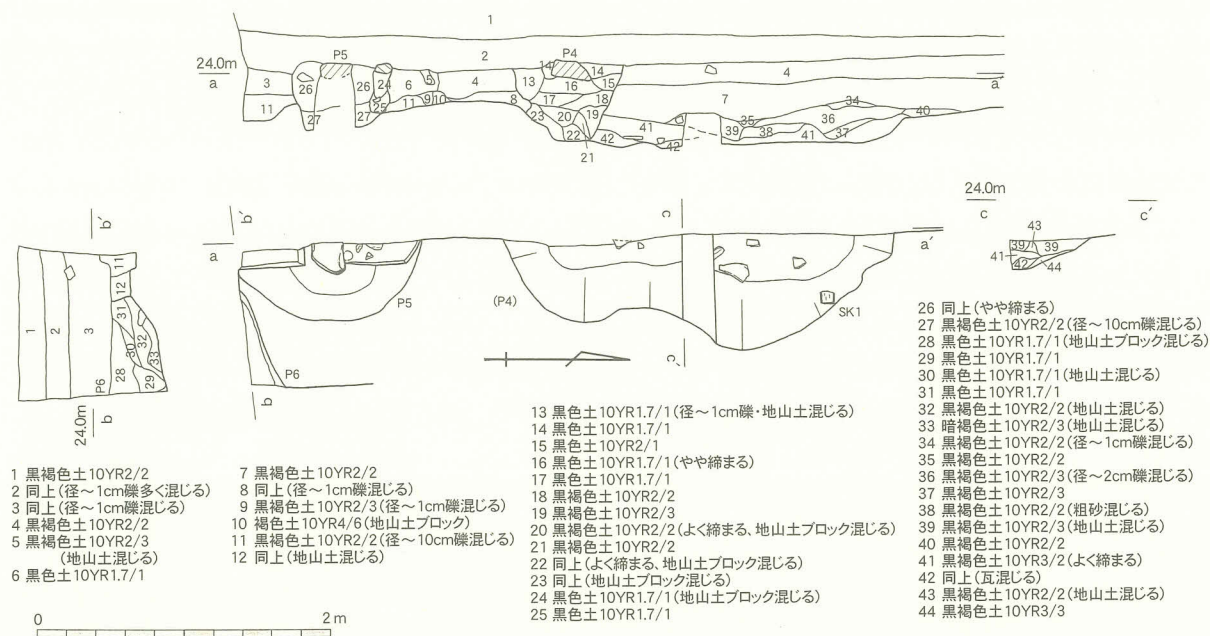
土坑1(SK1)は基壇遺構3の南側に分布する。平面形態は崩れた円形を呈し、南北2.68m、東西検出長0.81mを測る。ただし、土坑南端は上層から小穴4が掘り込まれ、切られていることから南北規模は若干小さくなるものと思われる。検出面からの深さは0.26m。断面形状は緩やかな平底状となる。小礫、粗砂、地山土が混じる黒褐色土を埋土に持つ。丸瓦片1点(425)、平瓦片5点(426・427)が底面から浮いた状態で出土。底面の凹凸が顕著であり、地山層の砂礫層が露頭することから、基壇構築に伴う粘土採掘坑であるものと考えられる。

## 小穴

小穴1(P1)は平面形態が楕円形を呈し、南北0.44m、東西検出長0.39m、検出面からの深さは0.22mを測る。断面形状は中心部で尖底状にさらに深くなる不定形となる。地山土ブロックが混じる黒褐色土を埋土に持つ。出土遺物はない。小穴2(P2)は平面形態が楕円形を呈し、南北0.69m、東西検出長0.40mを測る。検出面からの深さは0.09mと極めて浅い。断面形状は北に向かって段状に深くなる。上面の検出面レベルに0.25mの偏平な自然礫を、埋土上に据えるように礫の安定面を上に向けて礎石状に配する。埋土は黒褐色土からなるが、底面の北側には塊状に黄褐色土ブロックを持つことから人為的な埋め戻しが行われた後、礎石として自然礫を配したものと考えられる。この自然礫の下に入り込むように平瓦片2点(424)が遺構検出面レベルで出土。また、小穴2北側の底面、礎石状自然礫の真下の位置から欠損した和同開珎1枚(431)が水平な状態で出土した。ただし、意図的に埋納されたものかは判然としない。また、小穴2南側の埋土上面、遺構検出面から欠損した神功開寶と思われる銭1枚(432)が出土したが、前述した基壇西辺出土の銭貨集中地点の一群に伴う可能性が高い。

小穴1では礎石状礫は確認されていないが、小穴1、小穴2はともに共通する平面形、埋土、崩れた遺構断面形を持つことから対になる遺構であるものと考えられる。





第99図 興道寺廃寺第8次調査3トレンチ遺構平面図・土層断面図(縮尺 1/20・1/50)

小穴3(P3)は平面形態が円形を呈し、南北1.10m、東西検出長0.43mを測る。検出面からの深さは0.09mと極めて浅い。断面形状は平底となる。暗褐色粘質土を埋土に持つ。小穴3中心付近の底面から欠損した万年通寶と思われる銭貨1枚(433)が出土。意図的に埋納されたものかはやはり判然としない。ただし、銭貨の出土状況のあり方から見て、小穴3は小穴2とほぼ同時期の遺構であるものと考えられる。

なお、小穴2、小穴3検出段階の精査時の排土からいずれも欠損した状態で和同開珎1枚(434)、万年通寶と思われる銭貨1枚(435)、神功開寶1枚(436)の3枚が出土した。出土状況から考えればこの銭貨は前述した基壇西辺、銭貨集中地点出土銭貨の一群に含まれる可能性が高い。

小穴4~6は地山層を覆う黒褐色土、標高24.2m前後を上面として掘り込む。

小穴4(P4)は南北0.76m、東西検出長0.52mを測る。土層断面から確認された深さは0.55m。小穴5(P5)は平面形態が円形を呈する。南北1.27m、東西検出長0.53mを測り、土層断面から確認された深さは0.47m。ともに一部に礫、地山土ブロックが混じる黒色、黒褐色系の軟質土を埋土に持ち、上面には0.2m強の平石状自然礫を礎石として配する。小穴5ではさらに外側に黒褐色土からなる柱穴掘り方を持つ。ともに出土遺物はない。興道次廃寺廃絶以後の柱間1.6m程の建物柱穴となるものと思われる。

小穴6(P6)は平面形態が円形を呈する。東西検出長0.62m、南北検出長0.24mを測る。土層断面から確認された深さは0.38m。断面形状は船底状となる。地山土が混じる黒色、黒褐色系の軟質土を埋土に持つ。出土遺物はないが、小穴4、小穴5とほぼ同時期であるものと考えられる。

## 遺物

393は須恵器杯H蓋。天井部外面に回転ヘラ削りを施す。天井部と口縁部の境に沈線を巡らす。MT85型式の範疇に収まるとと思われる。394は須恵器杯B蓋で復元口径は13.0cmを測る。天井部は中央が窪み、宝珠つまみを貼り付ける。扁平な形状を呈する。口縁端部をつまみ出し、やや面取りする。9世紀中葉の時期に属すると思われる。395~398は須恵器壺である。底部に回転ヘラ削りを施す。395は底部内面にナデが見られ、器厚は肥厚する。398は頸部を貼り付けた痕跡が残り、胴部最大径の部分には径2.5cm程度の内部からの穿孔が確認される。跡とは考えられず、何らかの儀式に用いられたと考えられる。399・400

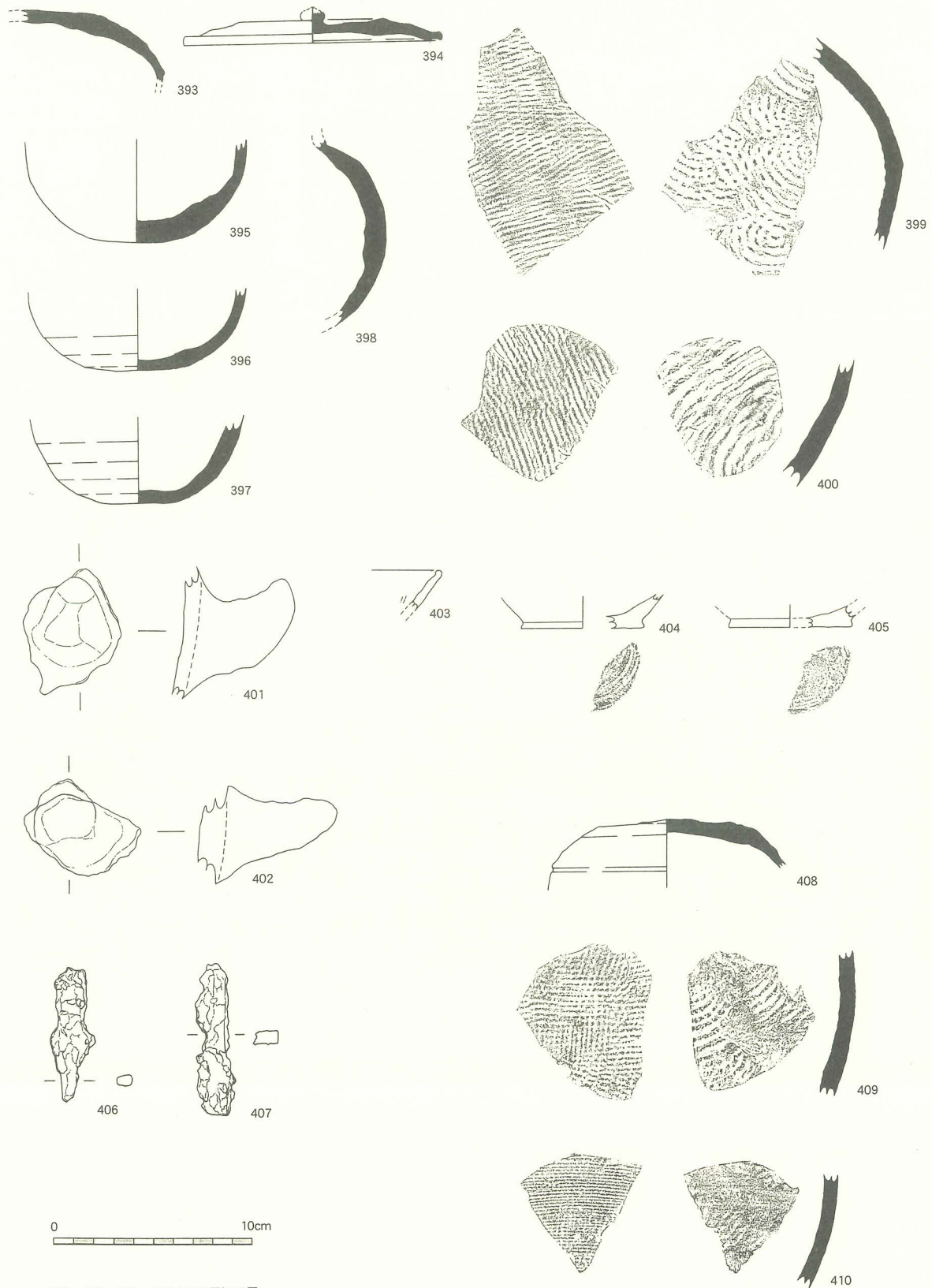
は須恵器甕。内面に同心円状当て具痕、外面に平行文叩きが残る。399 は胴部上半で、頸部に向けて器厚がやや肥厚する。400 は底部付近と思われ、内面の当て具痕は目の粗いものを用いる。401・402 は土師器甕把手。内面はケズリ、外面はハケメを施す。403 は土師器椀口縁部。口縁端部は丸く収めるが内面はやや肥厚する。内面には放射状暗文が見られる。8世紀前葉の時期と思われる。404・405 は土師器皿底部。復元底径はともに6.2 cmを測る。回転ナデで調整し、平底の底部には回転糸切りを施す。405 は404 に比べて胎土がやや粗い。ともに10世紀後半から11世紀代の時期に収まると思われる。406 は鉄釘。残存する長さ6.8 cm、厚さ0.85 cmを測る。407 は須恵器杯H蓋。天井部には回転ヘラ削りを施す。天井部と口縁部の境に明瞭な沈線を巡らす。TK10型式の範疇と思われる。408・409 は須恵器甕胴部。408 は内面のやや目の粗い同心円状当て具痕をナデ消している。外面の平行文叩きは交差する。409 は内面の同心円状当て具痕を強くナデ消している。外面には横方向のカキメを施す。410 は鉄釘である。残存する長さ7.6 cm、厚さ1.1 cmを測る。基部と思われる。

411～414、425、428 は丸瓦。411～414 は総じて弱い縦ナデを、413 は強い横ナデを施す。凹面は411、412 の布目が密であり、413 に布綴じ合わせ目を残す。411～413 は側縁凹面を面取りする。425 は凸面に弱い縦ナデ、凹面に布目を残し、側縁部は未調整である。428 は凸面に2 cmあたり6本の細かい平行叩きをナデ消した痕が残る。凹面の布目は密である。側縁凹面を面取りする。

415～424、426、427、429、430 は平瓦。426 は凸面に1単位が縦0.4 cm、横0.7 cmの斜格子叩きを施すが、強い縦ナデにより部分的に叩き目を留める程度である。凹面には布目とともに模骨痕を顕著に残す。側縁凹面をわずかに面取りする。416、422～424、426、427、430 の凸面には縦もしくは横方向に強いナデを、415、417～421 の凸面には弱い縦ナデを施す。凸面は総じてナデを施しているが、凹面の布目の粗密、模骨痕の有無、側縁調整には関連性はない。417、423、424 の布目は緻密であり、417～419、421、426、427 に模骨痕を残す。424、430 は凹面の布目をナデ消し、422 は平行叩きを残す。417、419 には布綴じ合わせ目が見られる。側縁調整は415～417、426 が凹面を面取りすることに対して、419、429 は凸面側にも面取りを行う。415 の削り幅は23 cmと広い。423 は狭端凸面に幅の広い削りを施す。

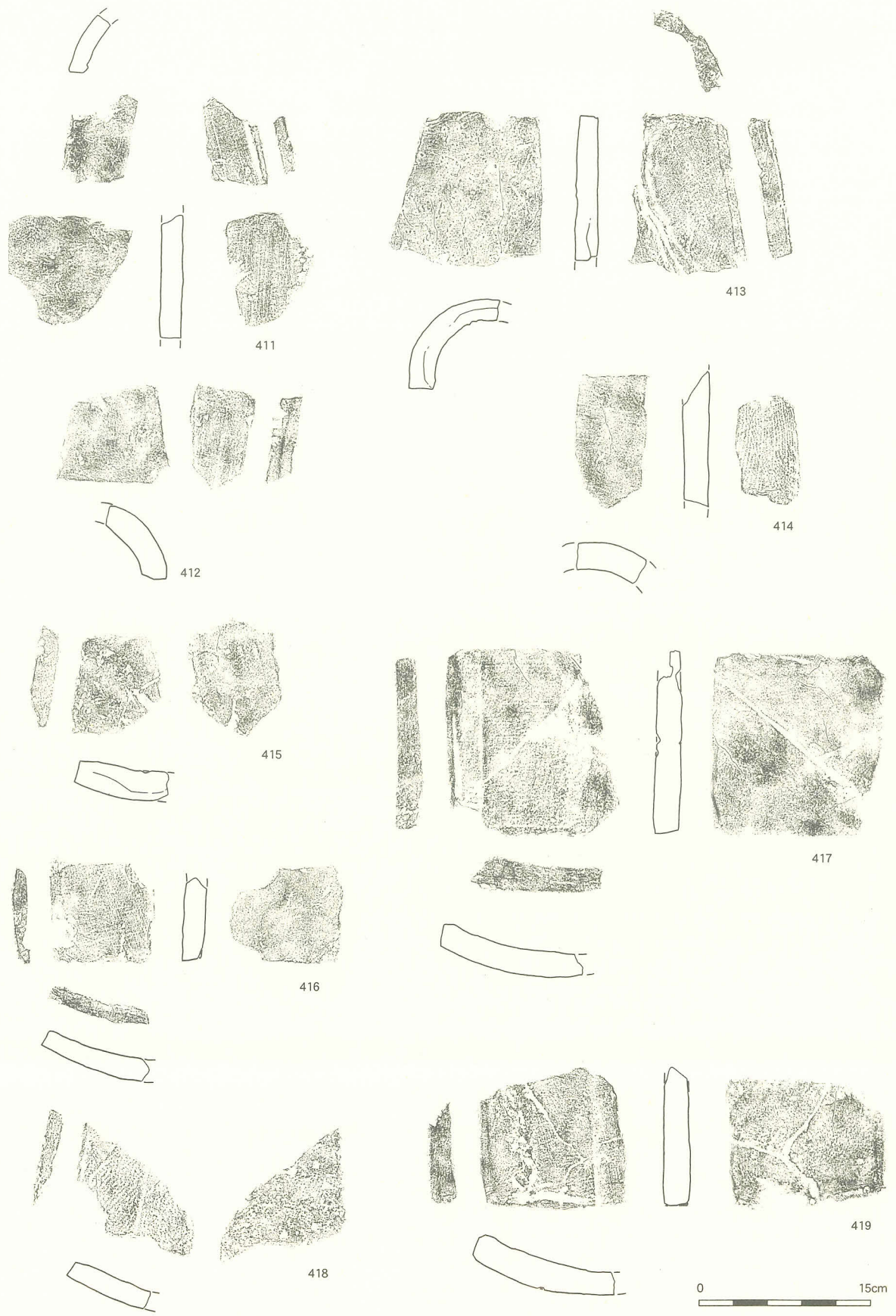
431～444 は銭貨。構成は和同開珎3枚(431・434・437)、萬年通寶4枚(433・435・438・440)、神功開寶6枚(432・436・439・441・442・444)、萬年通寶か神功開寶かいずれかに属するもの1枚(443)、計14枚である(銭種不確定を含む)。総じて腐蝕が進み、遺存状況は悪い。

431 は外縁復元外径24.2 mm、外縁厚1.5 mm、文字面厚0.7 mm、残存重量0.7 gを測る。左側を大きく欠損、1/3程度が残存する。鋳文は「○同○○」の1文字を確認。432 は内郭内径5.8 mm、外縁厚1.2 mm、文字面厚0.8 mm、残存重量0.5 g。遺存状況が極めて悪く、図化し得なかった。右上が欠損し、1/4ほどが残存するに留まる。鋳文は「○○開寶」の2文字が確認でき、神功開寶と思われる。433 は外縁復元外径26.2 mm、内郭内径6.0 mm、外縁厚1.5 mm、文字面厚0.9 mm、残存重量0.7 g。下半が欠損し、約1/3の残存。鋳文は腐蝕のためはっきりしないが、肉眼でかすかに「萬○○○」の1文字が確認できる。434 は外縁復元外径24.8 mm、外縁厚1.3 mm、文字面厚0.8 mm、残存重量0.6 g。残存は1/4程度であるが、鋳文は「○同開○」の2文字が確認できる。435 は外縁厚1.2 mm、文字面厚0.9 mm、残存重量0.4 g。残存度は1/5前後と低い。鋳文はかすかに「○年○○」と確認できる。436 は外縁復元外径27.2 mm、外縁厚1.3 mm、文字面厚0.9 mm、現存重量0.8 g。欠損し、1/3が現存。鋳文は「神功○○」である。437 は外縁外径23.1 mm、外縁内径18.0 mm、内郭外径7.4 mm、内郭内径6.3 mm、外縁厚1.2 mm、文字面厚0.9 mm、重量1.8 g。完形。和同開珎としては径が小さい。438 は外縁外径26.2 mm、外縁内径21.2 mm、内郭外径8.0 mm、内郭内径6.0 mm、外縁厚1.5 mm、文字面厚1.0 mm、重量2.8 g。完形。439 とともに遺存状況は良い。439 は外縁外径26.1 mm、外縁内径21.1 mm、内郭外径7.9 mm、内郭内径6.0 mm、外縁厚1.1 mm、文字面厚0.7 mm、重量1.8 g。完形。外縁の腐蝕が激しい。440 は外縁復元外径27.4 mm、外縁厚1.3 mm、文字面厚0.9 mm、

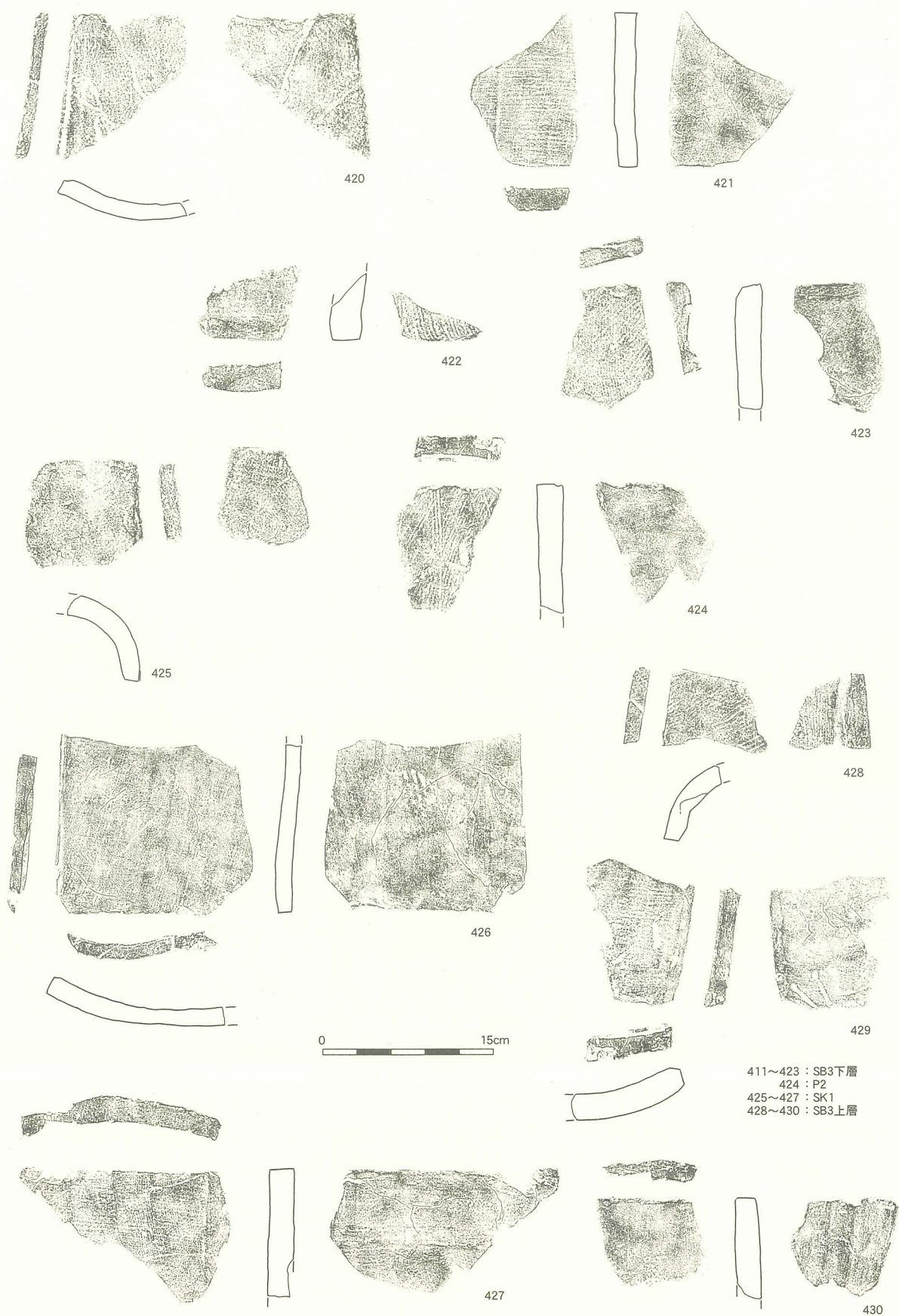


393~401、403~407 : SB3周辺下層  
 402 : SB3南辺断割  
 408~410 : 基壇構成土

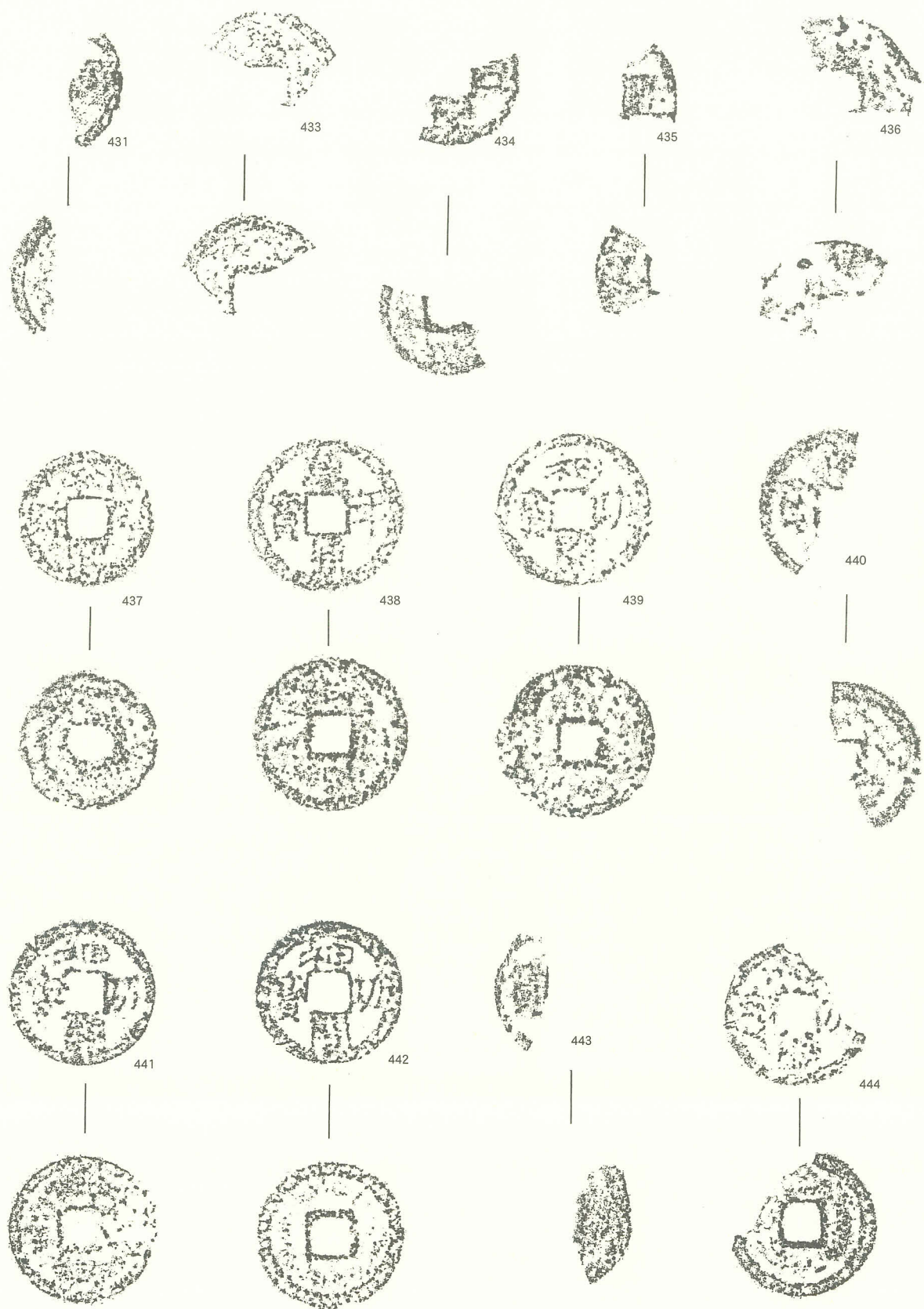
第100図 興道寺廃寺第8次調査3トレンチSB3出土土器・鉄製品実測図(縮尺1/3)



第101図 興道寺廃寺第8次調査3トレンチ出土瓦実測図1 (縮尺1/5)

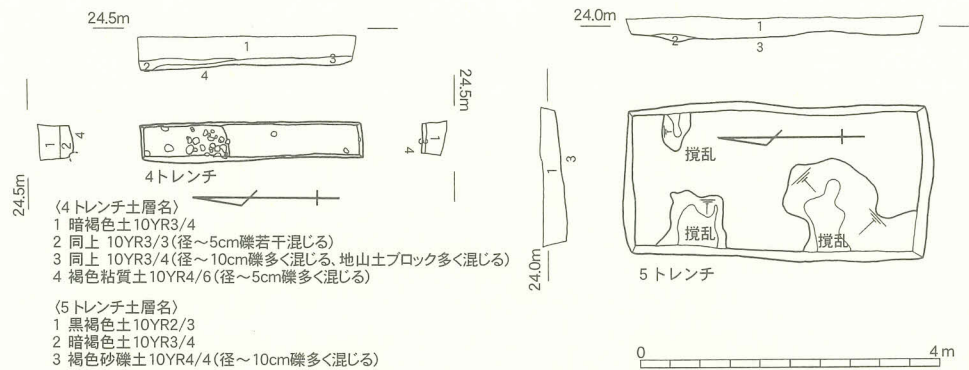


第 102 図 興道寺廃寺第 8 次調査 3 トレンチ出土瓦実測図 2 (縮尺 1/5)



第103図 興道寺廃寺第8次調査3トレンチ出土銭貨(縮尺1/1)

現存重量0.7g。1/3強が残存する。鋳文は「萬〇〇寶」の2文字が確認できる。441は外縁外径25.3mm、外縁内径20.1mm、内郭外径7.5mm、内郭内径6.0mm、外縁厚1.5mm、文字面厚0.7mm、重量2.6g。完形。442とともに遺存状況は良い。442は外縁外径25.0mm、外縁内径19.5mm、内郭外径7.8mm、内郭内径5.6mm、外縁厚2.0mm、文字面厚1.6mm、重量3.4g。完形。443は外縁復元外径28.1mm、内郭内径5.2mm、外縁厚1.3mm、文字面厚0.6mm、重量0.7g。欠損し、1/4が残存するに留まる。鋳文は「〇〇〇寶」の1文字が確認でき、萬年通寶か神功開寶のいずれかと思われる。444は外縁外径25.1mm、外縁内径21.0mm、内郭外径7.8mm、内郭内径6.3mm、外縁厚1.3mm、文字面厚1.1mm、重量1.6g。ほぼ完形。土壌の酸化鉄が付着し、腐蝕が著しい。

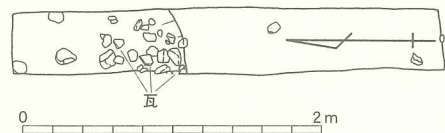


第104図 興道寺廃寺第8次調査4・5トレンチ平面図・土層断面図(縮尺1/100)

### 第5項 4トレンチ

#### 基本層序

調査地は畑地であり、地表面の標高24.4m。上層から耕作土となる暗褐色土(層厚0.3m)、礫が混じる暗褐色土(層厚0.1~0.15m)を経て、標高24.0m付近で地山層、褐色粘質土層上面へと至る。地山面に被覆する礫混じりの暗褐色土は南側からの土砂堆積を示しており、地山直上では径0.1m程の礫、地山土ブロックが多く混じる。地山層上面は南側がやや高く、北側に向かってわずかに落ち込む。この落ち込みの中から瓦小片3点が出土する。底面には0.1m内外の自然石が密集する。



第105図 興道寺廃寺第8次調査  
4トレンチ平面図(縮尺1/50)

### 第6項 5トレンチ

#### 基本層序

調査地は畑地であり、地表面の標高24.1m。耕作土となる黒褐色土(層厚0.2~0.25m)下、標高23.85~23.9m付近で地山層、褐色砂礫土層上面へと至る。地山面は東側がわずかに高い。トレンチ内で3箇所耕作攪乱坑を確認した。地山層上面に砂礫が全体的に露頭し、5トレンチ東側の4トレンチでは標高24.0mに地山上面が分布することから、地山表層の粘質土層は既に削平を受けているものと思われる。遺構、遺物ともに確認されていない。

## 第12節 小結

### 第1項 興道寺廃寺の寺域と伽藍

一連の調査で3基の基壇遺構（SB1～3）が確認されている。基壇遺構1、基壇遺構2に関しては歴史シンポジウム「興道寺廃寺の謎に迫る」において、その性格が検討され、基壇遺構1を塔基壇、基壇遺構2を金堂基壇と評価し、今後の課題として金堂基壇南辺の確認、塔、金堂以外の施設の様相把握などが指摘された（美浜町教育委員会 2006）。基壇遺構についてその後の調査内容を踏まえて再整理する。

#### 基壇遺構1

塔基壇と考えられる。第1次調査1トレンチ、第2次調査2トレンチ、第4次調査7トレンチ、第7次調査3トレンチにおいて地山層の削り出しによる基壇東西辺、南東・北東隅部と瓦溜まりが、第2次調査2トレンチ、第4次調査7トレンチにおいて基壇面から底面に拳大の根固石を備えた3基の礎石掘り方が検出された。

基壇規模は方12m、唐尺に換算して四方40尺である。地山層を基壇基底部とする。耕土直下で地山層に至ることから盛土、基壇版築の様相は不明である。基本的には基壇周囲の地山面を区画することで基壇とする。礎石は遺存しないが、0.6～1.0m前後、深さ0.2～0.35mの礎石掘り方3基の位置関係から四天柱2基、側柱1基を確認したことになる。方3間、中央間を広く取り3.6m（12尺）、両脇間2.4m（8尺）となる塔初層規模を復元する。

基壇西辺は西に標高を減じる地山面を削り出し、南北方向に比較的安定した垂直面を造り出す。この基壇西辺の高低差は確認高で最大0.4m。一方、基壇東側（東辺、南東・北東隅部）は幅0.5～0.8mの溝を掘削することで基壇内外を区画した状況が窺える。溝は深さ0.2mまで残存し、南東隅部付近に人頭大ほどの礫を2段に積む状況が確認されたが、その積み方は雑然としている。

#### 基壇遺構2

金堂基壇である。第2次調査1トレンチにおいて地山の掘り込み地業痕跡、基壇西辺瓦溜まりが、第6次調査2トレンチにおいて基壇版築が、同2トレンチ、3トレンチ、第7次調査4トレンチにおいて石列、瓦溜まりを伴う基壇東西辺が、そして第6次調査2トレンチにおいて基壇北側の削平痕跡が検出された。基壇の南北が既に大きく削平を受けており、南北規模に検討の余地を残しているが、第7次調査5トレンチ、第8次調査4トレンチまで瓦が分布することから、これらのトレンチまでは基壇北辺、南辺が至らないものとする。基壇規模は南北（間口）20.7m前後、東西（奥行）17.8m、唐尺に換算して77尺前後、60尺の規模を復元した。シンポジウム段階では南面建物を想定したが、このように東面する建物が存在した可能性は捨て切れない。

基壇面の標高は23.2～23.4m。地山面を掘り込み、標高24.0mまで黒褐色土、黒褐色砂礫土を厚く積み、さらに基壇上面まで黄褐色砂礫土、黒褐色土を互層に叩き締める版築痕跡が明瞭に残る。基壇東辺、西辺の瓦溜まり下面の標高が23.6mであることから、基壇部分は20～40cmほど地山面の掘り込み地業を行う。この掘り込み地業の痕跡は第2次調査1トレンチ南側において平面で確認できる。礎石が現存しないため建物の規模、構造は判然としない。飛鳥白鳳期の金堂に一般的な桁行3間梁行2間の身舎、四面に廂が付く建物を想定する。

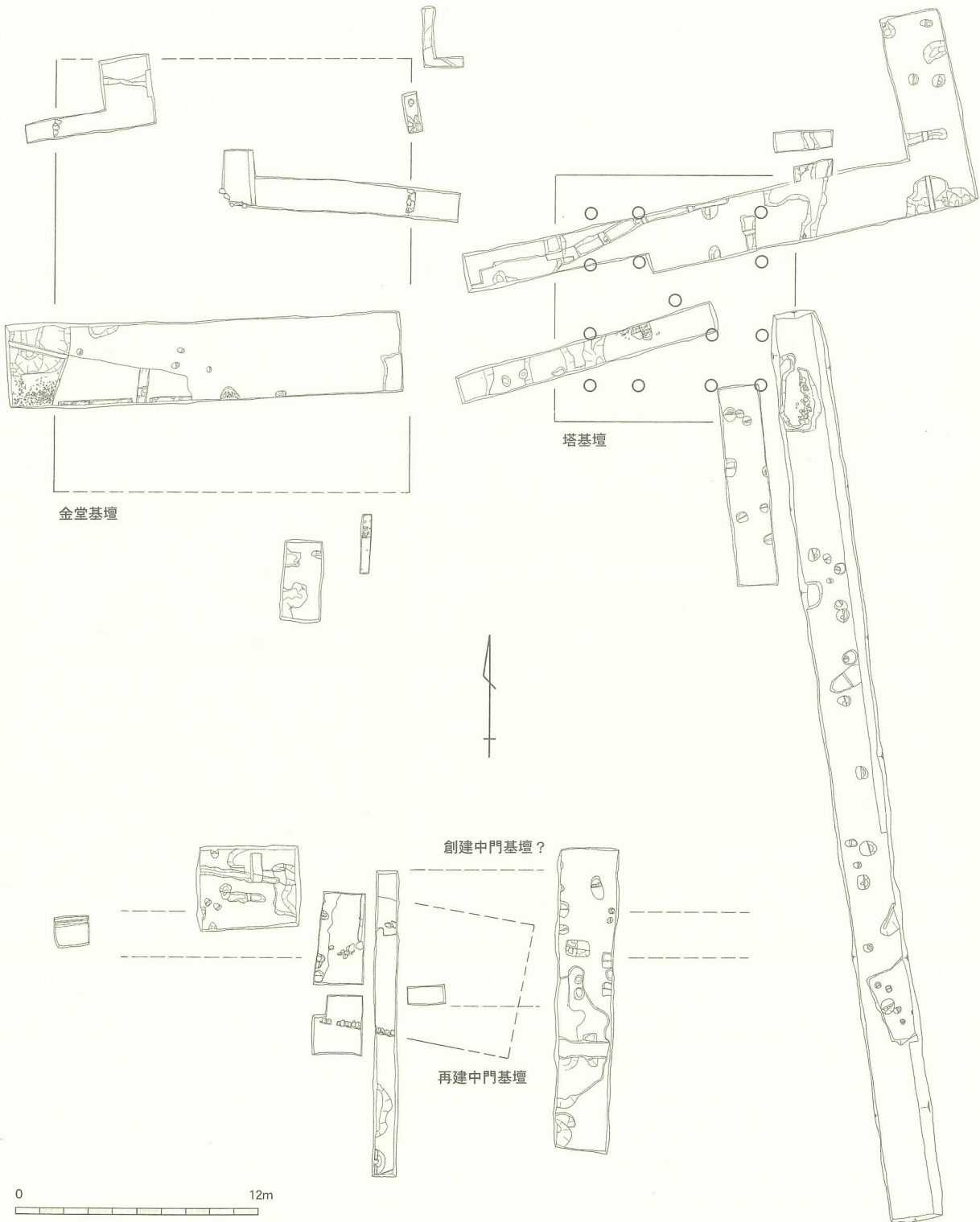
基壇東辺、西辺では人頭大以上の大ぶりの自然礫を南北に列石状に置き並べる外装を持つ。石列上端の標高は24.4m、下端の標高が23.7～23.9m。後述する軒平瓦Ⅲ型式が東辺、西辺ともに安定のための高さ調整のためか差し込まれており、少なくともこの瓦の帰属年代以後に基壇縁辺の改修が行われたものと考えられる。



基壇遺構3

中門基壇である。第8次調査3トレンチにおいて基壇西側が検出された。

基壇規模は東西（間口）9.2m前後、南北（奥行）6.7m、唐尺に換算して30尺前後、25尺の規模を復元した。礎石が現存しないため建物の規模、構造は判然としない。桁行4間、梁行3間の建物を復元する。



第106図 興道寺廃寺伽藍復元図（縮尺1/300）

基壇面の標高は24.0～24.3m。基壇北辺では地山面を掘り込み、南辺では地山面の上に盛土を行うことで地表面を平坦にし、黒褐色土を叩き締めることで構築する。基壇面において数cm単位の褐色粘土からなる版築痕跡が残る。基壇南辺下端の標高は23.6～23.65m。南辺は人頭大の自然礫を2段に積み外装を持つことに対して、基壇北辺、西辺で基壇構成土をスロープ状に地山面に連続させる。

伽藍配置については塔と金堂が東西に並び、その南方に中門が位置するものと考えられることから「法起寺式」あるいは「観世音寺式」伽藍配置が考えられるが、金堂基壇南辺、北辺がはっきりしないことからいずれかへの結論付けは留保したい。また、中門に関しては基壇方位が南北ラインから大きく西偏することから寺院創建段階の基壇とは考えにくく、基壇構成土中に瓦片、銭貨が含まれることから基壇、あるいは中門の再建が示唆される。しかし、伽藍整備段階に中門が存在しなかった可能性は低いものと考えられ、第6次調査1トレンチ、第7次調査2トレンチなど中門基壇に近接するトレンチから興道寺廃寺最古型式となる軒瓦Ⅰ型式が出土していることから、元来は金堂、塔基壇の方位に合致した基壇を伴う中門が存在したものと考えている。

これ以外に、講堂、回廊などの他の寺院施設までは調査が及んでいない。ただし、中門基壇西辺に付随する小穴2基は回廊の一部となる可能性がある。また、講堂については塔、金堂、中門の配置から考えて北側に存在する可能性が高く、講堂が位置すると思われる地点には周辺の畑地より壇状に一段高い地形が見られることから、講堂が存在する蓋然性は高い。以上から中心伽藍の規模を考えると、東西は不明であるが、南北は約70mの規模に復元される。

寺域は、畑地が広がる範囲の大半を占めるものと考えられる。第1次調査2トレンチ、3トレンチで確認された幅2.0m、深さ0.5mの溝埋土には8世紀前半の須恵器、土師器とともに小礎石状の礫が含まれ、寺院存続段階に機能していた溝と考えられる。溝の伸張方向が方位に載らないことが問題であるが、寺域南限を示している可能性がある。また、第4次調査10トレンチで確認された礎石掘り方2基と瓦、礎石状の礫を包含する溝、あるいは第6次調査7トレンチにおいて確認された側柱掘立柱建物の存在から中心伽藍の北方には僧坊などの関連施設が広く展開する可能性が高いものと考えられる。総体的に中心伽藍の北方には8世紀段階の遺構、遺物が広く分布する。

## 第2項 興道寺廃寺出土瓦

興道寺廃寺出土軒瓦は既に水野和雄氏により整理され、軒瓦Ⅰ型式：単弁八葉蓮華文軒丸瓦、三重弧文軒平瓦、軒瓦Ⅱ型式：素弁十葉蓮華文軒丸瓦、三重弧文軒平瓦、軒瓦Ⅲ型式：素弁九葉蓮華文軒丸瓦、偏行唐草文軒平瓦の3型式が見られ、Ⅰ型式→Ⅲ型式への時期的変遷が述べられている（水野1987）。重複する部分もあるが、再度整理したい。

### 軒瓦Ⅰ型式

#### 単弁八葉蓮華文軒丸瓦（120、217、358）

瓦当外縁径20cm前後を測り、瓦当を厚く作る。1+5の蓮子を配する小さな中房と、肉厚がやや乏しく平坦ではあるが、弁の輪郭を細線で画する八葉の蓮弁からなる。間弁は蓮弁の外側で連続する。外区外縁は二重圈文を巡らせ、内縁に段を持つ直立縁を作る。丸瓦凹面の広端部を未加工のまま瓦当側面に当て接合する。丸瓦の広端面が瓦当先端近くまで達する。総じて焼成が甘く、灰白色、赤褐色の生焼け状を呈する。出土点数は3点と他型式に比べて多くない。過去に表採されている資料を含め、金堂基壇南側から中門基壇周辺に分布する傾向がある。